
空を飛ぶ

林来栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空を飛ぶ

【Nコード】

N3029T

【作者名】

林来栖

【あらすじ】

鋼鉄よりも硬い棘を持つオオトゲアレチウリが、大地を覆い尽くす近未来の地球。人類はこの、最強の植物によって、住む場所を極端に狭められてしまった。しかも、オオトゲアレチウリには、レリア・ウイルスという、致死率90%以上の脅威のウイルスが寄生していた。更に、レリア・ウイルスは変異を繰り返し、ついには人間の肉体に異変をもたらす、レリア・Diiウイルスが誕生した。妹美鈴の死により、大学を中退した日野晃は、事故死だという美鈴の死に疑問を抱き、調べる。塔経市公安局が隠していた美鈴の死の

真相は、レリア・D・iウイルスに深く関わるものだった。

1 (前書き)

この小説には残酷な描写がありますので、15歳未満の方の閲覧は禁止させていただきます。

また、15歳以上の方でも、そういった描写の苦手な方は、申し訳ありませんが、お読みにならないでください。

傾いた高層ビルが切り裂いた空に、歌声が駆け上がっていく。

塔経市の中心地、真樹区。二百年前にレトロ・ウイルスの一種レリア・ウイルスの大流

行によつて廃墟となつたこの場所には、現在でも夥しい数の当時の感染者の遺体が、高層ビルの地下に眠る。

かつて真樹区は、ビジネス街として活気に満ち溢れていた。現在はその片鱗もない。まともに暮らす人々は、この場所を死都とも呼び、決して近付こうとはしない。

まさしく墓標としてそびえ立つ、当時のままのクリスタルのビル群の間を、晃のよく通るハスキーボイスの高音が、すり抜ける。

二十一歳という年齢の青年にしては小柄で華奢な体全体を、晃はリズムに合わせて揺らす。中奥区で今人気の若手歌手に似ているとよく言われる整った顔立ちを囲む長髪が、ビルを支えるかのように生えた大木の緑を揺らす風に掬われる。

「いつ聞いてもいい声だねえ」

すっかり馴染みになつた浮浪者の老人が、古ぼけて垢染みた長い外套を引きずるように近付いて来る。晃の立っている、崩れた野外ステージの周囲には、老人と同じような格好の浮浪者が四、五人座っている。

晃は淡々と歌い続ける。いつも歌うのは同じ曲だ。一年前、エアカーの事故で死んだ妹

の美鈴が好きだった、スカイボーイの『空を飛ぶ』。

妹は、晃の声が好きだと言っていた。聞いていると落ち着く、と。歌詞がいいよな、スカイボーイは」

南の端の階段に座っている、髭面の浮浪者が囁れ声で呟いた。

「『僕の想いは翼を広げ、鳶の這う大地の上を自由に飛び回る？』」

「俺らの気持ちだよ、まさに」

髭の近くに座っていた、茶色の外套の男が笑った。

歌詞の通り、塔経市の周囲は一面オオトゲアレチウリという蔓植物が這う荒野である。

漢字表記すれば大棘荒地瓜となるこの植物は、実と葉に鋭く大きな棘があり、擦れれば

薄い鉄板さえ引き裂いてしまう。人がオオトゲアレチウリの密生した群落の中を歩くのは、

まず不可能だ。

荒野に点在する街々を繋いでいるのは、低空を飛ぶエアカーのみだった。

「俺たちには、エアカーに乗る金もないしな」

「この街から出られるのは、気持ちだけ」

「晃の声は、わたしらを空へ連れてってくれる」

老人のしみじみとした声に、髭面と茶の外套の男が空を仰ぎ、頷いた。

最後のフレーズを繰り返し、晃は声を収める。ここで歌うのは、場所柄ほとんど人がいないからだった。

だが晃の歌声を気に入った浮浪者たちが、最近ではこうして聞きに来るようになった。

人に聞かせようと思って歌っているわけではないが、それでも手放しで褒められれば嬉しい。

照れくささに片頬で笑みを作りながら、晃は「ありがとよ」と小さく言った。

「なに。あんたが礼を言うことじゃないさ。俺らが勝手にあんたの歌を好きなのだ」

髭面が、人懐っこく笑う。

「そう。それに、おまえさんの『声』は、わたしらにとって、一種の薬だ。聞くと体が楽になる。絶対、寿命が十年は延びとる」

老人はおどけた表情で片目を瞑ると、「よっこらしょ」と立ち上がった。

「さて。今夜は、どこの別邸で寝るとするかな」

晃はふと空を見上げる。春とはいえ、塔経市周辺はまだ日の暮れが早い。薄く西に掛か

った雲に、太陽はすでに半分隠れていた。

晃は慌てて、黒い合皮パンツのベルトにチェーンで下げたアナログ・ウォッチを見た。

「あ、まずい。そろそろ時間だわ。んじゃまた」

晃はハーフサイズの灰色の外套の裾を翻し、野外ステージの上から飛び下りた。背後か

ら、浮浪者たちが「またな」と声を掛ける。

顔半分だけ振り向いて、晃は彼等に片手を挙げた。

1 (後書き)

自分としては、初めてのSFらしい物語です。

ちょっと地味めの展開になってしまったかもしれませんが……

最後までお読みいただければ、嬉しいです。

真樹区の外縁には、古い建物をそのまま使用した繁華街が広がっている。

二百年前の人口激減から現在まで、周期的に流行するレリア・ウイルスのせいで、塔経市の人口は一向に増えない。レトロ・ウイルスであるレリア・ウイルスは目まぐるしく変異をし、特效薬が作りにくいのが、その一因である。

当時の半分となった人々は、真樹区からこの外縁を隔てた、新しい中心地である中奥区に、多くが居住している。中心地の真樹区を放置している理由は、地下に埋葬された当時の死体からも接触感染するという、レリア・ウイルスの特異性のためだ。

健全に暮らす人々には、真樹区外縁、特にここ南外縁には、殆ど近寄らない。

ここに集まる者たちは、過去に犯罪を犯していたり、また他言できない理由で日の当たるところから転げ落ちた者である。彼等は、ビル地下に眠る忌わしき過去の記録からの贈り物に、日々びくびく怯えながら生きている。

一年前の妹の死を切っ掛けに大学を退学した晃も、まともな職場では相手にしてもらえず、南外縁で就職先を見つけた。

晃が今、アルバイトで働いているのは、『ホワイト・ウィンド』という名の、ミュージック・パブである。晃は、このパブで店員として働いている。

十年ほど前から増え始めたミュージック・パブだが、その背景に

は音楽の聞き方の変化があった。当時、精神安定効果パターンを組み込んだニューエイジ・ミュージックが全盛になった。

同時に携帯用のヘッドホンに、微弱電磁パルスと骨伝導を組み合わせて、脳の聴覚神経を直に刺激する装置が組み込まれた。この方式採用により、これまで可聴レベル外であった音域も音として捉えることが可能になった。同時に、音域が広がったことでより複雑な楽曲も増えた。

しかし、脳にダイレクトに多大な刺激を与えることは、同時にその部位の細胞に過剰な負荷を掛ける結果にもなった。

ブレイン・ダイレクト・ヘッドホンの使用者が、ある日突然、感性難聴になるという事例が相次いだ。

また、歩行中に携帯用ステレオ機器で映像や音楽を視聴し事故に遭う事例が多発。屋外での携帯用ステレオ機器の使用は、周囲の状況の把握が困難であり危険であると結論付けられた。

そのため、塔経市ではブレイン・ダイレクト・ヘッドホン、及び携帯用ステレオ機器の販売、使用を禁止した。

屋外での携帯音楽機器が全面禁止となったため、市民は自宅かミュージック・パブのよ
うな場所では、音楽や映像を鑑賞できなくなった。

パブでの選曲は、まず各席に設置された配信用機器に遺伝子コードを読み込ませて行う。

塔経市に住む全ての住民が市の中央コンピュータにあらゆる個人情報登録しており、IDコードによって書き換えや閲覧ができる。

音楽配信機器の遺伝子コードの読み込み方法は機械よって異なるが、ホワイト・ウインドに置いてある機械は、大体のものが手の静脈から読み取るシステムを採用している。

コードを読み取った機器は、コンピュータにバンクされている本人のID情報の中から、音楽配信履歴と新譜情報にアクセスする。両方をディスプレイに提示し、客は操作パネルで好みの曲を選択する。

配信機器は、店内半分を占めるスタンド席と、リスニング・チェアの二種類。その他に二つ、個室ブースがある。

選んだ曲を楽しむだけならスタンド席で十分である。リスニング・チェアは、長距離エアバスのシートのように足まで載せられる長椅子で、上半身が半円の透明セラミック・スクリーンに覆われる。

スクリーンには楽曲のビデオクリップのほか、コンピュータが自動的に音楽に合わせ選んだ映像や、客が自身で選んだ映像を映し出せる。また映画サイトへアクセスを行えば、好きな映画も鑑賞できた。音は長椅子のヘッド部分のスピーカーから流れるが、半円スクリーンは防音装置も兼ねているので、外に音が漏れることはない。

中奥区では過去に流行ったものを改良した、脳に打撃がない程度の電気信号を使用した

新型ブレイン・ダイレクト・ヘッドホンが流行り出しているという。今度のヘッドホンは音楽だけでなく、視覚神経にも働き、同時に映像もスクリーンなしでダイレクトに見ることができらしい。

真樹区の南外縁では、大多数のミュージック・パブが、中古のヘッドホンや、リスニング・チェアを使用している。ただし、非合法で営業している店は、最新型の機器を購入しているようだ。

スタンド席の客のために通常十ルクス程に落としている照明をやや明るくしてもらい、

晃は、五台あるリスニング・チェアのうち、壊れた一番右端の一台を修理をしていた。

この国が昔、奥津国と呼ばれていた時代の神話に登場する女神が座る人を抱くようなデ

ザインの硬化セラミック製のパールホワイトのリスニング・チェアの後部のパネルを開け、中に超小型自動修理機を入れる。簡易型のロボット修理屋は、人工タンパクで柔軟に動く、まるで全身が針だらけの尺取り虫のような形をしている。

ロボット修理屋は、赤外線小型カメラで現在位置と破損の有無を、晃の持ったリスニング・チェアの構造パネルに映し出す。

修理屋は、修繕箇所を見付けると、自分の能力で修復可能かどうかを瞬時に判断、可能なものはすぐに体の針を使って直し始める。そうでないものは、人がパネルで見てどうするか判断するよう促す。

リスニング・チェアは、透明セラミック部分に投影される映像が映らなくなっているのだが、今のところパネル上には原因箇所が提示されていない。

「…………断線じゃねえのかよ。単なる配線切れなら問題ないんだけど。…………違うなあ。ああ、

もう、なんで素人の俺が、こんな厄介なもん直さなきゃなんねえんだよ」

開店以来ずっと換えたことのないという、超くたびれた赤いカーペットの上にあぐらを掻き、晃は唇を尖らせる。

店に出勤した早々、店長の八木からリスニング・チェアの修理の命令が下った。

南外縁のミュージック・パブの多くは、合法、非合法を問わず、この土地を仕切るいくつかのシンジケートの系列会社の資金で出店している。

だが、ホワイト・ウインドは八木の自前の店である。

雇われ店長とは違い、自分で採配している八木は、些細な修理費でも出すのを渋る。経

営者として当たり前だといえそうだが、売り物の音響機器の修理くらいは専門家に金払

えと、店員の晃たちからすれば、言いたくなる。

今もそうだ。リスニング・チェアの心臓部の構造は複雑で、ここがだめになっているの

なら素人の晃には手に負えない。

「もう、無理だって。この先はコントロール・ブロックだし。ここがアウトなら、プロじゃなきゃ直せないって」

自動修理機は、心臓部のコントロール・ブロックへは入れない。

出口へ引き返して来る

赤い点を見ながら、溜息をついた時、晃の店内連絡用のイヤホンのスイッチが入った。

「Aブースから注文が入った。取りに来い」

イヤホンから響く八木の低音に、晃は思わず「今っすか？」と返した。

「まだ椅子、直ってないし」

「つべこべ言わずに、取りに来い。客を待たせるな」

店の中では絶対君主であるオーナー店長に逆らえる訳もない。晃

が「はい」と言うと、
八木は通信を切った。

「……人をとことん、こき使いやがってっ
イヤホンを耳から外し、晁は毒づいた。」

渋々腰を上げ掛けた晃は、修理屋をリスニング・チェアから出すと、待機指示をして立ち上がった。ふと、一番左側のリスニング・チェアに目が行った。

「いつもの人が、来てる」晃は、口の中で呟いた。

薄暗い店内では席に座った人物の顔までは、判然としない。まして、リスニング・チェア

アにはフードがあるため、誰という特定は通常できない。だが、「いつもの人」と晃が秘

かに呼んでいる人物には、他人にはない大きな特徴があった。

右腕が無いのだ。

傷口を隠すためか、暑い季節でも、真樹区の浮浪者たちと同じような、長袖の外套を羽

織っている。今も、椅子の背に凭れた姿勢の右側の袖の膨らみが全くないのが、真上のラ

イトの小さな光で分かる。

一度だけ、八木がこの人物を「麻生」と呼んでいたのを覚えている。麻生が帰った後、

好奇心からどういう人物かと問うた晃に、八木は、「幼馴染みだ」と、仏頂面で答えた。

八木の反応から、仲が良さそうとは到底思えなかったが、麻生はちよくちよく店にく

る。

本当に幼馴染みなのか？　もしかしたら、ヤバい仕事の仲間ではないのか？　などと、

勝手に想像を巡らせてみるが、さすがにそういった質問を八木にぶつけるのは躊躇われる。

そもそも、ここは真樹区南外縁。うさん臭い人間の終着点だ。八

木が過去に何をして、
何故ここで店をやっているのか、本当は麻生とどんな繋がりがあり、
何をしているのか、

詮索しないほうが身のため、という場所である。

晃は麻生から目を戻し、立ち上がると、イート・カウンターへと
向かった。

リスニング・チェアとスタンド席を使用する客は、基本的に飲食
はセルフサービスであ

る。飲み物はドリンク・マシンから、食べ物はいート・カウンター
から受け取り、好きな

席へと移動する。

南外縁に限らず、塔経市内の飲食店で店内で調理を行うところは、
まず皆無である。

飲食店だけではない、一般家庭でも、わざわざ材料を買って台所
で調理をする家は、極
端に少ない。

理由の一つは、火事を出さないためだ。塔経市に限らず、周囲を
オオトゲアレチウリに
囲まれたこの国の町や市は、水源を地下水だけという限られた場所
からしか求められない。

火事を出せば鎮火するのに水が必要になり、その分だけ貴重な水資
源を損なう。

化学薬品による鎮火という手段もあるが、薬品を作るためにも、
水が要る。レトルトや

冷凍の加工食品ならレンジで温めればよく、火事の懸念は減る。

もう一つは、輸送コストの問題である。

生鮮食料は塔経市近郊の町で生産されている。

この国の唯一の交通手段であるエアカーの燃料は、エタノールで
ある。原料は主に植物

で、麦やその他の穀類の茎や葉といった、食用ではない部分を原料

としている。

しかし、元々の収穫数が少ない穀類だけでは賄い切れないため、建築廃材や材木の端材
というようなものも使用している。

それでも、大型の運搬用エアカーを頻繁に動かすには足りない。
少ない輸送回数で食糧
を効率良く運ぶために、産地で加工して運搬するようになった。

スタンド席の一番右端にあるイート・カウンターに着くと、晃は
中に首を突っ込んだ。

「Aブースの注文、取りに来ました」

ややあつて、八木が奥から長身をぬつと出した。

髭面で大柄な八木は、強持ても手伝つて威圧感がある。こういふふうに出て来られると、

小柄な晃は、いつも一瞬ぎくりと硬直してしまう。

「クラッシュ・ソーダ一つ。とつとと持ってけ」

ぶつきらばうにカウンターに置かれたソーダのグラスを、晃は僅かに顔を顰めて受け取ると、軽く頭を下げて手近の盆に乗せた。

二つの個室ブースは、A、Bという表記になっている。個室は料金が高い分、様々な特別サービスをつけている。飲食のルームサービスも、その一つだ。

だが晃は、このサービスが苦手だった。

ブースは狭いながら、リスニング・チェア一台とミキシング・マシン、それとテーブル

が一つ、備え付けられている。内鍵を掛ければ、完全な個室である。

ミキシング・マシンは、客がその場で作った音楽や映像を編集、すぐにネット配信できるようにセットアップされている。

また、ブース内のリスニング・チェアにはフードがない。ブースの壁面全体がフードと

同じ透明セラミックのスクリーンになっており、映像を選択すると壁面全体に投影されるシステムになっている。

晃がルームサービスが苦手なのは、セクハラまがいのことを客にされるからである。

一度は、女性客の注文でルームサービスに入ったのだが、ドリン

クをテーブルに置いた
手を取られて彼女の胸元へと押し当てられた。慌てて振り払って飛び出した。

また、ある時は男性客にしつこく絡まれ、危うく殴りそうになった。

もう一人いるバイトの店員は、そう体格も変わらないのに、殆ど被害に遭わないという
のを聞いて、やはり小柄で華奢な体格だけでなく、女顔なのが災いしているのかと、晃は
トラブルに遭う度に憤然とする。

クラッシュ・ソーダの入った透明なグラス一つを盆に乗せ、晃は嫌々ながらAブースへと向かった。

個室は全て、オートロックになっている。出会い系のパブではないので、女性同伴での
施設は原則禁止である。従業員のつけているイヤホンは、ブースのインターフォンにも繋がっている。晃は手首の操作スイッチを入れた。

「ご注文の品をお持ちしました」

「今、開けまーす」

返って来た聞き覚えのある呑気な声が、晃の脳裏に嫌な予感を浮かばせる。

程なく扉が開いた。盆を掲げて中へ入った晃は、予想した相手か座っていたのに、思い切り眉間に皺を寄せた。

「……なんで来るんだよ、浅野」

リスニング・チェアの端に腰掛けていた浅野由和は、晃を見上げると、人の良さそうな長い顔を、にっと崩した。

浅野は晃の大学の同級生である。温厚で世話好きな性格で、退学した後も何かと晃を気にしてくれている。

「いや、お客だから。俺、ここで自分の曲を発信してるし」

浅野は操作卓の脇に立て掛けた楽器のケースをぼんぼんと叩いた。バルバットと呼ばれる五弦の楽器は、レリア・ウイルス大流行以前に作られたもので、

近年また若いミュージシャンの間で流行している。

涙滴形の木製の胴体に太く短いネックが取り付けられており、一組二本の五弦を張り、人差し指にセラミック製の爪を着けて弾く。

胴体の内部には音色を変えるための小型コンピュータが仕込まれていて、それを表面下

部のパネルで操作する。録音する時には、内部のコンピュータで電子信号に変換された音を、無線でミキシング・マシンに飛ばす。

浅野は、大学内のインストロメンタル・グループの一員として活動していた。

「中奥区立大のエリートが、こんなところで音なんか作るなよ」

バルバットを黒革のハードケースから取り出す浅野に、晃は文句を言った。

「大学内にミキシング・ルームがあんだろ。サークル用の。そこでやれよ」

「ああ…、あそこいつも一杯なんだよな。ほら、他の音響サークルと共用だから」

「だったら、中奥区のパブへ行けよ。現役は割引が利くだろ、ジエノバとかなら」

木製の胴体に水色で塗装を施し、その上から銀粉で模様を書き込んだ、凝った装飾のバルバットを抱えた浅野は、内部のコンピュータを起動させずにポロン、と弦を指で弾いた。

「日野は、俺がここへ来るのが、そんなに嫌なの？」

「嫌っていうかさ……」どう答えたものかと、晃は長髪の後ろ頭を掻いた。

どんなことでも曖昧になるのは、気持ちが悪い。何事も明確にしたがる晃の性格は人間

に対しても同じで、嫌いな人間には、きっぱり態度で表してしまう。おかげで、友人と呼

べる人間は数えるほどしかない。

晃とは逆に浅野は、見た目どおり至極温厚な人柄で、誰からも好かれている。晃の記憶

の中で、浅野が声を荒げて怒っている場面は、一度もなかった。

「大体、なんで俺にかまうんだよ。浅野は俺よりずっと友達が多いじゃねえか」

浅野が自分を気にする理由が分からない。晃がこの店に勤め始めてから、浅野は講義や

サークルの合間を見つけては、やってくる。

数いる友人から色々誘いも受けているだろうに、どうしてそこまでして晃の顔を見に来るのか。

また水色のバルバットを鳴らし、浅野は晃を見上げた。

「日野が心配なんだよ。……大学も、あと一年で卒業だっていうのに、理由も言わないで辞めちゃっただろ」

「それは……」

他人に言える理由ではない。

一年前、晃は美鈴の死を切っ掛けに大学を辞めた。

美鈴は大学に入学したばかりだった。中奥区色羽にある鴻女子大に入り、これから大学生活を満喫しようという矢先だった。

サークルの先輩が所有しているエアカーで、中奥区から登詩磨区の市立大図書館へ向かう途中、運搬用大型ツインエアカーと接触し、墜落した。当時は、ネットニュースの一面にもなった大事故だった。だが、場所が真樹区東外縁だったため、美鈴を含む学生六人が死傷した以外、公式発表では巻き込まれた者はいなかった。

亡くなったのは、運転手だった美鈴の先輩と、助手席に乗っていた美鈴の二人。墜落した時に、車が前方から歩行路面に突っ込んだためだった。美鈴たちはすぐに市内事故専用の無人救急エアカーで塔経市の病院に搬送された。美鈴は、胴体こそエアークッションに守られたものの、車体前面下部とシートに挟まれた両足は切断されていた。

連絡を受け慌てて大学から病院に駆け付けた三番目の兄と晃は、処置に当たった救急外来の医師から、失血死だったと告げられた。

市の規定で、事故遺体は一度、正確な死因解明のために解剖に回される。しかし、三日後に帰って来た美鈴は、内臓がすべてなかった。

即刻、晃の父は公安局に抗議した。解剖は義務としても、遺族の許可なく体の一部を摘

出するのは人権問題なのではないか、と。

しかし、塔経市公安局の担当官は、父の抗議を無視した。どころか、父が勤めていたアンティーク家具製作会社に圧力を掛け、父を退職に追い込んだ。

いきなり職場を追われた父は、一人娘を失ったショックと重なり、倒れてしまった。父

だけではない、製薬会社に技師として勤めていた次兄も、大学院生の三番目の兄も、会社と学業を追われた。

晃も、表向きは自主退学になっているが、実は大学事務局から退学要請が来ていた。しかも、自主という建前にすれば既に納めていた半年分の授業料は返す、という条件つきだった。

どうやら市は、美鈴の体を、秘密にしなければならぬ何かに使っている。そのために、遺族の抗議が邪魔なのだ。

市の意図を察して憤った晃は、事務局の申し出を蹴ろうとした。だが、それは兄二人に止められた。心労で倒れた父と、看病に疲れている母にこれ以上の苦勞を掛けるな、と。

晃は兄たちの言葉を容れて、不承不承ながら自主退学をした。しかし心中では、未だに納得していない。どうして美鈴の遺体は、理不尽に切り刻まれねばならなかったのか。その理由を、どうしても知りたい。

己の胸の内の蟠りに思いを馳せて黙り込んだ晃を、浅野が不思議そうに見上げる。

「日野？」

「ん？ ああ、悪い」

「まあ、言いたくなければいいけど」

浅野はバルバットの内蔵コンピュータを起動させる。同時に電源を入れたミキシング・

マシンが、無造作に掻き鳴らした弦に反応し、壁面のセラミックに虹色の模様を浮かび上がらせた。

「今さあ、卓郎と一緒に新しいミュージック・グラフィックの試作やってるんだよ。最新

型のブレイン・ダイレクト・ヘッドホンを改良して、ダウンロードした曲の音程と音色に合わせて、グラフィックが変化するように」

浅野の指が、第五弦の主弦を鳴らす。ミキシング・マシンがまた虹色を壁に描く。

「今までののは、音がすれば、特定のグラフィックがその音に反応するように設定されてる

だけだったろ？ でも、今、俺と卓郎が考えてるのは、例えば、複数の音のそれぞれに色

や形を合わせて、それが音楽に合わせていっぺんに現れるようなタイプのやつなんだ」

「ふうん。……けど、それだと、映像がうるさくなりすぎねえ？」

思わず食い付いてしまい、晃は内心で後悔する。

浅野は「待ってました」とばかりに、身を乗り出した。

「そこだよ。だから、ボーカルの声をメインにして、その音色で全

体のグラフィックを纏

めるようにしよう、って作戦なんだけど、それがなかなか、いい音色のボーカルがいなくてさ」

「……で？」なんとなく先が読めた晃は、むっとして腕を組んだ。

浅野は、にやりと笑う。

「日野、ボーカルやらない？」

「嫌だ」

「そんな、即答しなくていいじゃないか。聞いたよ、スカイボ
ーイの『空を飛ぶ』」

浅野はいたずらを仕掛ける子供のような顔で、晃をちらりと見た。
なんで知ってるんだ。晃は驚いて目を見開いた。

「びつくりした？ 実は、真樹区あの辺りに卓郎と音源を探しに
行ったことがあって、

その時、野外ステージで日野が歌ってるのを偶然、見かけたんだ」

他人に、特に大学の知り合いなどに聞かれたくないからこそ、真
樹区の危険区域近くま

で出向いて歌っていたのに。

偶然の神というのは、こつも皮肉屋なのか。

「あのステージではほぼ毎日、歌ってるんだろ？ いい声してるよな、

日野。いろんなボ-

カルがいるけど、俺の聞いた範囲じゃ、日野より特徴のある声の
人は聞いたことないよ」

弾んだ声で捲し立てる浅野を、晃は口角を下げて睨んだ。

「そんなに褒めても、うんとは言わない」

「えー、もつたいないなあ」

浅野は苦笑しながら、ぼろんぼろんと弦を弾く。弱い音色が薄い
虹を、セラミックの壁

に描く。

「俺は、日野の声は、アデル杉山よりいいと思うんだけどなあ。配信したら即、売れると思うけど」

アデル杉山は、三百年前オトゲアレチウリの大繁殖によって国が壊滅した、西大陸の

イーデルランド人の血を引く若手の歌手で、晃と同じような高音のハスキーボイスを売り

にしている。ネット・ミュージックプレスでは実力派として評価が高い。

「別に、俺はスカウトされたいとか、売れたいとかっていうのは、考えてない」

「うーん……」

浅野は弦を止め、バルバットの涙滴型の胴体を抱えた。

「……でも、歌うのは好きなんだろ？ ほぼ毎日、歌ってるんだから」

確かに歌うのは好きだ。しかし、スカイボーイを歌っているのは、妹への手向けであり、

また、理不尽な扱いを受けた、美鈴の遺体の謎の真相を必ず突き止めてみせる、という誓

いでもある。

「とにかくさあ、嫌でもいいから、一度だけ付き合ってみてよ。もしかしたら、それで一

緒にやるの、気に入るかもしれないじゃない？」

「十中八九、ねえと思うけどな」

晃は盆を取り上げて踵を返した。

ブースの扉を潜る手前で、腰に下げたアナログ時計を見る。そろそろ今夜のステージを勤めるバンドが店に入る時間だった。

ミュージック・パブでは、店にもよるが、配信音楽を楽しむ場を客に提供するだけではなく、生の演奏を聴かせるところもある。ホワイト・ウインドもその一つで、小さいながら、そのためのステージも設置している。

バンドが到着すると、店員は店の奥のメイン・ミキシング・マシンを起動させ、ステージの集音板全体の調整をする。

五百年前まではバンドの音を拾うのはマイクやコードだったが、現在はステージの壁面全体が集音装置になっている。ホワイト・ウインドのステージの集音板は、ピコミクロンのコンピュータ・チップを織り込んだ布を何枚も張り合わせ、三センチ角の板状にしたものである。

コンピュータ・チップがぶつかって来る音を瞬時に受け、解析して、ミキシングに流し込む。人の脳でいうなら、聴覚ニューロンの役割をしている。集められた音はミキシング・マシンが自動調整し、スピーカーである、ブースを除く店内全体の壁面から流れる。また、客の要望に応じてスタンド席のヘッドホンや、リスニング・チェアのヘッド部分にも音を流すことができる。

「やばい。あんまり時間がない」

本日のミキシング起動当番は晃だった。

急いでブースの扉を開け、フロアに出たところで、八木からの通信が入った。

「今、高藤区の西でエアーバスの事故があった。今日、来るはずのバンドが、そのバスに

乗り合わせていて、一人が怪我していると連絡が来た」

エアーバスの事故。晃は美鈴のことを思い出し、どきりとする。

「それじゃ、ステージは……」

『おまえ、穴を埋めろ』

「は？」

なんで、と晃が聞き返す前に、八木は通信を切ってしまった。

「なんだって……？」

穴を埋めろ、とは「おまえがステージに出ろ」という意味か。唐突な命令に、晃は頭を抱える。

「どうかした？」

扉の近くから動かずにいたのを不審に思ったらしい浅野が、ブースから顔を出した。

「あ、いや、なんでもない」

「そう？」長身の浅野は、上から覗き込むように晃の顔を見詰める。

「なんでもないならいいけどさ。日野、困ったって顔してるよ？」

本当は困っている。この店で店長の八木の言うことは絶対だ。だが、いきなりステージをどうにかしろと言われても、自分にできるのは、歌うことぐらいだ。

そう考え、晃は、あつ、と思った。浅野はバルバットを持ってきている。先刻の申し出

もある。一人で歌うより、浅野と組んでしまうほうが、格好もつく。

「なあ、浅野。俺の歌を聞きたいって、本気？」

「もちろんだよ。なに、組んでみる気になった？」

「え、ああ……。一回だけ、試しになら」

まだ事情を知らない浅野は、「やった」と手を打って喜んだ。

「いつがいい？ 俺明日なら三限で終わりだから、ジエノバに卓郎たちも呼んで……」

「いや、今日。ここで」

「今？」

浅野が驚いて聞き返す。それはそうだろう。さんざん嫌だとぬかしていたのに、突然、

手のひらを返したように、しかも今ここで歌うと言い出したのだから。

「実は、今日これからステージに出るはずだったバンドが、エア―バスの事故で来られな

くなったんだ。で、店長が別のバンドを手配するまでの繋ぎを、俺にやれって言うててさ

……」

「ああ、そういうことなんだ。それで日野、困った顔してたんだ。いいよ、俺は。日野と

組めるんだったら、何だって」

浅野は笑って「ちよっと待ってて」とブ―スへ戻った。

間もなく浅野は、バルバットを手に出てきた。

「悪い。なんだかんだ言つといて、結局、巻き込んで」

「気にすんなつて。じゃ、行こうか」肩を叩かれ、晃は「おう」と小さく返した。

晃がバンドの穴埋めをすることになったため、ミキシング・マシンの起動は別の店員が代わった。

今日の出演を予定していたバンドは、南外縁で人気の高いアマチュアバンドで、二十代

から三十代にかけて多くのファンがついている。ネット配信ランキングでも、アマチュアながら中奥区のプロを押さえ、最近ベストテン入りしていた。

つい先刻まで、がらがらの空白だらけだった店内は、店のサイトを見てバンドが出演する時刻に合わせて入店した客で、ほぼ満杯である。

客の数が多くなると、リスニング・チェアは自動でリクライニングを戻し、セラミック

・フードを背もたれに畳む。さらに客の了解を得て、八木がリスニング・チェアを、手で、一台ずつ右端に縦に並ぶようコンピュータを打ち込んでいく。

客を乗せたまま静かに移動するリスニング・チェアの開いた位置に、八木は手早く丸椅子を並べる。

この店では、こういった作業はほとんど人力である。

中奥区の、たとえばジェノバのような有名なミュージック・パブでは、生演奏の際邪魔

になるリスニング・チェアの片付けや配置換え、床面収納などは、

店内全てを管理する学

習型のメイン・コンピュータが、全て行う。

が、真樹区南外縁のしがたない個人経営のホワイト・ウインドには、そんな設備はない。

浅野をステージの袖に残し、晃は八木の作業を手伝う。並べられた先に客が次々と椅子

を埋めていくのを横目で見ながら、晃は自分が上がっているのに気が付いた。

「やばい……。こんな大勢の前で歌ったことなんて、俺は一度もないぞ」

満杯の客が収まったところで、店長からバンドが事故に巻き込まれて今日の出演はなくなった、というインフォメーションが流された。

客のブーイングが上がる中、晃と浅野は代わりのバンドが来るまでの繋ぎだという八木の説明に押され、ステージに上がる。

照明を落とした店内でも、入口に近い辺りの客が出ていくのが見える。それは仕方ないよな、と思いつながら、晃はステージ脇に残っていた丸椅子を二つ持ち出し、間隔を少し開けて、中央に設置した。

バルバットを抱えた浅野が「ありがと」と小声で囁く。

大学のサークルの演奏でさすがに慣れているのか、浅野に上がっている様子はない。落ちて着いている浅野に、晃も緊張の糸が解れてきた。

どうせ、客は自分たちに期待はしていないのだ。だったら、気楽に歌えばいい。

腰掛けた浅野がバルバットの内蔵コンピュータを起動させる。両耳につけたミキシング

・マシンに直結しているイヤホンで、音を確認する。
晃も声を出して確認した。

「ワン・ツー」

浅野が歌い出しの合図を送ってくる。事前の打ち合わせなどしてない。が、曲は決まっている。スカイボーイの『空を飛ぶ』だ。

晃は、ニューエイジ・ミュージックの流れを汲むスローな歌い出しを、静かに、しかし、強い気持ちで歌う。

「『緑の鳶の海の中に、僕らは生きている……』」

途端、客のブーイングと話し声が止んだ。

トレモロを混ぜた浅野の柔らかいバルバットの音色に絡む晃のハスキーボイスが、清冽な詩を刻むように流れる。

ステージを正面にした店の左右の壁面に吊るされたカーテン状のディスプレイに、ミキシング・マシンが選択した映像が映し出される。青を基調にした幾何学模様の光が晃の声とバルバットに反応し、踊りながら仄暗い室内を、微動だにせず歌に聞き入る客たちの表情を照らす。

曲が終盤になり、浅野のバルバットが短いソコを入れる。それが済み、晃が最後のフレーズを歌い出した時。突然、入口付近の客が騒ぎ出した。

ざわめきは驚愕の声を伴い、高波のようにステージのほうへと迫ってくる。

歌を止めずに様子を窺っていた晃の真正面に座っていた女性客が、背後を振り返った途

端、悲鳴を上げた。

女性客が飛び退いたところに、一人の少女が現れた。

丸椅子を片手で退けた少女は、肩で息をしながら、すつくと晃の前に立った。

耳が隠れるくらいで切り揃えた素直な髪は、青い模様がはっきり映る白髪。内側から光

っているように見える両眼は、血のように赤い。

明らかに塔経市に住む他の人間とは、色彩が違う。しかし晃が最も驚いたのは、少女の持つ色ではなかった。

小柄で華奢な体を包む白いワンピース。薄暗い店内の明かりでも、脇腹から流れ出た鮮

血が少女の下半身をべっとり覆っているのが分かった。

あまりの姿に、晃は歌を忘れる。浅野のバルバットの音が止んだ。つかの間の沈黙の中、少女が呟いた。

「歌を……、続けて……」

少女の言葉に、晃ははっとなった。弾かれたように少女の側へ駆け寄る。

ホワイト・ウインドのステージは、客席との段差が五センチほど

しかない。晃が駆け出すと同時に、少女の体が仰け反った。

ゆっくりと、スローモーションのように倒れていく細い体を、晃は腕を伸ばして掴まえ

ようとしたり。だが、あと数センチ、少女に指が届かない。このままでは少女は床に背を打ち

ち付ける。そう思った瞬間。少女の背後から現れた影が、頽れていく背を抱き留めた。

左腕一本でがっちり少女を支えた男は、麻生だった。

「貧血だな」八木よりもさらに深い声が、晃の間近で響いた。

「病院に運んだほうがいい」

「その前に一度、奥へ運んでくれ」

いつ来たのか、麻生の背後に八木が立っていた。

「救急エアカーは、ここらじゃ呼んでもすぐには来ない。ここで待たれるのは、店の迷惑だ」

八木の冷静な言い分に、麻生は「分かった」と真顔で頷き、晃を振り返った。

「悪いな、この娘を運んでやってくれ。俺はこの通りなんでな」

麻生は膨らみのない右袖を上げてみせた。晃は少女の背を左腕で、右腕で足の下を支え

ると、立ち上がった。

「それじゃ」と背を向けた麻生の体から微かに香ってきた匂いに、晃は微かな不快感を覚えた。

甘い花のような匂いで、真樹区の野外ステージで歌っている時も、時折この匂いに出く

わす。決して不快ではない。だが、この匂いを嗅ぐと、晃は訳もななく居たたまれない気分になる。

いつものように襲って来た、宙に放り出されたような不安定な気持の正体が知りたくて、晃は自分の脇をすり抜けて玄関へ向かう麻生を振り返る。が、声を掛ける間もなく、麻生は店を出て行ってしまった。仕方なく、晃は少女を抱いてバックヤードへ向かった。

バックヤードは、カウンター席の奥になっている。

晃は少女を横抱きにして、そう広くない室内へ運び込んだ。休憩用の長椅子の上に散ら

かっていた携帯ゲーム機や雑誌を、浅野が片手で手早く退けてくれる。

晃は、少女の体を椅子に下ろした。白色蛍光ランプが照らす白い髪に囲まれた細い顔は、

貧血のせいだろう、全く赤みが失せている。白いワンピースの腹部から大腿部を染め上げ

ている、乾き始めた血液が、明るいうらみを浴びて、いつそう生々しく見える。

苦しいのか、薄い胸の膨らみが忙しなく上下している。

「大丈夫かな？」浅野が、晃の背後から少女の顔を覗き込んだ。

「早いとこ、救急車を呼んだほうが……」

「そいつは止したほうがいい」

八木が、備品棚から大判のタオルを数枚、出して来た。

「この娘の怪我は尋常じゃない。間違いなく、何かやばい問題に巻き込まれてるって体だ。」

そんなやつを救急センターなんかを送ったら、それこそ相手に居場所を知らせてるやるよ

うなもんだ」

晃は、八木の長身を睨み上げた。

「だったら、どうするんですか？」

「この近くに俺の昔からの知り合いの医者がある。もっとも、みごとなモグリだがな。腕

は間違いない」

「そこへ連れて行くんですか？」

「いや。怪我の度合いを言ったら、動かさないほうがいいから、往診に来てくれると」

八木は無表情に少女を見下ろしたまま、晃にタオルを渡す。

「俺は客の応対に戻る。晃、おまえは医者が来るまで、この娘の看病してろ」

言われなくてもそうする、と内心で文句を言いながら、晃は少女の体にタオルを掛けた。

「俺も、一緒にいるよ」

バルバットを長椅子の脇へ立て掛けて、浅野が少女の傍らに屈む。八木が片眉を吊り上げて浅野を見た。

「あんた、中奥の大学生だろ。こんな事件には関わらないほうがいい」

「困ってる人がいたら助ける。怪我人がいたら手当をする。普通の人間のすることじゃな

いんですか？ 俺は今は、手が空いています。やれることやって、なにが悪いんですか」

温厚な浅野が厳しい表情で言い返したのに、晃は少し驚いた。

八木は肩をそびやかすと、横目で浅野を睨んだ。

「若いな。ここじゃ、そんな正論は通用しないって、忠告してるんだ」

「通用するかしないか、してみなければ分からないでしょ？」

あくまで負けない態度の浅野に、八木はふん、と鼻を鳴らす。

「好きにしろ」と晃たちに背を向け、八木はバックヤードから出て行った。

「ずいぶん、尊大な人だね。ここの店長って」

浅野は硬い表情を崩さぬまま、店に続く扉を睨み付ける。晃は少女の上に視線を落とし

た。

確かに八木は、いい人間というのには遠い人柄だろう。だが、あ

の性格だからこそ、南

外縁で生き抜いて来られたのだということも、晃はよくわかる。

「まあな。オーナー店長だから、あれくらいきつくないと、「こころじゃやってけないんだ
ろうな」

ふうん、と浅野が納得したようにならないような返事をする。

その時、バックヤードの扉が開いた。入って来た人物は、昔ながらの膝まで丈のある白いドクタースーツを着ていた。

近年の医師は、大方が動きやすさを重視した、体にフィットした上着とズボンのツーピースを着ている。色も白というのは少なく、花緑青か青緑が主流である。

晃は、今時ちよつと貴重な、古めかしい出で立ちの医師を、思わずまじまじと眺めてしまった。

麻生といい、この医師といい、八木の知り合いには妙な人間が多い。

医師は晃の不躡な視線に気づき、目を向ける。意外と若い顔が、真面目な声で尋ねた。

「怪我人は、この女の子ですか？」

「あ、はい」と、浅野が答えた。医師は黙って頷くと、少女の側に足早に寄る。

首に手を当て脈を採る。続いて傷を診るため、晃が掛けたタオルを退けた。

服の下半分を染めている血を確認し、医師は眉をひそめた。

「服を、切らなきゃならないな」

医師は、これも今時では珍しい、往診用の黒い革靴の金具を外した。中から大きなハサ

ミを取り出す。どうするのかと見守っていた晃たちの目の前で、医師は少女の白いワンピース

ースを無造作に切り裂く。

「傷口に布が貼り付いてしまっている。すみませんが、このタオル

を濡らして来て下さい」

剥いだタオルを渡されて、晃は慌てて休憩室脇のキッチンに飛び込んだ。

流しに、タオルを突っ込む。水が貴重な塔経市では、カランの切り替えが通常とミストになっている。タオルのような生地を濡らす場合には、普通はミストを使用する。

十分に濡らして戻ると、医師は貼り付いた服の上からタオルを当てた。乾いた血が水分を含んだところで、ゆっくりと捲り上げる。

服の下から現れた少女の細い体は、脇腹から下腹にかけて、ざっくりと切られていた。

桃色の大腸が僅かにはみ出して見えるのに、晃は生理的嫌悪を覚え、手で口を塞ぐ。

「この傷で……。よくその場で失神しなかったものだ」

医師は内臓の損傷と、少女の意識がほとんどないのを改めて確かめると、鞆の中から今

度は手術用の手袋と、縫合用のステープラーを取り出した。

「すみませんが、どちらか助手をお願いします。思ったより裂傷の範囲が大きいので」

「あ、じゃあ、俺が」

浅野が手袋を受け取り、少女の傍らにしゃがむ。医師は浅野に傷口を摘んでいるように指示した。

かちん、という軽い音を立てながら、医師が手早く傷を縫合していく。針に使われている物質はビタミンとコラーゲンの化合物で、時間が経つと人体に吸収され、なくなってしまう。

傷を塞ぐ作業は、ほんの十分ほどで終了した。

医師はもう他に傷がないか調べ、晃に先ほどのタオルで少女の体を拭くように言う。

場所を空けてくれた浅野に代わって、少女の側へ膝を着いた晃は、華奢な体を濡れタオルで、ゆつくりと拭った。

見知らぬ女の体を触っているのに、なぜか不思議と、いやらしい気持ちにはならない。

晃も成人男子である以上、年頃の娘の裸体に反応してもおかしくない。が、この少女の体には、性的な感情よりも、幼子に対する愛しさや懐かしさが、強く込み上げてくる。

自分の気持ちの不可思議さに惑いつつ、晃は少女の肌にこびりついていた血糊をあらかた拭き取った。

すっかり綺麗になった少女の体を見て、晃は驚いた。たった今、縫合した裂傷の他にも、白い体には無数の縫合の痕があった。明らかに手術

の跡と思われる、真っすぐに切られた古い傷は、胸や腹部を縦横に走っている。

「これ、は……」

「施術の痕だけど、ずいぶんと箇所が多いですね。切開の仕方から見て、多臓器移植じゃないかと思えますけど」

疑問を明確に口にしなかった晃に、医師は少女の傷に接合促進剤と除菌剤付き粘着ガー

ゼを貼り付けながら、淡々と答えた。

「なにか、重篤な病気だったと?」

「こういった施術ケースですと、普通は考えられますが……。詳しくはこの娘さんを精密

検査してみないことには分かりませんね」

動けるようになるまで二、三日はかかる、と医師は言つて、往診用の革靴を持ち上げた。

「とにかく今は動かせないのです、このままに。なるべくなら、誰か一人は付き添っていたほうがいいんですが。その辺りの話は、僕から八木さんにしておきます」

言い置いて出て行つた医師の背に、晃と浅野は同時に「ありがとうございます」と頭を下げた。

中奥区逢沙府。ここは中高層の集合住宅が主な塔経市の住宅区には珍しく、一戸建てが並んでいる。

一戸の区画は広く、二百坪はある。前庭を広く取り、そこに四季の花々や灌木を植える。

家屋は赤茶色のレンガ風の強化耐熱耐震材をふんだんに使ったネオ・アンティーク。前庭を望むテラスのあるこの建築は、塔経市民の憧れである。

ここに住めるのは市のキャリア公務員か、一部の成功者だけである。大半の一般市民は、よくてもフラットと呼ばれる民間会社運営の高級高層集合住宅住まいだ。

さらに所得の低い者たちは、市の供給する賃貸の三LDK中層アパートメントか、三階建てのメゾンに住んでいる。

住める土地が限られているこの国では、自治体の権限が恐ろしく強い。土地に限らず、ライフラインに関しては全て、地方の公務員が握っていると言って過言ではない。

晃が一年前まで住んでいたのも、三LDK賃貸である。晃の一家は六人家族であったため、五人家族以上に適応される、多人数家族特例で二戸を借りていた。晃は兄二人とともに、両親と妹のいる部屋の隣に住んでいた。

三LDKといっても部屋割りはわりと広い。リビングは二十畳あり、各部屋は八畳の広さがあった。

だが一年前の美鈴の事故で、儉しくも快適な生活も終わった。現在、晃の一家が暮らしているのは、南外縁の古いビルである。

元は貿易商社が使用していたオフィスを住居用に直した一部屋は、二十坪ほどの広さが

ある。間仕切りがないため、晃たちは中に残っていた棚や捨てた家具などで、どうにか幾つかの部屋に区切った。

父は、冷暖房の壊れたこの古いビルの新居で、今も寝たきりである。

このビルの地下にも、二百年前の遺体が横たわっている。扉は固く閉ざされているとはいえ、死体の中で蠢いているであろう目に見えない悪魔、レリア・ウィルスの存在を考えると、落ち着いて眠ることもできない。

左右に広がる安穩とした高級住宅街の風景にほろ苦さを覚えながら、晃はゆるい起伏の続く坂道を上った。

市の上級官吏が多く居住しているこの地区の歩道面には、五十メートルごとに通行人を

識別するためのコンピュータ端末が埋め込まれている。防犯効果があるため、端末がある

箇所には小さなランプが点滅する。

昼間でもちかちかと目を射る人工の光に、晃は不快感を覚えて顔をしかめながら歩いた。

エアーバスの停留所から十分ほどのところに、浅野の家はあった。整然と並ぶ豪邸の中でもひと際大きな区画を有する浅野家は、他の家が周囲に灌木を配

置しているのとは異なり、庭に大きな高木が数本、植えられている。浅野の父親は、塔経市公安局の副局長を勤めている。晃は、公安局には美鈴の件で言いたいことが多々ある。だが、例の少女を快く引き取ってくれた浅野の父親に、それをぶちまけるのは、どうかとも思っている。

在宅している時間ではないと思う。なるべくなら、浅野の父とは顔を合わせたくない。

複雑な心境を抱え、晃は浅野邸の門扉のブザーを鳴らした。程なく、立体モニターが作動し、天然石の門扉の中程に女性の顔が現れた。

「どちらさま？」

中年の、温和な表情の女性は、どこか浅野の顔を連想させる。母親だな、と思い、晃は丁寧に返答した。

「日野といます。由和くんの大学の友人で……」

「ああ、はい。由和から聞いてます。どうぞ」

浅野の母は、息子とそっくりな優しい笑みを見せると、すっと消えた。

モニターが消えるとはほぼ同時に、門扉が自動で開いた。

何本かの高木がアクセントを添える浅野邸の庭は、春の花で埋め尽くされていた。

匂いの強い黄色のモッコウバラのアーチの向うには、ヒースの灌

木が薄紫の小さな花をつけている。

薄紫のヒースは、晁たちが以前に住んでいたアパートメントの前庭にも植えられていた。

花の好きな美鈴は、ヒースが咲くと、よく写真を撮っていた。

やや伸び過ぎた枝が、南から吹き込む風に揺れ、歩く手の先を擦る。

風の中に微かに鉄さびのような匂いが混ざり始めているのを、晁は嗅ぎ取った。

この時季、オオトゲアレチウリは枯れた茎の下から新しい芽を出す。双葉は凄まじい勢

いで成長するが、その時に鉄さびのような匂いを発する。

世界を覆っている“あの植物”は、また人々が最も恐れる存在、レリア・ウイルスの変

異前の、マザー種と呼ばれるウイルスの宿主でもある。

マザー種は、直に人間に感染して広がることは、まずない。それでも変異種の恐怖を拭

いきれない人間たちにしてみれば、オオトゲアレチウリの存在は脅威である。

この世界は現在、オオトゲアレチウリに支配されていると断言している。

五百年前、西大陸の国々がオオトゲアレチウリの大繁殖によって滅ぶまで、この星??

地球に住む人類は、自然を開発という美名の下に壊し続けた。河を堰き止め、山を崩し、

大森林を伐採した。

広がるだけ広がった人の街が最後にぶつかったもの、それが、オオトゲアレチウリだった。

森林の奥地、大木が倒れた空き地にオオトゲアレチウリや亜種の

アレチウリは生息していた。繁殖力が強く、大木でも絡み付いて枯死させてしまうほどの生命力を持つアレチウリだが、森林では周囲に蔓植物が嫌う樹木なども多く生えており、それらの生育を押さえ
て来た。

だが、人間が森林を大規模に伐採したことにより、蔓植物が嫌う樹木も大半が絶滅、オ
トゲアレチウリの繁殖を抑制するものは、ほぼゼロになった。

たちまちにして、オトゲアレチウリは人の街を覆い始めた。並木に絡み付いて枯らせ、
庭先の植物を駆逐する。家の壁を覆い、最後にはビル全面に這い登
った。

除去しようにも、硬い棘と実が触れることを拒んだ。その上、オ
トゲアレチウリを宿
主としていたレリア・ウイルスが短期間で街に棲息する昆虫や鳥、
ペットを経て変異し、
人に感染。大流行となった。

通常、植物から動物へのウイルス感染はあり得ない。しかし、その常識を破ったレリア
・ウイルスに、研究者もパニックになった。変異も早く、ワクチン
開発が追い付かなかった。
た。

なす術もなく、人々は家を捨て街を捨て、国までも捨てた。

オオトゲアレチウリの浸食が早かった西大陸に比べ、まだ少し遅かった東大陸では、急

ぎ大都市の周囲に蔓植物の嫌う樹木を植えた。

塔経市でも、市の周囲を取り巻いていた幹線道路を壊し、そこにツルガラシという灌木

を植えた。ツルガラシは、その名の通り蔓植物を枯らしてしまう物質を体内で生成する。

絡み付かれることを回避するための自衛手段なのだろう。

ツルガラシは、他の植物が近くに生えても、その物質は生成しない。ツルガラシを防波

堤にして、人々はオオトゲアレチウリという大波から、ようよう自分たちの居場所を守っている。

長いアプローチを経て、晃は玄関扉の前に立つ。『いらっしやいませ』という機械音が

聞こえ、特殊合金製の扉が、門扉と同じく自動で開いた。

「いらっしやい」

開いた扉の向こうで、浅野が待っていた。

「……おじやます」

玄関ホールには、四十号ほどの、塔経市の風景を描いた油彩絵が掛けられていた。名前は

思い出せないが、そうとう高名な画家の絵であることは、晃にも分かった。

夕焼けに染まる、真樹区のセンタービル。

周囲の近代建築を凌ぐ高さで聳えるこのビルは、二百年前に放棄されて以来、経済拠点

としての機能は失って久しい。それでも往年の輝かしい瞬間そのま

まのクリスタルの曲線を、今も誇っている。

晃の前の家からも、センタービルが見えた。小学校の下校の時。妹の手を引いて帰り着

いた、我が家のあるアパートメントの階段前で、しばし夕日に輝くセンタービルを眺めた。

朱色に染まるクリスタルに、美鈴は愛らしい笑みを浮かべて「きれい」と喜んでいた。

晃も微笑んで、小さく柔らかい妹の手を、そつと握り直した。

在りし日の情景を思いつつ、つかの間絵を眺めていると、浅野が俯いて小さく笑った。

「なんだよ？」

「いや。コリンもね、そこでこの絵を眺めてたんだ」

例の少女は、回復してからコリンと名乗った。

コリンは、ホワイト・ウインドに転がり込んでから三日間、店奥の休憩室で昏睡状態になっていた。

熱が高く、目が離せない状況だったため、晃と八木が交代で泊まり込み、看病した。当

初はえらく面倒くさがっていた八木がためにコリンの看病をする様子を見て、晃は、八木にも優しいところがあるのだと思った。

熱が引き、起き上がれるようになったころ、浅野がやって来て、自分の家へ引き取りたいと申し出た。

事故なのか、事件なのか。とにかくコリンは大怪我をしながら、恐らくかなりの距離を

歩き、ホワイト・ウインドまで辿り着いた。

南外縁で、裏社会が絡まない事故や事件はあり得ない。コリンも、

そういつた犯罪組織

の争いに巻き込まれたのだろう。ならホワイト・ウインドにいつまでも置いておくのは危険だ。

晃の意見と八木の考えが同じだったのだろう、八木は浅野の提案を、すんなりと受け入れた。

晃は、絵に見蕩れた自分を面白そうに笑う浅野に顔をしかめた。

「きれいな絵だし。別におかしくないだろ、見てたって」

「そうだけどさ。……なんだか似てたから。日野とコリンの、その絵の見蕩れ方が」

晃は、奇妙な面映さを感じた。

コリンの裸体を見た時も、少女の体にときどきするというより、なぜかひどく懐かしい

気持ちがあった。今もそうだ。似ている、という言葉に、晃は切ないような、暖かいようなものを感じている。

この不可思議な感覚は何なのだろう。ついこの間、偶然に出会ったばかりの少女に、どうして自分は懐かしさや暖かさを感じているのか。

晃が自身の不可解な感覚に戸惑っていることなど知らない

浅野は、優しい笑みのまま言った。

「コリンは離れたよ。もちろん、会いに来たんだろ？」

「ん？ ああ……」

確かに無駄話をしに来たわけではない。ホワイト・ウィンドで保護してから一週間。コ

リンが浅野の家で順調に回復しているかが気になっていたのは、晃だけではなかった。

八木も、口に出して言わぬまでも、様子を見て来いと態度で言っていた。

「こつちだ」と歩き出した浅野に従って、晃も動いた。

浅野邸の中庭は、きれいに手入れされた前庭とは趣を一変、鬱蒼と草木が生い茂って

た。

「母は手入れしたいらしいんだけど、父が嫌がるんだよ」

母屋と離れを繋ぐ渡り廊下の周囲こそ刈り込まれているが、その他は全くの手つかずの

様相である。たくさんの紫色の蕾をつけたツツジや、葉の出たばかりのハギの下で、ハル

ジヨオン、ハハコグサ、ノアザミなどの花がてんでに咲いている。

「すごいな」窓から見える景色に正直な感想を漏らした晃に、浅野は苦笑した。

「だろ？　ここだけ見てると、まるでお化け屋敷だよ。父の言い分としては、雑草なんて

草はないと。皆、すべて命があつて、縁があつてここに生えたんだから、無闇に殺すな、

だつて。？？まあね、昔人間が勝手な都合で自然を破壊したために、オオトゲアレチウリ

みたいなものを森林の奥から引つ張り出しちゃったんだから。父の言うことにも一理ある

のかもしれないけどね」

三メートルほどの渡り廊下の反対側に、母屋にはなかった引き戸が見えた。西大陸風の

家屋にはそぐわない黒い引き戸を開けて、浅野は晃を招き入れた。

「この離れは、元々祖父の療養室だったんだ」

南へ向かう短い廊下の奥に、部屋が二つあった。どちらも扉はついておらず、浅野は右

側のアーチ形の入口を潜った。先にあった部屋は、浅野邸の敷地を囲む高木の何本かが、

壁一面に取り付けられた窓から見えるようになっていた。

二十センチ角の、二種類の模様の違うウッドパネルを互い違いに床一面に貼付けた、落

ち着いた雰囲気のある室内に、大きな古染色の長椅子が置かれている。

窓に直角になる位置に置かれた椅子の真ん中に座り、コリンは窓の外を見ていた。

最初に見た時とても印象的だった白髪が、開いた窓から入る風に微かになびいている。

「コリン」と呼び掛けた浅野に、コリンはゆっくりと振り向いた。晃を見ても別段さほど

驚くふうでもなく、コリンはぺこりと、白い頭を下げた。

今日は白ではなく、ピンクの柄物のワンピースを着ている。まるで囚人服のようだと思

ったあの晩の服より、こちらのほうが断然、女の子らしいと、晃は思った。

「覚えてるだろ？ 日野のこと。君が元気になったか、心配で見舞いに来たんだ」

晃は長椅子に近付いた。コリンは赤い目でじつと晃を見上げる。薄赤い唇が、ゆっくり

と開かれ、愛らしい声音が零れ出た。

「歌……」

「ああ。あの時、歌ってたやつ？」

「あの歌、好きです……。もう一度、聞きたい」

浅野が、開いていなかった窓も全開にした。部屋の中に、一挙に春の風が、山桜の花びらを伴って吹き込む。

「歌うのは構わないんだけど……。その前に聞いてもいいかな？」
じつと見つめて来るコリンの目を見返しながら、晃は尋ねた。
「俺らの店に来る前のことなんだけど、君、本当に何も覚えてないのか？」

同じ質問を、コリンが回復してすぐに八木がした。だが、コリンはその時は「わからない」と返答した。

南外縁のマフィアが絡んだ事件に巻き込まれているのだとすれば、話せば殺す、などと脅されたりもしているのかもしれない。

「相手が何者なのかが特定できれば、コリンを守り易いのだが」と、八木は言う。

晃も、八木と同意見だった。敵が判らなければ、どういつ警戒を
していいかわからない。

コリンは、覗き込む晃の顔から目線を逸らし、「わかりません……」と呟いた。

「何でもいいんだけどな。例えば、君を傷付けた相手の人相とか」

「それは……」言いよどみ、コリンは薄い朱の唇を引き結ぶ。次に口を開いた時、コリンの
の声音が、がらりと変わっていた。

「ソレハ、再生シテハナラナイ事象デス。危険域ニ抵触スルノデ、才答エハ、デキマセン」

低い女性の声。簡易学習型コンピュータのアナウンスのような抑

揚のない口調。

何より、がらりと変わったコリンの気配に、晃は驚いて目を見開き、浅野の顔を見た。

浅野は片目を瞑り、両手の人差し指でバツを作った。

晃はそつと頷くと、コリンに向き直る。

「あー……、ごめん。悪かった。今の話は忘れてくれ。あつと、歌だよな？ うん、オツケー」

コリンがゆっくりと顔を上げた。

晃は、再びじつと見詰めて来るコリンの気配が元に戻っているのを確認すると、内心でほつと胸を撫で下ろす。

ゆっくりコリンから目を離し、窓に向かって歌い出した。よく響くハスキーボイスが部屋を満たす風になり、旋回して、窓から居並ぶ高木の間へ、ひと際高いヒトツバタゴの梢へと消えていく。

晃を見つめたまま聞いていたコリンは、歌声が止むと、ふつと目を閉じた。隣で、浅野が感嘆する。

「やつぱり、いい声だよなあ。なあ、本気でプロを、考えない？」

「何度も言わせるなよ」

晃は腰に手を当て、唇を尖らせる。

「俺は、プロになりたいたくて歌ってるわけじゃない。好きだから……、妹がこの歌が好きだ」

「だから、歌ってるだけだ」

「妹……」ふつとコリンが呟いた。晃はコリンを振り返る。

「妹さんが、好きだったんですか？」

「え？ ああ。そうなんだけど……」

「どんな、人だったのですか？」

抑揚のない声とは逆に、コリンの赤い瞳は好奇心と、少しの怯えをたたえている。

「どんなって……」

晃は顎に拳を当てる。そういえば、考え事をする時の晃のこの癖を、美鈴は「おじさんみたい」と笑っていた。

「明るい、元気な娘だったよ。スポーツも音楽も好きで、しょっちゅう飛び歩いてた」

コリンは「そうですか」と声を落とし、俯いた。その様子がひどくがっかりしているよ

うに見え、晃は妙な罪悪感を覚える。

「とにかく……、元気になってよかった。店長にも、君がずいぶん回復したって伝えとく」

もう少し気が利いた挨拶は言えないのかと自分で反省しつつ、晃はコリンの元を後にした。

離れから母屋へ戻ると、晃は浅野の自室へと案内された。

十二畳ほどもある広い部屋は、入って右側の壁の全面が作り付けの本棚になっている。

左は音響機器とバルバットが六本、置かれていた。

浅野は扉と同じ壁面に接して置かれた長椅子を、晃に勧める。本棚の一角に設置された

家庭用システム・コンピュータの端末を操作し、浅野は学習型コンピュータに飲み物を出すよう指示した。

「さっきのコリンの“あれ”なんだけど、実はここへ連れて来てすぐ、同じような質問

をした時、やつぱり、ああいう状態になったんだ」

浅野は晃の向かい側の丸椅子に腰を下ろした。

「分かってたんなら、言ってくれって」

晃は口を尖らせる。浅野は「いや、ごめん」と真顔で頭を下げた。「でもまさか、あのタイミングで日野が質問するとは思わなかったからさ」

「店長に、聞いて来いって言われてたんだよ」

ブザーが鳴り、コンピュータが飲み物を届けたことを知らせる。

部屋の扉を開けると、

自動ワゴンがコーヒーを二つ、載せて来ていた。

浅野はトレイごとコーヒーカップを持って来る。

塔経市では、コーヒーは貴重品である。南大陸の、僅かに残った農園で栽培された豆を

挽いて煎れ、フリーズドライ製法でインスタントの粉に加工する。

世界でいくらかも製造で

きないインスタントコーヒーを、塔経市では市直営の食品管理協会

が輸入していた。

「つい昨日、父が買って来たんだ」

トレイを長椅子の前の木製の卓に載せ、浅野は晃にカップを手渡す。

嗅ぎ慣れないほろ苦さを含んだ複雑な香気に、晃は眉をひそめた。

「あれ、コーヒー嫌いだった？」

晃の表情に、浅野が心配そうに聞いた。

「いや。嗅いだことない匂いなんで……」

「日野って、そういう言い方が面白いよな」

浅野は自分の分のコーヒーを一口ごくんと飲み、くしゃりと顔を笑いに歪めた。

「在学中もさ、よく匂いがどうのって言ってたよな。高次コンピュ
ータ科の教授はいつも」

オイル臭いとか、第二大講堂の二百八番の席に座ると、少し雨漏りの匂いがするとか」

「そんなこと、言ってたっけ」

実際に臭いで悩まされたことは、晃には多々あった。どうも他人より嗅覚が鋭いようで、

ちよつとした臭気も我慢ならない時がある。

臭気だけではなく、嗅ぎ慣れない匂いも、どうしても気になって居たたまれない。

それにしても、匂いが気になり出したのがいつ頃からののか、自分でも記憶がない。

顔をしかめたままカップに口を付けない晃に、浅野は「無理に飲まなくていいよ」と軽く笑う。

「コーヒーは置いて。コリンなんだけど、あの反応は、解離性同一性障害じゃないかと思うんだけど」

解離性同一性障害に罹る患者は、幼児期に強度の心的外傷を受けた者が大半である。

また、近年では精神科の診療目的で、薬物により解離性同一性障害を引き起こす場合がある。この治療法は、主に強い精神的損傷を負い、このままでは自殺など一命に関わると医師が判断したときのみの適用である。心的外傷を抱えた人格を主人格から切り離すことで、心の安定を図り、治療する。

浅野の意見に、だが晃はズレを感じた。

「そりゃ、違う気がする。あの喋り方は、暗示じゃないのか？」

「暗示？ 催眠療法かなにかで、思い出さないようにしているってこと？」

「たぶん」

「ふうん……」と、浅野は考え込むように天井を仰ぐ。晃は前屈みになると、両手を膝の上で組んだ。

「どっちにしても、コリンを傷付けた奴は、なにか途轍もなくやばいことをやってる。で

なければ、コリンの記憶を封じたりはしないはずだ」

「南外縁のマフィアよりも拙い相手かも？」

「……わからないけど、もしかしたら」

浅野は、難しい表情で立ち上がると、部屋の大半を占領している
ミキシング・マシンの

前に行った。機械の脚に立て掛けてあつたバルバットを手に取つた。

「浅野のお父さんには、大変なことをお願いしちゃつたのかもな」

俯いた晃に、浅野は「そんなことはないよ」と、優しく笑んだ。

「父は、考えなしで何かする人じゃない。コリンの話を俺がした時、
ちよつと考えてから

『うちに連れておいで』って言ったんだ。仕事の話は、立場上、家
では絶対にしないけど、

あれは間違いなく仕事絡みで、なにか思惑があるってふうだった」

公安局の副局長という立場がどんなものか、晃には、はっきりと
した見当は付き兼ねる。

が、大きな役職であり、重責を担う浅野の父が無闇に見ず知らず
の少女を、しかも、い

わくのありそうな人間を、匿うはずがない。

「とにかく、しばらくはコリンのことは、うちに任せてくれよ。大
丈夫だから」

結局、来る前に懸念した、浅野の父と鉢合わせるような事態も起こらず、晃は浅野の家を辞した。

バイトも休みで、特に行く場所もなかった晃は、南外縁の外れのマーケットで食料品を買って帰路についた。

晃の一家の住居である古いビルは、所得の低い者が集まる南外縁でも、特に低所得者が住まいを求める街区にある。

二百年前の古い土地面積建築制限法のせいで、他と比べやけに細長いビルは、旧式のコンクリート造りの上に、当時の最新技術である強化クリスタルのタイルが貼られている。しかし壁面は、年月と、工事の手抜きのためだろう、ほぼ半分のタイルが剥落して久しい。

巨大な灰色の無骨な面にまばらに貼付いたクリスタルが春の日差しを弾くさまは、泥の中に落ちた宝石のようだ。

外扉へと続く三段あまりの階段は、表面を滑り止め加工をしたセラミックが貼られているのだが、セラミックの中央がすり減り窪んでしまっている。禿げて変形した階段を上り、

晃は外扉の、光沢のなくなったチタンの棒状の取っ手に手を伸ばす。扉を引き開けようとした晃の目の端に、ちらりと人影が映った。

このビルは、表通りから伸びた細い路地の突き当たりにある。路地を囲んでいる他のビル

は、表通りに向かった面にしか出入り口はない。左右を別のビル

で囲まれた行き止まり

の路地上で、現在もし自分以外の人物がいるのならば、それは間違
いなくこのビルの住人

か、住人を来訪して来た人間である。

当然、晃は知り合いだろうと気楽に振り向いた。が、背後には人
どころか、よくその辺

りで遊んでいる野良猫の姿もない。

思えば足音が全くしなかった。人影を見たとき直感したのは、錯覚
か？

路地の長さは十五メートル程。何らかの理由で晃に見られなくな
くて、当該の人物が表

通りへと逃げたとしても、すぐに表通りへ出られる距離ではない。

晃は、動体視力はいいほうだと自負している。見間違いではない
のなら、では、自分は

何を見たのか？

用心深く、ビルの下から上までゆっくり見回す。と、右側の屋上
から、こちらを見下ろ

している人影があるのに気が付いた。

逆光で、顔形まではわからない。細いシルエットは女性であるこ
とを示しているが、年

齢までは判別ができない。それでも晃は、その人物がコリンのよう
に思えた。

「コリン……？」

呟き声の呼び掛けか聞こえたとは思えないが、人影は晃の声に合
わせたように、すつと

屋上の端から消えた。

晃は走り出した。つい先刻、浅野の家で会ったばかりのコリンが、
まさか自分の家の近

くまで来ているとは思えない。が、どうしてもコリンだという感覚

が拭えない。

目の端に見えた人影はひとまず忘れ、屋上の人物がコリンかどうかを確かめるため、表通りへ出てビル的人口を潜った。エレベーターホールの天井照明が故障しているらしく、

古めかしいタッチパネル式のエレベーターボタンが、玄関から入る日光のみの仄暗い中に、やけに明るい。

けばけばしい光を放つ青いボタンを押すと、透明なボックスが上階から降りて来る。

透明セラミック製のボックスの扉が開き、晃が乗り込もうとした時。エレベーターの左側にある階段から、靴音がした。

階下へと向かって来る足音に、晃は閉まりかけたエレベーターの扉を慌てて押さえる。降りて階段へと急いだ。

建設当時の美しい乳白色が微かに残る、かなり汚れた円筒形の手すりの端を掴もうとした時、階上から降りて来た人物と目が合った。

足音の主は、女性だった。ベージュの、膝下までの丈の合皮のコートを着た、長い白髪の女性は、赤い瞳をぴたりと晃の目に据えている。

コリンと同じ髪と瞳の色に、晃は一瞬たじろぐ。

「……コリン、と続くはずの言葉を、しかし晃は最後まで発せなかった。右側頭部に鈍い痛みを感じ、晃はその場に倒れた。

どれくらいの間、気を失っていたのか。

気が付いた晃が最初に見たのは、灰色の四角い照明板だった。一辺が三十センチの照明

板がいくつも整然と並んでいる。

照明板には細かい孔が空いており、孔の一つ一つにLEDが付けられている。照明板を

何枚点灯させるかで、室内の明るさを調節する。

ぼんやりと照明の仕組みを考えているうちに、晃は意識が現実に戻った。

照明板が見えているのは、自分が寝ているからだ。だが、見ている照明板の配置は、見

慣れている自宅ものでも、勤務先のホワイト・ウインドのものでもない。

では、どこで寝ているのか。

晃は天井以外の周囲も見ようと、上体を起こした。途端、男の聲が晃の動きを制した。

「まだ寝とけ」

聞き覚えのある声音に、晃はそちらを振り向く。頭の方に、麻生が座っていた。

「竹内ビルに知り合いを訪ねて行ったら、エレベーター脇で君が転がっていた。病気が事

故か分からなかったんで、知り合いの手を借りて、ここへ運んだんだ」

麻生は簡潔な説明をすると、奥から出てきた人物を顎で指した。

旧式な白衣に見覚えがあった晃は、自分を見て破顔した医師に、あつ、と声を上げそう

になった。

「ここは、飯山医院。君が倒れていたビルからは、ちょっとあるがな」

「麻生さんから連絡を貰って、すぐにエアカーを出したんですよ」
飯山医師は、手を洗うために捲っていた白衣の袖を元に戻しながら、晃が横になっ

た診察用の寝台の脇に、自分の椅子を押し座った。

「でも、よかった。ちょうど弟が車でここに来ていたんで、あなたを簡単に運ぶことがで

きました。幸い、怪我也大したことがなくて」

晃は「ここだ」と指した麻生の指先を見上げ、自分の額に触れる。どうやら、頭を殴ら

れてた時、うつ伏せに倒れたために額を打ったようだった。

額の右側に張られたガーゼと絆創膏に触れ、晃は「ああ」と納得する。

「側頭部の打撲も大丈夫ですよ。しばらくは、痛いでしょうけれど」
飯山は晃の右のこめかみに触る。途端、ずきつという痛みが走り、晃は顔を顰めた。

「気をつけるよ」麻生が立ち上がった。ふわり、と麻生の体から例の花の香が立ち上る。

「あんまり奴らを刺激するな。監視されてると分かっても、無視してるほうが利口だ。こ

っちに手を出して来ないうちは、放っておくほうがいい」

「じゃあな、と、コリンを助けた夜と同じように、麻生は片手を拳げて飯山医院から出て

行こうとした。

「あ、あの」晃は、麻生の背を引き止めた。

麻生には、聞きたいことが山ほどある。八木とはどういう付き合いなのか。本当に幼馴染

染みなのか。右腕は、どうして喪失したのか。なぜ、体から花の香がするのか。

しかし、晃の口をついて出たのは、そのいずれの質問でもなかった。

「その……、奴らって、誰なんだ？」

麻生は、ゆっくりと向き直った。八木とはまた趣の違う男臭い顔が、渋い表情に歪む。

「君は部外者だ。そういう詮索は止したほうがいい」

晃は、むっとする。

「部外者？ 監視されて、頭を殴られて。これでどこが部外者なんだよ。俺の頭を殴った

奴のことを、俺が知って何が悪いんだ」

「奴らを深く知るのには、危険だと言ってるんだ」

「ふざけんなよ！」

晃は心底から頭にきて、怒鳴った。

「なんでもかんでも『おまえは、余計なことを知らなくていい』ってか！ あんたも八木

さんも、人を何だと思ってるんだよっ！」

麻生は渋面を崩さず、硬い声で言った。

「威勢がいいな。だがな、ただ元気なだけじゃ、奴らには通用しないぞ。奴らは……、正

真正銘の化け物だ」

それまで黙って晃たちのやり取りを聞いていた飯山が、やや不快気に顔を歪めた。

「化け物っていう喩えは、語弊があります。彼女たちは一応は人間です。ただ、特殊な使

命を与えられ、それに沿った訓練を受けているだけです」

「そう。ただし、薬漬けでな」

麻生は、灰色の外套の裾を翻すと、出口へと向かった。自分たちだけがわかつているよ

うな言い方に腹が立ち、晃は鋭く麻生を呼び止める。

「待てよ！ 俺はまだ答を聞いてないっ！」

麻生が足を止める。振り返り、皮肉っぽく口の端を釣り上げた。

「君が、もしこの件に何としても関わらなければならぬ人間なら、奴らは必ず正体を明

かす。焦らなくても分かる」

そのまま出て行く灰色の外套の背中に向かって、晃は「なんだよ、それ？ ふざけんな

！」と罵声を浴びせる。

「ちくしょう……！」ふて腐れて頭の後ろを乱暴に搔いた晃を見て、飯山が苦笑する。

「俺は、あの人となぞなぞ遊びがしたいわけじゃねえよ」

「麻生さんは、若い君を巻き込みたくないんですよ。自分が……、右腕を失うという苦い経験をしているだけに」

晃は、はっとして、飯山の顔を見た。飯山は、色白の男前をほろ苦い表情に歪め、頷いた。

「ええ、そうです。君を襲った例の女性たちと戦って、無くしたんです。あの時……。八

木さんが、全身血まみれの麻生さんを僕のところへ運んで来た時には、もう麻生さんの右腕は千切れていました。皮一枚でぶら下がっている状態だった。八木さんが、傷口の上を布できつく縛って止血していたので、麻生さんは一命を取り留めたんです」

「どうして……。あの女たちと戦うことに？」

晃の質問に、飯山は少し困ったように眉を寄せ、口元に指を当てる。

「そうですね……。麻生さんの想いを多少は無視することになりますけど、確かに君にも

知る権利があります。お教えしましょう」

飯山は姿勢を正すと、まっすぐに晃の目を見た。

「ただし、これからお話しすることは、他言無用に願います。麻生さんの名誉にも関わりますし。いいですね」

真顔で念を押され、晃は内心どきりとしながら頷く。

「麻生さんが、例の女性たちと戦わねばならなくなった理由は、十三年前にあります。君

も覚えておられると思います。十二年前、レリア・D・iウィルス
が大流行し、十代の若
者を中心に、塔経市だけでも死者が二十万人も出ました」

その当時のことは、晃もよく覚えている。晃は九歳だった。七つ離れていた長兄が、レ

リア・D・iウイルスに感染、二ヶ月後に『羽化』し、死亡した。

これまでレリア・ウイルスと長きに亘り戦って来た人類にとっても、『羽化』は初めて

の症状であり、大きな衝撃だった。『羽化』は、患者の肉体を劇的に変化させる。兄の変

貌を間近で見ていた晃は、その凄まじさを、今も忘れることができない。

「レリア・D・iウイルスは、レリア・ウイルスの変異株の中でも、最も変異の激しい株

です。レトロ・ウイルス全般がそうですが、めまぐるしく変化し、特效薬を作るどころか、

性質を捉えることも難しい。レリア・D・iウイルスは、その中でも特別な変化を遂げた。

人間の遺伝子の中に潜り込み、わずか一、二ヶ月という早さで、人の肉体を作り替えてし

まった。『羽化』という急激な変化は、骨や背筋、背中 of 皮膚に留まらず、患者の内臓や

循環器までも変質させてしまいます。患者の多くは変化に耐え切れず、命を落としました。

しかし……」

飯山は言い淀み、痛みを堪えるかのようにきつく目を閉じる。しかし意を決したように、また喋り出した。

「変化を遂げても生き残った人もいました。彼らがどうして肉体の変化に対応できたのか、

それは解明されていません。彼らは今、あまりにも変わってしまった体を隠し、ひっそりと生きています。麻生さんも、その一人です」

晃は、少なからず驚いた。

『羽化』した者は、肩甲骨が異常に伸びて立ち上がり、皮膚が硬化し、めくれ上がり、立ち上がった骨を軸に、硬い膜を作る。同時に、内臓が畏縮し、胃が完全に消滅。昆虫のように腹部に深くびれができる。

胃が消滅するため、固形食物の摂取が不可能となる。流動食も、腸の吸収力が低下するので未消化となる。肉体が細胞内から変化するため、点滴の栄養剤さえろくに受け付けない。結果栄養が摂れずに死に至る。

また肉体の変化に伴い、高熱が出る。高熱は脳を沸騰させ、蛋白質を破壊し脳死に追いやる。

晃の兄は前者だった。高熱でも意識ははっきりしていたものの、栄養摂取ができなくなり、点滴では追いつかず、餓死した。

最後はやせ細り、硬化した羽根を入れても二十キロほどになってしまった身長百七十五センチの体を抱き上げた父は、人目もはばからずに号泣した。

『羽化』に伴う消化器官消滅と内臓圧迫。高熱による脳機能の破壊。しかし、そのどれも回復した、あるいは軽微で済んだ『羽化』の患者がいたという事実が、晃には信じられない。

「麻生さんは……、本当に『羽化』したんですか？」

尋ねた晃に、飯山は真摯な面持ちで「ええ」と頷いた。

「右腕を診察した時、見ました。麻生さんたちは、伸びた羽根を隠すために、常に長い外套を着ているのです」

「でも、なんで、その……、俺を殴った女たちが麻生さんを追ってるんですか？ あの女たちって、何者なんですか？ ってか、どこの組織の連中なんですか？」

畳み掛けた晃を、飯山は、ひた、と見据えた。

「女性たちの目的は、おそらくレリア・Diiウイルスの感染患者を確保すること、だと

思います。麻生さんが戦ったのも、女性たちが麻生さんの仲間の何人かをどこかへ連れ去

ろうとしたためだと仰ってました。ただし、女性たちの正体は、僕には分かりかねます」

受付の、旧型のアンドロイドが、現在では古めかしいコンピューターの音声で外来患者が来たことを告げた。

それを聞いて、晃は帰宅すると飯山に告げた。

「こめかみと額の他には外傷ないし」

飯山医師は優しく微笑んだ。

「そうですね。長々お引き止めしました。お大事に」

麻生が拾っておいてくれた買い物袋を受け取り、受付に向かう。

治療代を聞くと、アン

ドロイドは八木宛に請求書を書くからよいと答えた。

医院のある場所を簡単に教えてもらい、晃は日暮れの南外縁に出た。

南外縁は、昼と夜とでは顔が変わる。風見通りという大通りにしても昼は人通りも少な

く、埃っぽい歩道には酔っ払いや浮浪者、果ては死体が転がっている。

南外縁公安局は一応、死体は回収する。が、後の面倒は見ない。

遺体の身元調査や遺族

への通報は、全て民間ボランティア団体に任せている。ボランティア

ア団体といえは聞こえ

がいいが、中身はマフィアである。マフィアは、人手不足を理由に公安局が丸投げした仕

事をただで引受ける代わりに、裏で身元不明の死体を臓器業者や医療会社に違法に売り付けている。

もちろん、公安局の担当官には、たつぷり『報酬』も払っていた。死んだような昼の顔とは一変して、南外縁の夜は活気に溢れる。

風見通り沿いのビルの中の店は、夕方から開店準備を始め、七時を回る頃に店を開ける。

店の大半は飲食店や風俗店である。晃の勤めているホワイト・ウインドも、夕方五時から開店する。

夕刻を感じ取った屋外灯制御コンピュータが、路面のLEDライトを点灯させる。

開店準備に忙しい露天商の、仄かに黄色の明かりが灯る路上に広げられた品物を跨ぎ、

晃は裏路地を家路へと向かった。

入口が壊れた廃ビルの前に小さな屋台が数軒並んだ辺りに差しかけた時。急に首筋に視線を感じた。

晃は振り返ろうとして、ふと、麻生の言葉を思い出した。

『監視されると分かってても、無視してるほうが利口だ』

頭の悪い子供に言うような口調も蘇って、消え掛けていた怒りも振り返す。とはいえ、

先刻、不意打ちを食らったのは事実であるし、ここは大人しく忠告を聞くことにする。

背後の視線に気を配りつつ、ゆっくりと路地を進みながら、晃は飯山医師の話と、これまでの経緯を頭の中で整理してみた。

一週間前、店に飛び込んで来たコリンを保護した。重傷の手当をし、三日後に意識を取り戻したコリンを、浅野の家に預けた。

そして今日、見舞いに行った晃が、帰りに見知らぬ女たちに襲われた。襲ってきた女た

ちは、麻生と浅からぬ縁があった。

麻生は十二年前のレリア・D・iウイルス感染者で、しかも『羽化』しながら生き残っ

た一人だった。

『羽化』の生存者がいたという事実だけでも驚きなのに、何の目的かは分からないが、生

存者を捕獲しようとしている組織があり、以前その手先らしき例の女たちと争い、麻生は右腕を失った。

不意に、風が晃の長い髪を掬った。晃は足を止めた。

女たちがこのタイミングで現れたのは、間違いなくコリンに関係している。女たちは、

恐らくコリンの怪我にも関与している。だが、コリンの件だけで、晃や浅野の周囲を探っ

ているのだろうか。もし、他に目的があるのだとすれば、それは何なのか。

「もしかして、俺たち、大変な事態に巻き込まれたのか？」

相手は、麻生の腕さえ落とす非情を持っている。コリンは致命傷になり兼ねない傷を負わされた。

晃は、路上灯が薄闇を照らす空を見上げた。

じわじわと空恐ろしさが心中から込み上げ、思わず呟いた問いは、春の夜風が空へと聞き届けた。

女たちに襲われた翌日。晃は出勤するとすぐに、コリンの様子を八木に報告した。

額の絆創膏を見た八木は、少々怪訝な顔をしたが、怪我の理由までは聞かなかった。

晩春近くになり、日差しは一段と明るくなった。

ヒトツバタゴの高木の下、地面を覆った雨水吸収セラミックパネルの一部を二メートル

四方に切り取り作られた浅野家の離れの庭の花壇も、春先の花はほぼ姿を消し、初夏まで

に咲く花が、ちらほらと蕾をほころばせ始めている。

花壇の中に立てられた透明な強化合成樹脂の半円形ポールには、遺伝子操作によって生

まれた、陽光の強弱で色の変わるテッセンの大輪の花が、好き放題に巻き付いている。

自分の背丈ほどにまで伸びた蔓に次々と咲いた花を覗き込み、コリンは嬉しそうに微笑んだ。

「今朝、咲いたのです。綺麗でしょ」

「ああ」と微笑んで頷きながら、晃はずいぶんと変わったと、内心かなり驚いていた。

初めて浅野家にコリンを見舞ったのは、ほんの一週間前だ。あの時は、コリンは発音も

たどたどしく、しかも、解離性同一性障害ではないかと疑うほど、ある質問をすると人格が変化した。

が、一週間が経った現在では、以前のことを尋ねても、突発的な変化は起こさなくなっ

た。

「やっぱり、解離性同一性障害じゃなかったんだな」

離れのウッドデッキの丸椅子に腰を下ろした浅野が、夢中で庭先の花の周りを飛び歩いているコリンには聞こえないよう、小声で晃に言った。

「一週間のうちに、見るみる変わっていったさ。なんかこう……、封印が解けたって感じ

に。ぼつぼつしか話さなかったのが、言葉もどんどん増えていった。浅野は、観察する動植物の変化を毎日わくわくしながら見ている子供のような顔をした。

「封印を解く、か」

何となく引つかかるものを感じて、晃は腕を組んでウッドデッキの端に腰掛けた。

「いや、まだ分かんないな。俺らは、コリンと付き合って一週間とちょっとでしかない。

けど、コリンの記憶を、どうにかして封印した奴らは、もっとずっと長く付き合ってただろう」

テッセンから四季咲きのバラの蕾が並ぶ場所へと、軽やかな足取りで移動するコリンの

細い姿を、晃は目で追った。

嬉しそうな表情の少女に、思わず自分の頬も緩みそうになるのを、どうにか堪える。

「あの時、俺は直感的に、解離性同一性障害じゃないと思った。だけど、同じ日に例の女

たちに襲われて、違うという考えが怪しいかもしれないと思った。相手は、俺たちの理解

を超えた何かをしかかしてる。とすれば、コリンの記憶を、バラバラに分離した人格に別

々に封印するくらいの工作は、する可能性はある」

浅野は背を曲げて膝に肘を置くと、「なるほどね」と、考え込む顔で頬杖をついた。

「コリンの体に、無数の手術痕があっただろ？ あれ、コリンが追いつけられてるのと同じ関係あると思う？」

血だらけのコリンの体を濡れたタオルで拭いた光景が脳裏に蘇り、晃は苦い思いを追い払おうと首を振った。

「分からない。けど、関係ないとは言えないかもな」

無数の手術痕は、果たして病気によるものなのか。それとも、何か他に理由があるのか。

あるとすれば、何なのか？

考えながら、晃はぼんやりと、またコリンの姿を見詰め続ける…。

バラの花に顔を近付け、綻びかけた花の匂いを確かめていたコリンの体が、突然ぐらりと頷れた。

驚いて「コリン！」と叫び、晃は跳ねるように駆け寄った。コリンは、地面に両膝を着き、俯いて両手で胸を押さえている。

「大丈夫か!?」苦しそうに荒い息使いに大きく揺れる細い肩を、晃は屈んでそつと掴んだ。

「は……い。心臓が……、合わなくて、時々こうなりますけど……。すぐに、治ります、から……。」

上がる息の合間に、途切れ途切れに答えるコリンに、晃はおおろと見守る。

「飯山先生、呼ぼうか?」晃の後ろからコリンの様子を覗き込んだ浅野が、最新式の音声

入力形イヤホンテルを起動させた。

「あの先生の番号、聞いてたのか」

「コリンを預かる時に。こういう異変が起きたら困ると思ってさ」

浅野は「手回しいいだろ」と親指を立てると、飯山医院の番号を、読み上げた。

塔経市では、通話は全て電話会社のメイン・コンピュータに記録される。市民の通話を

公安局がチェックするためである。

公安局はテロ対策と称しているが、三十年以上に亘って一党独裁を続けている市政は、

与党に反対する勢力の早期押さえ込みのために通話記録を利用して
いるのは、明白だ。

飯山医師の応答を待つ浅野に、だが、コリンが中断を求めた。

「先生を、お呼びしなくても……、大丈夫です」

苦しさに伏せられていた赤い目を、コリンはきつ、と上げた。

「もう、ほとんど治まって来ました」

「でも、まだ顔色が悪いよ？」

戸惑った表情の浅野に対し、蒼白な顔のままコリンはもう一度、はつきりと強い声で

「大丈夫です」と繰り返した。

「そう？ 君がそこまで言うなら、いいけど」

心配そうな顔を崩さぬまま、浅野はイヤホントルのダイヤルを止めた。

「まあ、先生も忙しいだろうしね。外縁から中奥までじゃあ、距離もあるし……」

「とにかく、中へ入ったほうがいい」

晃はコリンを立ち上がらせると、離れに入った。長椅子にコリンを掛けさせて、自分は

その脇に腰を下ろした。

「落ち着いたか？」と聞いた晃に、コリンは俯いたまま「はい」と頷いた。

白い顔を、晃はそっと覗く。よほど苦しかったのだろう、切り揃えた前髪の幾筋かが、汗で額に貼付いている。

晃は、幼い頃やはり汗を掻いて額に貼付いた妹の髪を上げてやった時のように、コリン

の額に手を伸ばした。ひやりと湿った感触が手のひらに伝わるのと同時に、顔を上げたコ

リンが淡く笑った。

はにかんだ笑顔が、美鈴と重なる。

急速に胸に広がる切なさ、晃はコリンの額から手を離した。

どうしてなのか。最初にコリンを介抱した時も、白く細い体に懐

かしさを覚えた。

当時の懐かしさは、今こうして改めて思い返すと、妹と接している時の感覚に酷似している。

柔らかくて、やさしい、清々しい感じ。

コリンと美鈴は、容姿も年齢も全く違う。なのに、どうして既視的な印象を受けるのか。

理解できない自分の感覚に、表情を厳しくして黙り込んだ晃を、コリンが不思議そうに見詰める。

端で見ていた浅野が、晃の変化に気付き、「どうしたんだ？」と、椅子の前にしゃがんだ。

「いや……。何でもない」

漠然とした気持ちを、言葉に纏めて人に伝えるのは難しい。

晃は、もどかしさと胸を締め切る切なさを振り払いたくて、長い髪をわざと乱暴に振り、立ち上がった。

「俺、帰るわ」

「え？ おい、日野！」

出口に向かった晃を、浅野が呼び止めた。が、晃は無視して離れを出た。

登詩磨区の市立大図書館。

レリア・ウィルス流行の百年以上も前に建てられた建物には、真樹区の廃ビルにすらあ

るコンピュータ管理システムのいくつかの制御機能が存在しない。

例えば、広い館内に三台ある大型の空調は旧式の据え置きタイプで、稼働させる時は、

一台一台、職員がスイッチを入れて歩く。

照明もそうだ。スイッチこそ窓口のカウンター内にあるものの、点灯する時は配置を確

認しながら、職員が手動で押さなければならぬ。

建物の設備で館内のメイン・コンピュータが管理しているのは、人の手の届かない高窓

の開閉と、正面玄関の施錠くらいである。

そんな骨董品級の公立図書館を、では、なぜ市は建て直さないのか。

予算がない、というのが、最も一般的な理由と思われる。

図書館に所蔵されている書物、資料は、数億万点とも言われている。館は地上三階地下

三階の建築だが、一説によれば、それよりさらに下の地階が存在するといふ。

図書館には、一年から前のあらゆる事象の資料が収められている。無論、公安局が取り

扱った事件や事故の記録も、たとえ係争中であっても、閲覧できる範囲の資料は全て開示

されていた。

美鈴の事故も、起きてから今日で一年になる。

晃は、この日を待っていた。

事故の詳細は、一年前、妹の遺体が解剖から戻された時に付けられていた報告書に全て記載されている、と公安局は言っていた。しかし報告書には、美鈴がどこの医療機関で司法解剖されたのか、どうして内臓が残されていなかったのかという理由は、明記されていなかった。

公開される文書が、あの時に渡された報告書と異なるものかどうかは分からない。しかし、せめてどこの機関で解剖されたかくらいの情報は載っていないかと、晃は縋る思いで図書館へきた。

旧式の不正持ち出し防止用のポールの間を通り、晃は真つすぐに検索用端末へ向かう。

開架室の中は、平日ということもあり、来訪者の姿は少なかった。端末機は円形の透明ポリカーボネイト製の案内版の周囲に十台、設置されている。

隣との距離はかなり近いが、保護シートを画面上に貼付けてあるので、真正面に立たないとい内容は見えない。

晃は、熱芯に画面を操作している大学生風の若者の右隣の端末を起動した。

タッチパネルのボタンを押すと、軽い起動音とともに画面が待機から切り替わる。晃は、

最近、閲覧可能になった事故資料の欄を開けた。

事故資料を検索する時には、関係者の一人の名を入力すれば大概は表示される。迷わず

美鈴の名を入れた。だが、ヒットしなかった。美鈴の大学名、事故当時エアカーに同乗し

ていた学生の名も検索したが、いずれも当たらない。

まだ開示になっていないのか。諦めて端末機を離れようとした時、背後から不意に二の腕をぐっと引かれ、八木の渋い声が頭の上から響いた。

「目当てのものは、その玩具おもちゃじゃ、出てこないぞ」

「八木さん！ どうして、ここへ……？」

驚く晃の腕を掴んだまま、八木は口を真一文字に引き結び、歩き出す。

「ちよっ……」

強い力で引かれる痛みに、晃は顔を歪める。晃の様子などお構いなしに、八木は大股で

図書館のフロアを進んだ。

行き先は受付カウンターだった。八木はそこで晃の腕を放すと、司書の女性と話し始めた。

「今日は、いい天気だな」

およそ普段の八木からは出ない台詞に、晃は仰天して八木の顔を振仰ぐ。が、その場で

突っ込むわけにもいかず、黙って見ていた。

「ついこの間、個人的に借りたものがあってな。今日そいつを返しに来たんだが、木村は来てるかい？」

長い茶髪をきつちりと結び上げ、犯罪者情報確認用のコンピュータ内蔵スクリーン・グ

ラスを掛けた女性は、館内コンピュータ端末のタッチパネルを操作していた手を止めた。

「本日、木村は欠勤ですが」司書の女性は、そつと上目で八木を見上げる。

「そうかあ。そいつは残念だな。木村の電話番号を聞いておけばよかった」

八木は、いったい何の話をしているのか。木村などという人間は、晃は初耳である。

確かに八木は謎の多い人間で、仕事場以外の交遊は、殆ど晃たち従業員には分からない。

しかし、ものの貸し借りをするような間柄ならば、店で見掛けていてもおかしくない。

誰なのか、と尋ねようとした晃を、八木が後ろ手で制する。

司書嬢はメモを一枚さつと取ると、ボールペンでさらさらと何か

を書いた。

「こちらが、木村の携帯の番号です」

「お、気が利くな。ありがとよ」

八木はメモを手にとると、一瞥して女性に返した。

じゃ、と手を挙げると、再び晃の腕を引きカウンターを離れた。

またも引き摺られるように歩きながら、晃は自分を荷物かなにかのように扱う八木の態

度に、半ば怒りを覚えながら尋ねた。

「どこへ行くって言うてくれれば、そっちへ歩きますよ。俺だって小学生の子供じゃないんだからっ」

抗議した晃の顔をちらつと横目で見ただけで、八木は無視して歩き続ける。

大図書館は正四角形をしている。八木は受付のカウンターからほぼ対角線にある扉に、晃を引っ張って行った。

一見、壁の装飾かと思ってしまうような、四角形の幾何学模様を表面に彫り込んだ黒い扉は、ちょうど宗教哲学の大きな棚の陰になっていた。宗教哲学という、一般には馴染みにくい分野の棚の裏側とあって、扉の周辺には人気がない。

それでも八木は、身近に人がいないか、周囲を確認してから、右脇の壁に取り付けられているタッチパネルの蓋を開けた。

素早く数字キーを押す。と、かちん、という小さな音が、扉の裏側から聞こえた。

八木はパネルの蓋を閉じると、黒い扉の中央にある銀色の丸い部分に触れた。

銀色の部分はタッチ式の開閉装置だった。黒い扉は、丸い開閉措置を半月に分けるよう

に、左右に開いていく。

開いた空間に、八木は晃を放り込んだ。文字通り、投げ込まれるように中へ突っ込まれ、晃は危うく転びかけた。

「なにするんですか！」

自分も中へ入り、八木は自動開閉装置に触れ扉を閉めた。

「人を、いったい何だと……！」

日頃の人使いの荒さもある。ここは人気のない場所でもあるし、この際ぶちまけてやる

うと、晃は八木を睨上げた。

八木は、晃に冷たい目を向ける。

「俺に切れるのは構わんが、千載一遇のチャンスを、そんなつまらん怒りでふいにしようとするなら、おまえもいい加減、頭の悪い男だな」

かつと頭に血が上る。掴み掛かった晃の手を、八木は、やすやすと掴み返した。

「遊んでいる暇はない、と言ったはずだ」

冷徹な声で眉ひとつ動かさず告げると、八木は、晃の手を放す。

己の勢いに押された晃

は、つんのめって前の棚に体をぶつけた。

「ってえ」晃は、一番強くぶつけた右肩を擦りながら、棚に寄り掛かる。

「資料は全部、検索システムで探さないと、閲覧できない」

晃の気持ちなど全く意に介さず、八木は中に向かって進んでいく。アンドロイドよりも機械的な表情で周囲を見回す上司に、晃は心底むかつと怒りを覚えた。

扉のついた棚と棚の間の細い通路を躊躇なく歩く八木の背に、晃は猛然と殴り掛かる。

が、固めた拳が届く寸前、振り向いた八木の足が、晃の右の脛を蹴上げた。

骨が折れたかと思うほどの痛みに、我慢できず前へ倒れる晃の襟を掴んだ八木の逞しい

腕が、そのまま晃を宙吊りにする。

氷のような視線が、痛みと怒りに引き攣った晃の顔を見下ろす。

「本気で、おまえは馬鹿か」

「放せっ！」

八木は僅かに片眉を上げると、晃の襟を放す。どさりと床に落とされた晃は、したたか

蹴られ、ずきずきと痛む右膝を引きずりながら上体を起こした。

「こんなところで、まだじゃれたがるようじゃ、妹の無念なんぞ晴らせんな」

晃はぎっ、と、八木の鋼鉄の表情を睨み上げた。

「……あんに、何が分かる！ 美鈴は、美鈴の体は、誰とも分からない連中の手で、切

り刻まれていたんだ！ 内臓を全部抜き取られて、代わりに汚らしいぼろを詰められて、

まるでゴミみたいな扱いをされて！ 傷口は縫われてもいかなかったんだ！ 血に塗れたま

ま、半透明の粗大ゴミ用パックに入れられて、役所の奴は、美鈴の遺体の入ったパックを、

まるで宅配物か何かのように、無造作に玄関先に置いたんだ！」

「だから？」八木の、鋼より硬い声が、スチール棚ばかりの空間に

響いた。

晃は一瞬、呆気を取られ、八木の長身を見つめる。

「『だから？』って……？ あんたには、人間の情がねえのか？

妹だぞ。血を分けた妹

の遺体が、別に法を犯したわけでも何でもない、むしろ交通事故の被害者なのに、汚物みたいに扱われて。それで頭に来ない家族が、どこにいる！」

「俺のかつての部下は、頭をもぎ取られて戻って来た」

八木の抑揚のない声が紡いだ信じられない言葉に、晃は思わず目を見開く。

「それは、どういう……」

「十二年前のレリア・D・iウイルス大流行時、俺は公安二課所属の保安官だった。二課

の仕事は、治安維持だ。俺は、レリア・D・iウイルスの『特異病状』によってパニック

を起こした連中で大混乱になった真樹区南外縁に、部下五人と共に混乱沈静化のため向か

った。だが、パニックはエスカレート。暴徒と化した市民に武器を奪われ、逆に殴られて、

俺はその場に倒れた」

外縁での、狂暴化し暴れる人々の様子は、当時インターネットニュースで頻繁に映され

ていた。晃も、ニュースの度に凄惨な映像を見ていたのを記憶している。

当時を思い出し苦いものが込み上げ、顔を顰める晃とは逆に、八木は全く表情を動かさ

ずに続けた。

「気が付いた時、俺は搬送先の病院のベッドに寝ていた。周囲に部下の姿はなかった。部

下たちの安否を看護師に尋ねたが、その時は明確な答がなかった。

どうなったか分かったのは、俺が退院した後だった。部下の一人が、公安二課の宿舎に遺体で戻って来た。頭部はなく、指紋の照合で本人と確認できたという書類がついて来た。俺は公安上部に事情確認の書類を出したが、回答は当然ながら一切なかった。部下の遺体は、なぜ頭部がないのか不明のまま、実家へ送られた」

晃は、美鈴の遺体が帰って来た時と同じ怒りが、体の中から突き上げるのを感じた。

「それで八木さんは、有耶無耶にしちまったんですか。部下の死を。そのまま、ほっかぶりしちまったんですか。知らん振りで、自分はのうのうと店なんか出して暮らしてたんですか」

言ってしまったから、晃は違う、と思った。

自分が感じている怒りは、八木へのものではない。八木に当たるのは、お門違いだ。

晃は、反省からの気恥ずかしさと、次にくるであろう、八木の痛烈な侮蔑を躲すために、口を尖らせ八木から視線を外す。

が、予想に反して、晃の頭上に、八木の静かな声が降って来た。

「機会を待っていた」

意図せぬ上司の態度に驚いて、晃は八木を見上げる。八木は、声と同じく静かな表情で

晃を見返した。

「俺の部下の解剖所見は、部下が保安官であったという理由で、一般公開はされない。書

類を公安局の事故処理部から引っ張り出すには、別な不正を挙げ連ねるしか手がない。そ

のの一つが、おまえの妹の解剖所見だ。日野美鈴の解剖が不正な行為を含むものであったな

ら、必ず他の書類も再調査の対象になる。公安は、立場上は絶対に公正でなければならぬ

いから、たとえ自分たちの不利になると分かっても、不正所見は発

表するはずだ」

「じゃあ、あんたは俺が美鈴の兄だと知ってて、雇ったのか？」

確かに、雇われた当初を思い返すと、不自然な場面が多かった。

八木は面接の時、晃の顔を一度も見なかった。ずっと履歴書に目を落としていた。

それに、そもそも晃がホワイト・ウインドに職を求める切っ掛けが、大学の友人の紹介

だった。晃や浅野と同じ高次コンピュータ分析科の、名前は忘れたが、確か親が、浅野と

同じく公安局のお偉方だった男だ。

晃は思い出して、はたと思い至った。

「もしかして……、あんた、浅野の親父を知ってんのか？」

八木は、今度こそ呆れたという表情で、まじまじと晃を見た。

「おまえは、真性の大馬鹿か。保安官だった俺が、公安局副局長を知らなくてどうする」

晃は苛ついて首を振った。

「違う！ 個人的に、だ。あんた、俺を自分の店に来させるために、浅野の親父に頼んだ

んじゃないのか？ それで、浅野が直で俺に、あんたの店に行くように言っただんじゃ、ば

ればれだから、別の友達に言わせて……」

「考え過ぎだ。下っ端の一保安官にすぎなかった俺が、どうしてお偉方に頼み事なんかで

きる？ 子供でも分かる理屈だろう」

道理では、八木の言う通りだ。だが、晃は何となく引っ掛かりを覚えた。

「だけど、だったらなんで、あいつがあんたの店を俺に紹介したんだ？」

「大学の掲示板の募集でも見たんだろう」

面倒くさそうに顔を歪め、八木がぶつきらぼうに返す。納得でき

ず、晃は食い下がった。

「あんたの店の店員募集なんて広告、俺は中奥大の掲示板では見かけなかったぜ」

「他の大学の掲示板にあったんだろ」

「そんな屁理屈……」

勢い込んで言い募ろうとした晃の声は、八木の携帯の呼び出し音に止められた。

繋いだ片耳のイヤホンのスイッチを入れ、八木が応答する。

短いやり取り。通話を切った時、八木の表情が険しいものに変わっていた。

「飯山医院が襲われた。ヤブ医者は、奴らに捕まったようだ」

飯山医院の中は、女たちに襲われた晃が麻生に運び込まれた時とは、様相が一変していた。

診察室の机は真つ二つに割られ、診療用のコンピュータもばらばらに壊されている。簡

易手術室の手術補助ロボットやマニピュレーターも、粉々に近く壊されている。

手術室の床には、大量の血液が溜まっていた。

「荒っぽい真似しやがったな」渋い表情で、八木はしゃがんで床の血に触れる。

晃は訳が分からず、ただ呆然と争った形跡の残る室内を見回す。

「どうして、飯山先生が……？ 例の女たちがやったのなら、何の理由で？」

「恐らく、俺たちに関する事柄だろうな」

憤りを抑えた八木の声に、晃はようやく女たちの行動の意味に気付いた。

飯山はコリンの現在の主治医だ。だから、女たちは飯山を狙ったのだ。

「あいつらは、市の非公式組織の兵隊だ。ターゲットは必ず、どんな手を使ってでも捕ま

える。邪魔だと判断した者は、完全に排除する」

晃は、ぞつとした。八木のいう排除とは、邪魔者は殺す意味も含んでいる。

殴り倒された時、晃にそれ以上の危害を加えなかったのは、『次は殺す』という警告だったのだ。

「殺人までして、捕まえようなんて。コリンにどんな秘密があるん

だ……」

呟いた声は、自分のものとは思えぬほど震えていた。晃が、例の女たちへの己の中の恐

怖に眉を顰めた時、麻生が手術室の扉前に現れた。

「連中、どうやらコリンをおびき出すために、飯山さんを攫ったよ
うだな」

破壊の被害に遭い、青色だけが強調されている天井のLEDに照らされて一層ぼーっと

青白く見える麻生の顔が、晃と八木に交互に向けられる。

「コリンは無事か？」

「多分」八木は険しい表情で答えた。

「浅野副局長の自宅にいる。連中でも、さすがに副局長にまでは手が出せまい」

「なら、いいがな」中に入って来た麻生は、八木よりさらに険しい顔で、足下に散らばった手術器具を見下ろす。

レーザーメスの壊れた先端を拾い上げようと伸ばされた麻生の左

手が、医院の玄関が開いた音に、ふっと止まった。

ブーツの踵が廊下の床面を忙しなく踏み鳴らす高い音が、こちらへ近付いて来る。現れ

たのは、先刻も会った登詩磨区の市立大図書館の司書嬢だった。

八木が、訝しむ顔で尋ねた。

「どうした？ 木村」

「浅野副局長が襲われたわ。場所は、登詩磨区南。旧イーデルランド大使館跡よ」

「なんだって？」驚きのあまり、晃は思わず声を上擦らせる。

八木は低く唸った。

「いよいよ、なりふり構わなくなってきたやがったな」

「伊勢さんたちからの連絡だと、別の一隊は副局長の自宅へ向かったらしいわ。ご家族に

も危害が加わる危険が高いかと」

「コリン！」晃は走り出した。

コリンが危ない。美鈴と面影が重なる少女を、何としても守らなければ。

ただ一心にコリンを救うことだけを思い、晃は飯山医院を飛び出した。

遮二無二、せえせえ息を切らせて走り出た街路は、既に日が落ちていた。

春の夕暮れの、オオトゲアレチウリの新芽の臭いを含んだぬるい空気が、コリンの元へ

急ごうと気が逸る晃の喉に、否応なく入り込む。

南外縁から中奥区は遠い。塔経市が、いくらかつての規模の三分の一ほどこしか面積がないといっても、徒歩で行ける距離ではない。

風に頬を叩かれて、頭が冷えた晃は、すぐにでも飛んで行きたい気持ちを抑え、路線工

アーバスの停留所を探した。

LEDライトが天に向かって淡い照明を放っている街路全体に視線を走らせる。

程なく停留所の緑色のライトを見つけ、そちらへ向かおうとした晃を、低めの落ち着いた女声が呼び止めた。

「こつちよ！」

振り向くと、向かおうとしていた場所の斜め反対側の路肩に、ブルーのエアカーが一台停まっていた。運転席から木村女史が、顔を出している。

助手席には麻生が、後部座席の右には八木が座っていた。「乗って」木村女史は操作パネルを素早く触り、後部座席の扉を開けた。

エアカーに駆け寄った晃は、開いた扉から滑り込むように乗車した。

「後先を考えずに飛び出すな」

左側に腰を下ろした晃を、八木が洪い声で叱る。

むつとする。だが、頭に血が上って見境がなかったのは確かなので、晃は素直に「すいません」と頭を下げた。

木村女史が、車を発進させる。

「それにしても。どうして副局長は、旧イーデルランド大使館なんて場所へ出向いたんだ？」

エアカーの低いエンジン音に、八木の問いが被る。

「密告者がいたのよ。例の女たちの組織の全容を教えるという。その人物が、旧イーデルランド大使館での密会を指定して来たの。しかも、護衛はごく少数で、という条件で」

「しかし、よくそんな見え見えな手に、副局長が引つ掛かったな」
麻生が半ば怒ったような、呆れたような声で言った。

木村女史の、ベルベットののような艶のある、それでいて硬い表情の声が答えた。

「わたしも、そう思うわ。ただし、密告者がただの民間人だったり、塔経市の一職員だったりすれば。けど、そうじゃなかった。あちらの組織は入念に罠を張ったの。副局長に情報提供を申し出たのは、公安局長自身だったのよ」

晃は愕然として、「それは……」と身を乗り出した。

何で、公安局長が例の女たちの組織を知っているのか。いったい、どんな繋がりがあるのか？

晃が疑問を口に出す前に、八木が口を開いた。

「公安局長までも一枚噛んでるのか。となると、浅野副局長の安否は難しいな」

嶮を含んだ太い声に、木村女史が淡々と返す。

「そうね……。公安局は、今やセンターに牛耳られてるわ。局長も、センターの言いなり
よ。わたしたちの活動も、そろそろ限界かもしれないわ」

エアカーが南外縁を出て、水名渡区の北辺に入る。旧市街の、路地の多い入り組んだ道

は終わり、新市街の整然とした道路が現れる。

新市街の道には、全てエアカーの自動運転に対応する誘導センサーが、路面に組み込ま

れている。二百年前に機能を失った真樹区には存在しないシステムである。木村女史は、

手動から運転を自動に切り替えた。新市街では、手動運転は全面禁止である。

晃は、木村女史から出た、聞き覚えのない単語について、おずおずと尋ねた。

「あの、センターって？ それに、あなたたちの組織というのは…」

「センターは、国立免疫センターの略だ」

麻生がぶつきらぼうに答えた。

「二百年前、初めて人類がレリア・ウイルスの脅威に晒された後、二度と大規模な被害を

出さないために設立された。現在の活動名目は、ウイルス感染による病理の研究と予防だ。

ところが、実質は違う。奴らの真の研究目的は、人の進化だ」

「人の、進化……」

晃は急に鼓動が早まるのを感じた。

『進化』??その言葉が晃の頭の中で渦を巻く。と同時に、何かが、自分の体の中で目覚めようとしているのを感じる。

ずっと長い間、晃の中に眠っていた『何か』が、『進化』という言葉を鍵に、動き出そ

うとしていた。あくまで感覚でしかない。しかし、晃には確実な事柄として『何か』の胎動が、明瞭に感じられた。

得体の知れない恐怖に、晃が俯いた直後。

「追って来ているわ」

木村女史の緊迫した声が車内に響いた。

「奴らが俺たちの行動を逐一しつこく監視しているのは、周知のことだ」

何を今さら、と鼻を鳴らした八木を、木村女史は、スクリーングラス越しに切れ長の形の良い目で睨んだ。

「監視をしている時と、追尾の仕方が違うわ。姿を現している。ほら」

木村女史は、進路モニターの下の車体周囲確認モニターを指差した。

晃は身を乗り出し、画面を見た。映し出されたすぐ後方の赤い車体のエアカーには、若い女性が乗っている。

晃は、女がコリンと同色の長髪なのに気が付いた。

「俺を襲った女……」

苦みと、怒りが晃の胸に広がっていく。思わず後部ガラスを振り返った晃の肩を、隣席の八木が強く掴んだ。

「見るな。相手の意図が分からん以上、しばらく気付かない振りをしておけ」

八木の渋い顔が、直後の衝撃に歪んだ。

晃たちの乗ったエアカーは、急に何かにつ張られたように、がくんと後ろに振られた。た。

「なんだっ？」反動で前へのめり、慌てて手をダッシュボードに着いた麻生が、強持てを驚きの表情に変える。

木村女史が、麻生に強い声で答えた。

「車両緊急停止システムよ」

自動走行中のエアカーに何らかの故障が発生した場合、交通統括メイン・コンピュータが強制的に問題車両を停止させられる。

新市街に住んだことがあれば、誰でも知っているシステムではある。しかし??。

「それは事故対策だろう。この車両は事故なんか起こしていない」
噛み付くような麻生の言葉に、木村女史は冷静に答えた。

「そうね。でも今、どうしてシステムが作動したかの説明をしている暇はないわ。……外

縁へ戻りましょう」

木村女史は素早い手捌きで運転を手動に切り替えると、思い切りアクセルを踏み込む。

途端、減速していたエンジンの回転数が上がり、晃たち同乗者の体に重力がかかった。

木村女史がハンドルを右に切る。スピードが上がり続けているエアカーは、大きく右へ

傾きながら、交差点を曲がる。

途端、正面から二台の車が並走でこちらへ向かって来た。

「ナンバー5235、青のアルバトロス。市内道交法違反です。至

急、そこで停止しなさい』

公安道路安全部のメイン・コンピュータの音声が、周囲の強化アクリル張りのビルに反響する。

前からは公安の車両、後ろからは、例の女の車。晃たちが乗るエアカーは完全に前後を挟まれた。

エアカーの地上からの浮上規制高度は最高で百メートル。その高度を超える浮力を有する車種は、塔経市では販売を許可されていない。

公安の車両は、右の車が地上二十五メートル辺りを、左の車は五十メートル辺りを滑空して接近して来る。

背後の女は、その間の三十五メートル付近で走りながら迫って来ていた。

緊張して車外を見詰めていた晃は、妙なことに気が付いた。

午後五時といえば、普段ならサラリーマンの帰宅ラッシュ時刻である。だが、街路には

三台の車以外には、一台も見当たらない。

晃は遅ればせながら、嵌められたのだと分かった。

飯山医院と浅野副局長の襲撃と聞けば、晃たちが動き出すのを計算して、公安と、例の

女たちの組織は畏を仕掛けたのだ。

女たちの目的は、コリンを捕えることだけではない。麻生や彼の仲間、木村女史の言っ

ていた《羽化しても生き延びた人》の組織を潰し、捕えることだ。

奴らの仕掛けはみごと成功し、今まさに、晃たちは捕えられようとしている??。

あと数メートルで公安車と衝突するという距離で、木村女史は突

然、車体を下方へ沈めた。地面すれすれの超低空で滑空し、公安車両の真下をすり抜ける。車体の底が舗装面に幾度か接触し、火花が散り、衝撃が晃たちを襲う。

困みを逃れた??と思った瞬間、後方の女の車が体当たりを掛けて来た。

衝突で加速のついた晃たちの車は、前方のビルの壁面に向かって滑っていく。エアカー

の前方部が紙細工のように無惨に潰れて行く光景が、晃の目にスロームーションのように

映る……。

もう駄目か、と目をぎゅっと閉じた晃の体を、強い腕が引っ張った。

八木に抱きかかえられ、晃は大破する寸前のエアカーから路上に転がり出た。叩き付けられる衝撃を弱めるため、ころころと路面を何度も転がる。

硬い路面との摩擦であちこち打ち身や擦り傷ができ、ずきずきと痛んだ。が、のんびり痛みを感じている暇はなかった。

「立て！」頭の上へ、八木の鋭い声が落ちる。晃は反射的に飛び上がるようにして立ち上がった。

「走るぞ！」と叫ぶなり、八木が駆け出す。晃も後に続いた。八木の先に、麻生と木村女史の走る姿が見えた。

背後からは、公安保安官の制止の声と、追って来る靴音がする。必死に八木の背を追う

晃の耳に、木村女史の指示が聞こえた。

「『風の御殿』へ！」

先の八木が、路を左に曲がる。続いた晃は、曲がったすぐの左側に『シャトー・オブ・ウインド』という看板を見つけた。

3Dレーザーで宙に描かれた、くるくると回るアルファベットの下に、同じく回転している赤い矢印が見えた。矢印に従って、晃は奥の黒塗りの階段を駆け降りた。

先に降りた八木が扉を押さえ、待っていた。晃が走り込むと、八木は素早く扉を閉じた。

中は狭いカウンターバーだった。細長い止まり木に客が二人いた。何事かと晃たちを振

り向く。

カウンター内でグラスを拭いていたマスターが、目を上げた。

「どうした？」

「公安に仕掛けられたわ」

木村女史が敏捷にカウンターに入る。

「間もなく、ここに来るわ」

無言で頷いたマスターが、カウンターの右端に並べていたワインボトル四本を退け、下に隠されていたキーボード・パネルの蓋を開ける。

軽い手さばきで操作すると、背後の棚の下半分が消えるように開いた。

「早く」と、木村女史は、晃に向かって手招きした。晃はカウンターの内側へ入り、ぽかりと開いた棚の穴を、屈んで通る。

「みんなも、隠れたほうがいいわ」

背後で木村女史がマスターに告げる声と、店の扉が開く音が重なる。振り向こうとした

晃の背を、麻生が強く押した。

「何するっ……!!」

「振り向いてる暇はない」

強い隻腕に二の腕を掴まれ、晃は引き摺られるように、コンクリートを打ちっ放しの、

薄暗い階段を下りる。

足音は、晃と麻生の二人分だけだ。十五段ほどの階段を下りながら、晃は、不安と恐怖に早鐘を打つ己の心音を感じる。

階下に降り切ったところで、麻生は晃の腕を放した。

「木村さんと、店長は……?」

晃は恐る恐る階上を見上げる。開いていたはずの棚の下は、ぴったりと閉じられている。

木村女史と八木は逃げ遅れたのだ。おそらくマスターや、多分、麻生の仲間かと思われる、店の客たちも。

旧式のハロゲンライトに照らされた麻生の顔は、苦汁に歪んでいる。

「仕方ない。だが、由貴や八木のことだ、公安連中に簡単に捕まるへまはしないだろう。」

……俺と君は、あいつらを信じてやるしかない」

行くぞ、と歩き出した麻生の体からまたも匂う花の香りに、晃は眉を顰める。

「飯山先生が、麻生さんは《羽化しても生き残った人》だと、教えてくれました。八木さ

んも、あなたたちの仲間なんですか？」

麻生が振り返った。晃を見る強い表情に、ゆっくりと自嘲が広がっていく。

「《羽化しても生き残った人》か……。やっぱり、優しいやつだな、ヤブ医者は。あの人

以外の医者は、俺たちの仲間を『変異種』だの《ウイルス・モンスター》だのって、軽蔑

して呼んだよ。人間扱いなんて、一切なしだった」

晃は心臓を鷲掴みにされた気がした。

十二年前、変異した兄の体を見た時、気の毒だと思つと同時に、途轍もなく恐ろしいと

も感じた。自分たちとは全く違う、異質な生き物に兄は変貌してしまつた??。

人間は往々にして、異質な者を排除しようとする。言語や肌の色、言動などで、己と他者を比べ、近い者のみで集団を成す。

自分たちの集団の特性から少しでも外れる者は、異端と見なし、時には激しい弾圧を加える。死んだ長兄や麻生のように、著しく人の形から外れてしまつた者は、尚更だ。

だが、表面的に異質となつた者を一方的に悪と決め付け、排する行為は、決して正義ではない。正義とは反すると分かつていても異端を排そうとする陰には、異質に対する人間の本質的な恐怖心がある。

変わり果てた姿の兄が恐かつたように、晃は、今まさに自分の眼前にいる麻生が恐い。

はつきりと『恐い』と意識しているわけではない。無意識下で、感じているのだ。麻生

から香る花のような匂いを嗅ぐと不快な気持ちになるのも、意識の

表面に昇ってこない恐怖心からだ。

自分が、かつて麻生を化け物呼ばわりしたという医師たちと同じだと感じた晃は、いたたまれない気持ちになり、麻生から目を逸らした。

麻生は、晃の心情など気付かぬ様子で話し続ける。

「……八木は、あいつからも聞いてるだろうが、幼馴染みだ。小中高と一緒にね。腐れ縁

っていうのか、クラスまでほとんど同じだった。八木は、俺がレリア・D・iウイルスに

感染して羽化した後も付き合ってくれた、数少ない『まとも』な知り合いだ。……幼馴染

みというだけの縁で、あいつをトラブルに巻き込んだのは、済まないとも思っているんだがな」

最後のほうは自分自身に語るように、麻生は呟いた。晃は、自己より頭一つ背の高い隻

腕の男の、精悍な顔に浮かぶ微かな後悔の表情を、複雑な心境で見上げた。

「店長は……、きつと迷惑だなんて思っただけですよ」

店に飛び込んできた見ず知らずの少女の怪我でさえ、文句を言いながらも、きちん

と看病した八木である。晃よりもずっと強い胆力を持っている八木は、変貌して寄る辺を失

った幼馴染みの麻生を、放ってなどおけなかったのだ。

思ったままを素直に口に出してしまった晃を、麻生は初めて見る動物を眺めるかのよう

な顔で、じつと見る。

「なん……、ですか？」穴が空くかと思うほど眺められて、気恥

わず片眉を上げ、麻生を睨んだ。

麻生は、ほんの僅かに微笑むと、「いや」と首を振った。

「君は、どうも不思議な力を持っていると思つてな。歌声もそつだが……。君の声には、

聞く者を納得させる何かがある。尋香が??例の女たちのことだが??君を付け回すの

も、もしかすると君の『声』に用があるのかもしれない」

「またも初めて聞く言葉である。音だけでは意味が分からず、晃は首を傾げた。

「『尋香』つて、どうゆう……?」

「《香りを尋ねるもの》さ。どうも、俺たちには独特の『匂い』があるらしい。自分では

分からないのだが、あの女たちは、その特殊な『匂い』を嗅ぎ分ける能力を持っているんだ」

晃は、愕然とした。

晃が麻生や真樹区の浮浪者たちから嗅いでいる『匂い』を、尋香と呼ばれる例の女たちも、同じように嗅ぎ取っている。

実際、尋香が晃と同様、麻生たちの『匂い』を花の匂いと感じているかは分からない。

だが、『羽化しても生き残った人』の特殊な『匂い』を嗅ぐことができるという点では、全く同じだ。

ならば、晃も尋香なのか？ そもそも、なぜ晃は麻生たちの『匂い』を嗅ぐことができ
るのか？ 麻生たち『羽化しても生き残った人』は、なぜ特殊な『匂い』を発するのか？
？。

混乱する思考を纏めようと黙り込んだ晃に、麻生が「どうかしたのか？」と、訝しげな表情を向けた。

我に還った晃は、はっと麻生の顔を見返す。

「いえ……。ちょっと驚いただけです。麻生さんたちに、そんな特徴があるっていうのが」

麻生は太い眉を僅かに釣り上げたが、「そうか」と無造作に返しただけで背を向けた。

「少し、喋り過ぎだな。……行こうか」

歩き出す麻生の背に付き従い、晃は気持ちを切り替えると、薄暗いコンクリートの道を踏み締めた。

地下の道は、かなりの距離に亘って続いていた。横幅も広く、二十メートル近くある。

天井も相当に高い。等間隔で並んだハロゲンライトだけが頼りの道の両壁には、所々に『シャトー・オブ・ウインド』の隠し階段と同じような階段が作られている。ただ、ほとんどの階段はコンクリート壁や鉄板で、外への扉を塞がれていた。階段の脇には、換気口であるらしい、四角く開けられアルミ格子が嵌められた穴が、必ずある。

地下道の途中には、いくつかの枝道が左右に走っている。何のための道なのか、よく分からない。

壁から染み出した地下水の水溜まりを避けながら、晃は枝道が見える度に、その先を覗き込んだ。

晃の興味の対象に気が付いた麻生が、足を止めずに説明した。

「この地下道は、約百九十年前に作られたらしい。オオトゲアレチウリが地上を覆い、陸路の交通がほぼ寸断されたため、当時の人間が地下に交通網を築こうとして掘ったんだ。」

だが、それも巧くは行かなかった」
麻生は、右手に見えて来た細い枝道を指差した。ハロゲンライトに照らされた奥を覗いて、晃はぎよつと硬直した。

枝道には、入口から一メートルほどのところまで、オオトゲアレチウリがびっしりと詰まっていた。

「地盤が弱く天井が落ちた箇所が、塔経市を出た辺りで幾つかある。天井が落ちた時、流入した土砂とともにオオトゲアレチウリが流れ込んで来た。普通の植物なら、日の光がな

ければ枯れてしまう。ところが、オオトゲアレチウリは地上に繋がっている部分から栄養を補給して、地下でも繁殖し続ける。この地下道に繁殖しているオオトゲアレチウリは、四十キロ先の、さらに枝分かれした地下道の落盤箇所から伸びて来ている。知つての通り、オオトゲアレチウリを除去するのは困難だ。なので、地下道工事は中断になった」

ほんの一瞬、麻生は苦々しげに顔を歪める。

光合成を地上の親株に任せた葉と茎は、鉄錆色に変色し、より硬質になっている。錆に似た臭気が、鼻を突く。

「この他にも、幾本かの枝道で落盤が起きて、オオトゲアレチウリが地下へ入り込んだ。

中奥区を縦断するこの道は、まだ無事だが、さっきの様子じゃあ、いずれこの道もオオト

ゲアレチウリで埋まるだろうな」

塔経市の地下に掘られた道が、どれくらいの長さになるのか、晃は知らない。だが、地

下道の全てを、オオトゲアレチウリが埋め尽くしたとしたら……

繁殖力の強いオオトゲアレチウリは、やがて地下から地上へと芽を出すかもしれない。

そうなれば、塔経市は全滅する。

硬い表情の麻生の隣で、晃は思わず片手の拳で口を覆う。言い知れぬ恐怖が、背を震わせた。

「この地下道は、忘れられた場所だ。市の記録には残っていない。

俺たちが見つけたのも、

偶然に近い。亡くなった史跡研究をしていた仲間の覚え書きから、

この地下道が分かった

んだ。市の記録がないのは、中央が、自分たちが犯した過ちを隠蔽したいがためだ。しかし、

放っておけば、いずれオオトゲアレチウリが地下を占拠する。

それでも、中央は見て

見ぬ振りを続けるんだろう。自分たちの保身のために。……人間は、

自らの業で滅びる運

命なのかもな」

落胆とも、諦めともつかぬ表情で呟くと、麻生はまた歩き出した。確かに、麻生の言う通りかもしれない。人間は自分たちの強欲に

溺れ、結果としてレリ

ア・ウィルスという恐ろしい禍を引きずり出してしまった。

欲と驕りの代償が人類の滅亡ならば、それはそれで仕方がない。

だが今は、暗い未来に震撼している場合ではない。沸き上がった恐怖心を無理矢理どう

にか胸の奥に押さえ込めると、晃は麻生の後を追った。

薄暗い地下道を、晃は麻生とともに黙々と進んだ。

しばらく歩き続けたあと、麻生は左手に現れた枝道へと入った。

枝道は、僅かに登り坂になっている。傾斜の感じが、浅野の家へ向かう坂に似ている。

晩春の花が、道沿いに並ぶ豪華な家々の庭を飾る光景を、晃は思い出していた。

さらに坂道を進み、麻生は右手の枝道へと折れた。

地下道はそこで止まっていた。無骨なコンクリートの壁が、晃たちの眼前に立ち塞がる。

壁には右下に鉄扉が取り付けられていた。

後から取り付けられたと思われる鉄扉の取っ手を麻生が回した時、

「誰だ！」と扉の向こう側から鋭い声がした。聞き覚えのある声に、晃は答えた。

「俺だ。日野晃」

扉が開いた。通って来た地下道と変わらぬ薄暗い明かりの中で、浅野がほっとした表情

で立っていた。

「どうして、こんなところにいるんだ？」

尋ねつつ、晃は中へと入った。扉の内側は、五メートル四方ほどの広さだった。

地下駐車場の作りかけ、といった感じの部屋だった。壁は通ってきた地下道同様、コン

クリートの打ちっ放しである。天井も、これから細工するつもりだったのだらう、電線の

穴は切られているものの、工事用のハロゲンライトがひとつ、ぶら下がっているだけだ。

奥に鉄製の階段があり、浅野の母親と弟妹が座っていた。

晃の問いに、浅野は、普段いつも柔和にしている表情を苦渋に歪めた。

「公安の保安部隊が、家に来たんだ。父を反逆罪で射殺したと言っ
て」

「何だつて？」自分たちが聞いた話とは違う。晃は、驚きに目を見
開いた。

晃と同じく、公安の保安部隊が動いたことに驚いた麻生が訊いた。
「浅野副局長は、尋香に襲撃されたんじゃないのか？」

「尋香つて？」浅野は眉を寄せ、不審そうに首を傾げる。

「例の女たちのことだ。尋香は、国立免疫センターの私兵なんだ」
晃の説明に、浅野は「ああ、なるほど」と頷いた。

「そういえば兄貴が、携帯で『尋香が』って言ってた。何のことが、
さっぱり分からな

ったんだけど、例の女たちのことだったのか……」

「それで、浅野副局長は……？」

保安部隊の話が事実なら、浅野にとっては一大事だ。晃は心配し
つつ、浅野の表情を窺
った。

晃の懸念に気が付いた浅野は、薄く笑うと、きっぱりと言った。

「大丈夫だ。父は死んでない。イーデルランド大使館に同行してた
兄から『襲撃はされた

が、命に別状はない』と連絡が来た。さっきも言ったけど、兄は『
尋香が』って言った

から、間違いなく襲撃者は例の女たちなんだろう。兄貴は『自宅も
襲われるかもしれない

から、用心しろ』とも言ってたんだ。けど、連絡を受けている最中
に尋香たちが来て……」

晃は、その時になって、コリンがいないことに気が付いた。コリ

ンの行方を聞こうとし

た先に、麻生が口を開いた。

「尋香たちが、コリンを連れて行ったのか」

浅野は硬い表情で「はい」と頷いた。

「尋香の一人が「コリンの姉だ」って名乗ったんです。「世話になつていて妹を引き取り

に来た」って。渡しちゃいけないって思ったんだけど、コリンは「一緒に行く」って言い

出して。俺たちにこれ以上の迷惑は掛けられないからって。……コ

リンが出て行く直前に、

日野に伝えてくれって言った言葉がある。「もう一度、夕焼けのセンタービルを見たい」

って」

晃は内心、嬉しさとも驚きともつかない思いが湧き起こった。

夕焼けのセンタービル。朱色に染まるクリスタルの曲線の美しい景色は、晃と美鈴だけ

の懐かしい思い出だ。赤の他人のコリンが、知るはずがない。

もしかしたら、コリンは浅野の家にあった絵を言っているのかも
しれない。しかし、な

らば浅野に告げればいい話だ。晃にわざわざ伝える必要は一切ない。

美鈴との思い出を、本当にコリンが知っているのなら、どうして
か？ コリンと美鈴と

は、どんな関係があるのか？

「俺……は、コリンに会わなきゃならない」

晃は茫洋と呟いた。

コリンに会っても、妹とコリンの繋がりなど、分からないかもしれない。それでも、話を聞かないよりはマシだ。

晃は、この場で唯一、コリンの連れて行かれた先を知っているはずの麻生を見た。麻生

は左腕を腰に当て、渋い顔をする。

「確かに、コリンの身は心配だ。だが、なぜ君は、そんなにコリンにこだわるんだ？」

コリンと君に、どんな関係があるんだ？」

晃は一瞬、迷った。美鈴と自分だけの思い出を、コリンが知っているかもしれないという仮定を、麻生に言うべきかどうか。

ただの思い過ごしかもしれない。確証のない思い込みで、麻生や他の人間に迷惑は掛けられない。

言葉に詰まって俯いた晃の隣に、浅野が立った。

「僕も、日野はコリンに会わなければならぬと思う」

きつぱりと言い放った浅野に少し驚き、晃は目を上げる。

浅野は横目で晃をちらりと見て、微笑んだ。

「日野は、コリンの中に妹の美鈴さんの面影を見ているんです。コリンが、美鈴さんの何かを、もしかしたらメッセージか何かを知っているかもしれない。ならば、日野はコリンを

助け出して、その言葉を聞かなければいけないんです」

麻生は、浅野を睨み付けた。浅野は麻生の鋭い視線を睨み返し、

続けた。

「コリンは、少しずつ人らしい感情を回復していました。初めはガイノイドじゃないかと

思うほど、無表情だったのに。コリンが変化したのは多分、日野と出会ったからだと思う

んです。日野を見て、コリンの中に凍っていた記憶が、ゆっくり解けていった。そんな感じだったんです。だから……」

「……コリンを連れ出すのは、容易じゃない」

麻生は、絞り出すように言った。

「尋香を飼っている免疫センターの場所は、分かっている。だが、無闇に侵入はできない。

俺たちも仲間を助けようと、侵入経路を探した。しかし、二百年前の嚴重なセキュリティ

ーが現在でも生きていて、侵入者を完璧に排除している。奇跡的にセキュリティを掻い

潜れたとしても、それでもまだ、尋香たちに気付かれずにセンターに入り込むことは、ほ

ぼ不可能だ」

「どこなんですか？ 免疫センターがあるビルは」

完全に侵入不可能なほど堅牢なビルとは、どこなのか？ 本当に

何としても、入り込む

ことは絶対できないのか。

逸る気持ちで、晃は麻生に訊く。麻生は険しい目線を、晃に据える。

「真樹区、センタービルだ」

一瞬、ぐつと晃は息を詰めた。

美鈴との思い出のあるセンタービル。あの美しいクリスタルの塔の中に、免疫センター

があるのか。

「どうしても、駄目ですか？」

浅野が強い声で麻生に問う。麻生は目を閉じ、「無理だな」と、力なく首を振った。

「そうか」と浅野は低く呟いた。

「だとすると、正面突破、するしかないか」

「地下は？」と喉元まで出かかったが、晃は声にしなかった。

真樹区の地下に二百年前のレリア・ウィルス感染者の遺体が封じられているのは、小学

生でも周知の事実だ。センタービルは、真樹区の中央である、地下道が通っていたとして

も、封鎖されている可能性が高い。

「正面突破なんざ、全く無謀だ」麻生は、鼻を鳴らした。

「せめて、裏口からの侵入だな。それでも、こっちは相当無理をしなけりゃならんが」

「そうね。でも、私たちも手を打っていないわけではないわ」

麻生の説明に納得する浅野の言葉を押し被せて、女の声が肯定する。鉄扉の方向からい

きなり聞こえた声に、晃たちは驚いて振り向いた。

「木村さん！」「由貴！」

同時に叫んだ晃と麻生に、木村女史は薄く笑って応えた。

「やはり、ここに来ていたのね。ファイヤー・ウインドに連絡を入れたけど、来ていない

と言われたから、もしかやと思っ

て、近付いて来た木村女史の、大図書館の銀鼠色の制服の右袖が、大きく破れて血が滲んで

いるのに、晃は気が付いた。

「木村さん、その傷は……？」

驚いて尋ねた晃に、木村女史は「ああ、これ」と、顔色も変えずに軽く右腕を上げた。

「名誉の負傷、といったところね。公安の下っ端連中を相手に格闘

したので、ちょっと。

大した傷ではないわ」

「相変わらず剛胆だな。重い鉄扉を音もなく開ける技といい、やはり、元公安特殊警邏隊隊長だ」

無い片腕を擦るように右袖に触りながら、麻生が僅かに口角を引き上げる。

公安、と聞いて、晃はぎよっとする。

晃の様子には気付かなかつたらしい木村女史は、隻腕の仲間に応え、艶やかな笑みを見せる。

「では、あなたが《奇跡の羽根》のサブリーダーの？」

不意に、それまで黙って周囲の話聞いていた浅野の母が口を開いた。

「はい。木村由貴と申します。浅野副局長の奥様には、お初にお目にかかります」

木村女史は美貌を引き締めて背筋を伸ばすと、いかにも元保安官らしく浅野の母に敬礼をした。

「お立場上、我々の組織にご助力を頂くことは、ご自身が多大な危険を伴われるにも関わらず、浅野副局長には、大変お気遣い頂いております」

浅野の母は、やや困惑したような笑顔を木村女史に返した。

「……主人は人一倍、正義感の強い人です。補佐官の伊勢さんの調査で、センターがレリ

アディーウィルス感染患者の生存者を不正に捕縛していると分かり、義憤を感じて動き出

しました。一度こうと決めたら、私たちが何を言っても聞かない人です。ですから、私も

子供たちも、主人に万が一の事態が起きた時の覚悟は、できており

ます」

静かに、しかし、はつきりとした声で語った浅野副局長夫人の姿に心打たれ、晃はぎゅつと両の拳を握った。

覚悟を決めている。愛する夫が、家族が、正しいと思う意志を貫こうとするそのために、兇刃に倒れても嘆きはしないと。

浅野と似た柔和な面差し之母の胸に、こんなにも強い意志があるのに、晃は驚愕と同時に、深い感銘を覚える。

「恐れ入ります」 厳粛な面持ちで、木村女史は浅野の母に再度敬礼した。

「中枢部が《奇跡の羽根》の活動に気付いた以上、もはや逃げ隠れはできません。私たちも、死を覚悟して戦います」

黙って頷いた麻生の態度に、晃は、木村女史と麻生の覚悟も思い知った。

センターと戦うために。いや、理不尽で横暴なセンターという巨悪を生み出してしまった、この世界と戦うために。

自分たちの存在を、人としての権利を、世界に認めさせるために。妹の遺体を切り刻んだ連中を、殴り倒してやりたい。そんな自分勝手な理由で憤慨し、

かといって実際に戦う腹も決まらず、八木や麻生にただ突っ掛かっていただけの自分が、晃は今更ながら恥ずかしくなる。

晃の心境を読み取ったかのように、麻生が言った。

「俺たちは、誰も世界を変えてやるうなどとか、悪を倒して名を揚げようなんて考えては

いない。ただ、守りたいだけだ。自分の存在意義ってやつを」

感情を押し殺した低い麻生の声音に「そうね」と静かに同意し、木村女史が晃を見る。

「私たちの戦いに大層な名分なんてない。皆、晃くんと同じよ。麻生さんの言った通り、身近な人の、仲間の、人としての命を守りたいだけ。動機に大小なんてないわ」

薄茶色のスクリーン・グラス越しのアーモンド型の美麗な目が、

微かに頬笑む。が、数

秒も経たぬ間に木村女史は、はっと目を見開いた。

「八木さんからの通信です。……ファイヤー・ウインドに、旧イーデルランド大使館に同

行していた仲間から連絡があり、浅野副局長は無事に脱出なさいました。それと、奥様方

をお迎えするエアカーが、こちらへ向かっているそうです」

「ああ。じゃあ、僕らも例の場所へ移動ですね」

ほっと安堵の笑顔で確認した浅野に対して、木村女史は「はい」と、真顔のまま大きく

頷いた。

「なら、一刻も早く上へ出たほうがいいですね」

「八木さんからの連絡では、エアカーが公安局を出たのは十分前と

いうことですので、そ

ろそろ到着するかと……」

「それ、どうということだよ？」
木村女史が元公安の一員だったのは、先の話でわかった。しかし、

現役の公安局の人間

が、どうして浅野たちを迎えに来るのか。
晃の脳裏に、ちかちかと危険を知らせるシグナルが点灯し始める。
「なんで、公安が迎えに来るんだ？」

真樹区南外縁で生きて来た一年は、晃に『他人はまず疑え』とい

う教訓を叩き込んだ。
優しいな顔をして近付いて来る人間ほど、手酷く裏切る。

病身の父と看病で過労気味の母を抱え、慣れない場所で苦勞して

いた晃たち兄弟は、た

った数カ月で、幾度も親切の皮を被った野獣けだものに騙された。僅かな蓄

えも剥ぎ

取られ、一時期は父親の治療代どころか、食費にも事欠いた。

真樹区外縁という場所が、ことさら悪辣な人種を抱えているところだからかもしれない。だが、追われる晃たち一家を見て見ぬ振りをした中奥区の人々も、本質は外縁の人間とさほど変わらない。

人間は所詮、自分さえよければ、他人の不幸など何とも思わない、冷酷な生き物なのだ。

自分や家族を守るのは、自分自身でしかない。

詰め寄る晃を、木村女史は冷静な眼差しで見返す。

「私たちの仲間には、公安局内の人間も多くいるの。晃くんには、きちんと話していきな

ったわね。……とりあえず、移動しながら話しましょう」

浅野の母と兄弟を促し、木村女史は地上へと続く階段を上り始めた。

「ちょっと待ってっ！」

疑う一方で、晃は、先刻ちらつと木村女史と麻生が見せた決意を、信じたいと思っっている。『死を賭してセンターと戦う』と語った木村女史の言葉を、真のものと思いたい。

木村女史を呼び止める晃の腕を、後ろからきた麻生がぐいつ、と引っ張った。

「つべこべ言っている暇はない。急いで動かなければ、本当に敵側のセンターの奴らがくる。さっさと歩け」

「何だよ、どういう意味だ……っ」

皆まで言わずに、麻生は晃を引き摺って階段を上り始める。桁外れの膂力を有する麻生の隻腕は、晃が止めると喚き、暴れても、掴んだ襟を離さない。

十段ほどの階段を、地上への出口手前の踊り場まで上る。先にかがった浅野の母が開けた鉄格子の扉を潜ったと同時に、麻生は晃をコンクリートの床へ放り出した。

「いつてえ！」

転がされて、左上腕をしたたか打った晃は、痛みに顔を顰めながら麻生を睨み上げる。

座り込んだ晃の前に立った麻生は、鬼神の如き様相で晃を見下ろした。

「由貴たち保安官が使用する体内送受信機は、公安局情報課のコンピュータを経由して通信する。発信者には、それぞれ数字、アルファベット混じりで、ハイフォンを真ん中に入

れた八桁の番号が振り当てられている。退職者は、基本は送受信機を取り除き、番号を抹

消するが、希望した者にはそのまま残す。その代わり、送受信機を残した者は待機保安官

としての職務を要求される。待機保安官は、緊急手配者の特定や捜査に協力する義務を負う」

「待機保安官は、現職と違い、常に行動を公安のコンピュータで追跡されることはないんだ。

ただ、着発信を行うと、時刻と地点は記録される」

麻生の話を補足した浅野が、困ったような、済まなさそうな表情で晃の腕をそつと掴む。

浅野も、麻生や木村女史の事情を知っていたのだ。晃は少々の気恥ずかしさを覚えながら

ら、引き上げる浅野の腕に従い、立ち上がった。

「じゃあ、さっきの店長との連絡で……」

晃は左上腕を押さえながら、木村女史を見た。木村女史は薄く笑んで頷く。

「私と八木さんが連絡を取り合った地点は、公安に特定されたわ。もつとも、地下道の存

在は、保安官には知らされていない。多分センターの人間も、知らないでしょう。けれど、

公安のコンピュータでの場所の特定は厳密だから、地点に到着した保安官が地下道の存在

に気づき、出入り口を見つける危険がある。それで、一刻も早く動く必要があったの」

知らなかったとはいえ、自分が勘ぐり、ごねたために、危うく皆を危険に晒すところだ

ったのだ。晃は、内心で焦った。

「発信地点から即座に離れば、確かに追跡して来る保安官からは逃げられます。……で

も、公安から迎えが来るのだったら、乗っている現役保安官の体内送受信機で場所を特定されちゃいますよね？」

浅野が、緊迫した高い声の調子で、尋ねる。木村女史は柔らかい声で返した。

「現役の間は、私たちを捜索するという名目でエアカーを出していません。こちらに到着

しましたら、運転は私が代わります」

「しかし、それだと、あなたと交代した現職の保安官は、俺たちを逃したとセンターに疑われませんか？」

晃は顔を上げ、まだ不安な表情を戻さない浅野を見た。木村女史は、見詰める浅野の脇

を、落ち着いた足取りで通り抜け、地上への階段の縁にブーツの爪先を寄せた。

「先程も申し上げたように、私たちの仲間は、公安の内勤保安官にもいます。迎えに来た

仲間たちへ疑惑が向かないように、内勤の仲間が工作してくれませう」

「内勤の人たちまで……。そこまで組織が広がっていたんですね」
浅野は「分かりました」と、ようやく笑顔を見せた。

「さあ、そろそろ迎えの車が到着している頃です。上へ出ましよう」
昇り始めた木村女史に続き、晃たちも階段を上がった。

階段の幅は一メートルほど。十二段あり、上がり切ったところは、階段の幅と同じくら

いの奥行きは踊り場だった。踊り場のコンクリート壁の左側に、一見したところ一般的な

集合住宅の玄関扉の寸法、高さ二百センチ、幅九十センチとほぼ同じであろう鉄扉が、

取り付けられていた。

小さな裸のハロゲンライトに照らされた、地下道のものと同じく錆び止めの赤いペンキ

を塗られた鉄扉の内鍵を、木村女史が回し、扉を引き開ける。

前を歩いていた浅野が入口を一步入ったところで止まった。晃は麻生の脇から、頭だけ

扉の内側に入れ、内部を見た。扉の内側は、奥行きが八十センチくらい、幅が二メートル
くらいの、細長い部屋になっていた。

部屋には明かりが全くなかった。階段の踊り場のハロゲンライトの僅かな明かりが、入

口付近をぼんやりと照らしている。

明かりの輪から足早に抜け出し、細長い部屋を左へと移動した木

村女史は、突き当たり

の壁へと寄った。壁には、床面から約一メートルの高さに、直径十センチほどの丸い光が点っている。なにかのスイッチか、あるいは操作板の位置提示用のライトなのか。

考えながら晃が見詰めていると、木村女史は、淡く点る青い光の上に、包むように手を

乗せた。途端、二メートルの正面壁の下側に長方形の穴が現れた。

『シャトー・オブ・ウインド』の地下への入口と同じような間口の出入り口だった。

木村女史は壁の向こうを窺うと、一步そつと下がり、浅野の母に先を譲る。浅野の母と

弟妹、木村女史が順次、出入り口の向こう側へと消えていく。

晃は浅野に続き、出入り口を潜る。

出た先は、いろいろな生活用品が雑多に置かれた、物置きのような場所だった。

見たところ、晃がいる位置から正面の壁までが、約五メートル。

横幅は一・八メートル。

二十センチ角の、色の違うウッドパネルが交互に敷き詰められた床面は、少々埃が積もつ

ているものの、以前コリンが匿われていた部屋のもの、ほぼ同じである。

物置きのような部屋が浅野の家の離れであることに気が付いた晃は、驚いて浅野を見た。

「ここ……!」

「うん。コリンを静養させてた離れだよ。この部屋は、祖父が生きてた頃からずっと物置きとして使ってたんだ。……地下道への入口をカムフラージュするためにね」

浅野は、おどけてウィンクをした。

「これだけ品物がごちゃごちゃあると、侵入者が追って来ても、障害物だらけで、なかなか追いついて来られないだろう？」

「確かにそうだな……」晃は、LEDシーリングライトの下に置かれた、いかにも年代もののカート付きの肘掛け椅子や、壊れて動かなくなった旧型のモーター式セルフワゴン、自動掃除機などをしげしげと眺める。逃げる際に、これらの品物を使って通路を塞げば、敵は退けるのになりに手間取るだろう。

「このガラクタは、曾祖父と祖父が長年ずーっと使用していたものが大半なんだ。でも、

祖父と父がわざわざ外縁辺りで買って来た二束三文の品もあるんだ」

感心しているような、面白がっているような顔で、「よくこれだけ集めたよな」と、浅

野は肩を竦めてみせた。

晃は少しだけ苦笑し、真顔に戻した。

「でも、よく保安官から逃げおおせたな」

「保安官たちは呼び鈴を押す前から、全員が荷電粒子銃を構えていた。最初から俺たち家

族を捕えるつもりだったんだ。玄関のモニターで確かめた俺は、母と妹を先にこの部屋へ

行かせてから、応対に出た。案の定、保安官たちは俺と弟を捕まえようと、ドアを開けた

途端に飛び込んで来た。けど、こっちも身構えてたから、全速力で廊下を走って、この部

屋へ逃げ込んだんだ。相手は日頃から厳しい訓練を積んでる保安官だし。本当に、どうし

て捕まらなかつたのか、不思議なくらいだよ。ともかく息切らしてここへ逃げ込んで、急

いでドアを閉めたんだ」

「で、ドアを開けたら、このごちゃついた骨董とガラクタの山に邪魔されて、保安官は追

って来られなかつたってわけか」

晃は感心しつつ、改めて左側の壁の先の扉から、地下道への隠し出入り口の前まで、人

一人がやっ通れる通路を作っている品々を見回した。

「それが、違うんだ」一旦言葉を切ると、浅野はにんまり口の端を釣り上げた。

「ラッキーなことに、俺がこの部屋の扉の内鍵を掛けたと同時くらいに、どうやら公安本

部から引き上げ命令が出たらしいんだ。ドア越しに、保安官の一人が大声で『本部隊から

連絡が入った、一時撤収だ！』って怒鳴ったのが聞こえたのさ」

「撤収命令を叫んだのは、間違いなく、こっちの味方の保安官だ」

麻生が「何を今さら」という顔で、浅野を見た。

「同じく味方で内勤の保安官が、副局長のご家族の捕縛命令が出たのを受けて、うまく仲

間の保安官を小隊に組み入れたんだろう。その保安官が、君たち兄弟の捕縛を防いだ」

「ああ、そっか……。よく考えれば、そうですね」

浅野は、頭を掻きながら照れ笑いをする。

「俺たちみたいな素人が、日頃から訓練をしている保安官に捕まらないわけがない。きつ

と味方の保安官が、他の連中が追い付かないように工作してくれたんですね」

廊下側の扉から、先に部屋を出た木村女史が、ひょいと顔を出した。

「早く！ もう、迎えのエアカーが、門の前に来ています」

浅野と晃、麻生は、急いでガラクタの通路を抜けた。

外は、いつの間にか、夜の色に染まっていた。

微かな錆の臭いの混じる春の夜風が、木々の枝を軽く揺する。かさかさという枝々の擦

れ合う音以外、高級住宅街に聞こえる音はない。

迎えの公安のエアカーは、無気味なほど静まり返った家々の並ぶ路上で、動力を切って

浅野邸の門前に待機していた。

エアカーには、既に浅野の母と弟妹が乗り込んでいた。車の横には、木村女史と、戦闘

用の上下濃灰色の防弾ウェアにフルフェイス・ヘルメットを被った保安官が二人、立っている。

木村女史や麻生の仲間だと聞かされていても、晃は保安官の制服に、一瞬ぎくり、と緊張した。

「急いで下さい！ そろそろ、センターが私たちの工作に気付いて、公安の小隊を引き返させる頃です！」

木村女史は浅野を促すと、自分は運転席へと向かう。浅野はエアカーの傍までくると、不意に足を止め、晃を振り返った。

「日野は、何がなんでも、コリンを取り返すよな？」

酷く真摯な表情を、門柱の照明と、路肩に定間隔で設置された低い街路灯の明かりが、青白く照らしている。

晃は、自分の心の裡を見通そうとするかのように、じっと見詰めてくる浅野の瞳を、腹

を据えて、きつ、と見返した。

「ああ。絶対、コリンを取り返してくる」

僅かに口角を上げて、浅野が頷く。直後、唐突に木村女史を振り返った。

「俺も、コリン救出に同行します」

晃は驚いて、浅野の肩を掴んだ。

「おい！ なにバカなことやってんだ！ 敵陣に乗り込むんだぞ！ 無事で済むわけねえ

の、分かってんだろうが！」

「そんなの、百も承知」浅野は笑って、肩に乗った晃の手をゆつくりと外した。

「危ないのは、日野だっておんなじじゃないか。俺もコリンとは、最初っから関わってる

んだし」

「……あつちには、尋香がいる」

晃は、襲撃に遭った時の痛みを思い出し、苦い気持ちを抑えて言った。

「ただの女たちじゃないってことは、浅野だって十分に知ってるだろうが。あいつらを相

手に戦わなくつちやなんないんだ。下手したら、殺されるかも知れないんだぞ」

浅野が死ぬようなことがあれば、立場を顧みず麻生や木村女史に協力し、コリンを匿っ

てくれた浅野の父に申し訳がない。

もちろん、晃の心の中では、まだ公安を許してはいない。だが、悪しき中に身を置きな

がら、悪に染まらず不正を糺そうとしている浅野副局長という人物には、敬意を抱いた。

その人の家族を巻き添えにして死なすことは、晃の義心が許さない。

「浅野は来るな。いいから、来るな。コリンの救出は、俺のわがままだ。麻生さんや八木さんが付き合ってくれるのは、他に目的があるからだ。でも、浅野には……」

「日野はコリンを、死んだ妹さんのように思ってるんだろ？」

浅野は笑んだまま、心情を吐露した。

「俺も、おんなじなんだ。十二年前、レリア・ディーウィルスに感染して、僅か三歳で死

んだ妹を、俺はコリンに重ねて見てた。俺にとっても、コリンは妹みたいなものなんだ」

レリア・D・iウイルス感染の特徴である『羽化』の犠牲者は、主に十代の少年少女だった。が、他の年齢層も相当な人数が亡くなっており、特に体力のない小児と高齢者は細胞変化の初期段階、つまり『羽化』に至る前の高熱によって、多くが命を落とした。

人口の少ない塔経市では、三人以上の子供を持つことを奨励している。中奥区の住人は経済力もあるため、子供の数が多い。晃も亡くなった長兄と妹の美鈴を含め、五人兄弟である。

いくら兄弟が多くても、周期的に襲ってくるレリア・ウイルスによつて、幾人かは確率的に、必ず殺される。十二年前の大流行の時、欠けたのが長兄だけだったというのは、晃の兄弟は幸運だったと言つていい。

長兄の壮絶な死を見ている晃には、浅野が幼い妹の死に直面し、心にどんな傷を抱いているのか、よく理解できた。

だが、晃は、もう二度と親しい人が傷付いたり死んだりする姿を見たくなかった。

「駄目だ。浅野は、ご家族と一緒に、塔経市を離れる」

八木や麻生が傷付くのも、本音としては辛い。しかし、八木たちは戦闘に慣れている。

彼らの協力がなければ、戦い方など何一つ知らない晃一人では、とつていセンターには立ち向かえない。

晃は意志を込めた、強い眼差しで浅野を見詰める。

「浅野は、公安副局長の息子だろ。普通の大学生だし。そんな人間が、わざわざ危険に首を突っ込むな」

途端、浅野は苦笑した。

「日野だって、ついこの間まで、ただの大学生だったじゃないか。それに、俺は父を尊敬はしているけれど、父の職務のせいで特別視されるのは、特に、日野にそう思われてるのは、嫌だ」

友達だろ？ と念を押され、晃は、少なからず浅野に対して、己が転落者であるという劣等感を持っていた事実に気付く。

恥じて黙った晃に、浅野は静かな声で言葉を続けた。

「俺も、十二年前、レリア・D・iウイルスに感染した。でも、俺は『羽化』しなかったし、あまり熱も出なかった。どうして軽く済んだのか、医者も首を傾げたくらいだ。でも、俺が軽症だった代わりに、妹が、死んだ。……俺は、コリンを助けることで、妹に償いたいんだ」

それに、と、浅野は晃の肩に手を置いた。

「俺は、日野も助きたい。なんでかな……、日野の歌を聴いた時から、無性に、日野の『声』をずっと聴いていたくなった。無くしたくないんだ」

晃は目を見開いた。真樹区の浮浪者の老人たちも、同じような言葉で晃の歌を褒めた。

『晃の声は、わたしらを空へ連れてってくれる』

麻生が着ている外套に似た上着を羽織った浮浪者たちが、皆、晃

の『声』に惹き付けら

れて、崩れた野外ステージに集まって来た。

まるで、灯火に魅せられた虫たちのように。

麻生もそうだ。晃の『声』には、不思議な説得力があると、言っていた。

どうして皆、晃の『声』にこだわるのか？

戸惑い、晃は視線を、浅野から薄闇の中に沈む家並みへと泳がせた。

「俺には……、誰かに惜しまれる資格なんて、ない」

「日野本体にはなくても、日野の『声』には、あるのかもな？」

思わぬ返答に目を戻すと、浅野はおどけた表情で晃の目を覗き込んできた。

「日野が何度しつこく駄目って言ったって、俺は一緒に行くよ」

笑顔とは逆に、瞳には必死の色を浮かべている浅野の様子を見て、晃は否定の言葉を飲み込んだ。

浅野もまた、麻生や八木とは別な理由で、戦いに臨もうとしているのだ。友の確固たる決意を晃に否定する権利など、一切ない。

「では、由和さんは、残られるんですね？」

晃と浅野の話が決まったと見た木村女史が、確認してきた。

浅野は表情を引き締めて、頷いた。

「はい。俺は残ります」

後部座席に乗っていた浅野の母が、車の窓を開けた。晃は、淡い街路灯の光に浮かぶ、

心持ち悲しげな母親の表情に、胸が痛んだ。

「おまえが戦うと決めたのなら、仕方ないわね。お父さんには、私から言っておきます」

「うん。……ごめん、母さん」

浅野は、窓から中へ手を入れ、母の手をしっかりと掴んだ。浅野の母がその後なにかを息子に告げたが、晃には聞き取れなかった。

浅野は母の手を放す。するすると車窓が閉じられた。

「では、これから副局長のご家族をG-1ポイントへお連れします。

……水原二等官」

木村女史は、エアカーの傍らに並んでいる二人の保安官の、右側の一人を呼んだ。

水原二等官が踵を合わせ、元気よく「はっ！」と応える。

晃は、きりりと敬礼をする若い保安官へ、目を向けた。

「お二人を援護して下さい。くれぐれも怪我など負わせないように」
木村女史が発した命令は、浅野の母や兄弟への心遣いだろうと、
晃は思った。晃と浅野
を庇いながらの戦闘では、尋香を倒すのは不可能だ。

十分に分かっていながら、水原二等保安官は「はい！」と、勢いよく応じた。

元部下の様子に微笑んで頷き、木村女史はエアカーの運転席のドアを開ける。

「では。ご一家をお送りしたら、私も急ぎ合流します。……晃くん」

晃は、スクリーン・グラスを外し、じっと見詰めてくる木村女史の、薄闇でもはつきり

判る赤茶の強い瞳を、怯まず見返した。

「誰でも、命は一つしかない。その一つは、他に替えることができないものです。だから

こそ、君も絶対に自分の命を、守って下さい」

妹の美鈴の事故の全容と、遺体の内臓消失の謎は、自分が体を張っても解明しなければ

ならない。が、晃自身が死んでしまつては、美鈴の無念も晴らせない。

今更だが重要な言葉を、元公安特殊警邏隊隊長であり、センターの私兵、尋香と、ずっと

と戦ってきた人から言われ、晃は改めて肝に刻む。

木村女史が運転席に乗り込む。車は動力を入れられ、ゆっくりと浮上する。

両翼が三角形に張り出した公安専用の九人乗りの銀色のエアカーは、まるで大海をゆっ

たりと泳ぎ渡るエイのようだ。仄かな光に揺らぐ夜に沈む住宅街の路を、緩やかな坂に沿

って人工のエイが上っていく。

低い街路灯に照らされながら、次第に小さくなる車体を見送り、

晃は、ぎゅっ、と拳を握った。

これから先どんな凄絶な戦いになるのか、分からない。たとえ傷付いても、自分は全てを知るまで、前に進む。

自分を守る。絶対に死なない。

木村女史の言葉を、今一度じっくり胸中で繰り返す晃の背中を、麻生の大きな手がぼんと叩いた。

「大丈夫だ。戦う目的をしっかりと持っている人間は、簡単に死んだりはない」

振り返った晃に対し、麻生は僅かに片頬を上げ、力強く頷いてみせた。

車影が坂の頂上の闇に消えるのを見送ると、水原二等官がおもむろに提案した。

「さて、我々も移動しましょう。隊長も言っていましたように、そろそろ我々の工作に、センター側が気が付く頃です」

浅野と麻生は、動き出した水原二等官に従って家の中へと戻る。

屋内を足早に通り返し、地下駐車場への踊り場まで来た時、先を歩いていた水原二等官が不意に振り返った。

「腹、減ってませんか？」

晃と麻生、浅野は、階段の途中で足を止める。

「今、十九時三十分です」

フルフェイス・ヘルメットの風防の内側にあるスクリーンに表示された時間を読み上げ、

水原二等官は風防を上げる。

はきはきとした声に似合った、目元の涼しい若者の顔が、ヘルメットの中で笑った。

「皆さん、午後は何も食べてらっしゃらないのですよ？ 非常食を携帯してきました。あ

んまり旨くはないですが、よろしかったら、召し上がって下さい」

水原二等官は、背負っていた難燃素材のインターナル・フレーム・バックを地下駐車場の

コンクリート床の上に手早く下ろした。サイド・ポケットから小さな紙箱を二つ、取り出す。

浅野と麻生は階段を下りると、水原二等官の差し出した箱を、それぞれ受け取った。

「塔経市が常備している、災害時用の固形食料だな」

麻生は、箱のパッケージをハロゲンライトのぼんやりとした光に当て、確かめる。

「どうやって持ち出したんだ？ まさか保安官は、警邏の際に必ず非常食を配給されてい
るわけじゃないだろう？」

「情報部の仲間が、残量数を調整してくれました」

水原二等官が、にやりと笑った。

最後の段を降りた晃は、突然、ぬっ、と後ろから差し出された非常食の箱に、驚いて思

わず「うわっ」と仰け反る。振り返ると、もう一人の保安官が、階段の中程に腰掛けて腕を伸ばしていた。

水原二等官と同じく、ヘルメットの風防を上げた保安官は、武官とは思えない色白の、

面長の無表情な顔で晃をじっと見据えて「どうぞ」と、低く勧める。

「あ……、えーと、ありがとう、っす」

相手の、あまりにも表情のない顔に、晃は戸惑う。正面のコンクリ床に腰を下ろした水

原二等官が、軽く声を上げて笑った。

「笠井、背後から無言で突き出したら駄目だって。ちゃんと声を掛けるって言ってるだろ
？」

「……申し訳ありません」

「すみません。笠井三等官は、事情があって、ちょっと言葉足らずのところがあります。

でも、わざとではないので」

晃は、差し出された携帯食料の箱を受け取って、「はあ」と頷いた。

晃が腰を下ろし、箱を開ける間も、笠井三等官は、じつと晃の顔を見ている。まるで見張られているようで、どうにも居心地が悪い。

「あの、あんまり俺の顔、見ないでもらえますか？」少々むっとして、晃は笠井三等官を睨んだ。

やはり無表情のまま、笠井三等官は「すみません」と頭を下げて、横を向いた。

「ああそうだ」と、水原二等官が膝を片手でぽん、と叩いた。

「木村隊長から、お二人に我々の組織と、この後の作戦について話しておくと、言われてました」

「センタービルに、強行突破する以外の方法があるっていう……？」

浅野が、食事の手を止め水原二等官を見た。

「ええ。潜入作戦がぎりぎりですぐ上手くいったと、つい先程連絡が入りました。実は、現在

この場所に留まって頂いているのも、潜入作戦の次の段階の手筈待ちなんです」

「一体、何が始まるんですか？」浅野が、遠足に出かける前日の子供のような、弾んだ表情で尋ねた。

麻生の渋い声が、浅野の期待を裏切るように響く。

「言っておくが、かなり難しい作戦だ。浮ついていると、本当に死ぬぞ。??作戦の説明

前に、まず《奇跡の羽根》の組織の全体を、話しておく必要があるか」

「そうですね。では」と、水原二等官が話し始めようとした時。

黙々と非常食を口に運んでいた笠井三等官が、不意に「水原さん、合図が来ました」と声を上げた。

「シャツト・ダウン、成功か？」

水原二等官は目を見開き、腰を浮かす。笠井三等官は、無表情のまま頷いた。

「予定通り、サブ・コンピュータ全て、使用不能です」

水原二等官は「よし！」と、勢いよく立ち上がった。

勝ち誇った笑みを浮かべた保安官に、晃は「なにが、起こったんですか？」と、尋ねた。

「サブ・コンピュータのシャツト・ダウンって？」

「ああ、申し訳ありません」水原二等官は、照れた表情で、自分のヘルメットの後ろ頭を

ぼん、と軽く叩いた。

「ご存じの通り、我々保安官には、認識票を兼ねた体内送受信機が埋め込まれています。

送受信機は公安本部情報課のメイン・コンピュータに、常に我々の位置情報を送っています

す。メイン・コンピュータはダイレクトにネットに繋がっているのではなく、五十台のサ

ブ・コンピュータを経由して、ネットの情報を収集、解析しています」

「なるほど、そうか。水原さんたち反センター派の保安官が事を起こすためには、公安本

部に行動情報を知られては拙い。だから、サブ・コンピュータをシャツト・ダウンしたん

ですね」

浅野が片膝を立て、身を乗り出す。真顔で「ええ」と、水原二等官は返す。

「サブ・コンピュータは五十台全てが連動していて、一台だけをシ

シャット・ダウンすると、他のコンピュータがバックアップ態勢に入り、ダウンしたコンピュータを自動的に修復してしまいます。なので、五十台を一斉にシャット・ダウンするウイルス・プログラムを感染させたソフトを、サブ・コンピュータをクラックしてインストールしました」

大学で高次ナノ・テクノロジー科を専攻していた晃は、公安内部の反センター組織の力量に感心した。

五十台のサブ・コンピュータを一遍にシャット・ダウンするより、メイン・コンピュータ一台をシャット・ダウンしたほうが、簡単に思える。

だが、大企業や大学、公共機関のメイン・コンピュータは、ナノCPUを搭載した計算機型コンピュータではなく、自動学習型のメガ・バイオ・コンピュータである。自己修復機能を備え、自らの動力さえ制御し、半永久的に稼働するのだ。

そんなメガ・バイオ・コンピュータをシャット・ダウンするには、かなり高度なバスの書き換えの技術が必要とされる。

時間も技術も掛かる、メガ・バイオ・コンピュータのシャット・ダウンより、計算機型のサブ・コンピュータにウイルスを侵入させて停止させたほうが、はるかに効率がよい。

それでも、公安内部のコンピュータをシャット・ダウンするには、よほど綿密な計画を立てなければ無理である。

「サブ・コンピュータは、我々保安官の行動だけでなく、公安のエアカーも常時追跡して

います。が、シャツト・ダウンで浅野副局長とご家族を乗せたエアカーの行く先も、追跡できなくなっただけです」

力強く言い放った水原二等官を、麻生は横目で見遣った。

「で、結局、サブ・コンピュータの復旧には、どれくらいの時間が掛かる目算になった？」

「丸一日です」笠井三等官の、無機質な声が答えた。

麻生は、とうてい片腕とは思えぬ身軽さで、ひょい、と立ち上がった。

「なら、早いところ行動しないと。敵が混乱しているうちに、陣地を制圧しないと」

晃と浅野には十分な説明がないまま、麻生に同意した二人の保安官は、さつさと荷物を担ぎ直した。

時間との競争なら、致し方ない。とにかく《奇跡の羽根》の作戦に乗るしかないと腹を括って、晃も立ち上がった。

水原二等官が先に立ち、地下駐車場の扉を潜る。晃は先刻、麻生と歩いてきた地下通路を、逆に真樹区の方向へと辿ることになった。

《奇跡の羽根》側の保安官にサブ・コンピュータをシャット・ダウンされたため、センタ

ー側の公安保安官は中奥区内の警戒を強めているはずだ。真樹区付近ぎりぎりまで地下道を利用するのは、妥当な手段である。

「どれくらいで、真樹区の外縁に着きますか？」
ハロゲンライトの頼りない明かりの中、打ちっ放しのコンクリ道を下りながら、浅野は

すぐ前を歩く水原二等官に訊いた。

水原二等官は、重い荷を背負っているとは思えない、さすがに鍛えられた保安官の軽快な歩調を乱さずに、明るい声で答えた。

「大よそ二時間という見当ですね。この地下道は、麻生さんはご存じだと思いますが、地上の幹線道路の真下を、一定距離は平行しています。ですので、真樹区に近づくまでは、大きな通路は、ほぼ直線です」

晃は、歩き出した時から自分の背後から聞こえる、ぎし、ぎし、

という、金属が擦れ合うのに似た、微かな鈍い音が、どうにも気になっていた。

晃の後ろの最後尾は、防護服と同色の、濃灰色のインターナル・フレーム・パックを背

負った笠井三等官が黙々と歩いている。インターナル・フレーム・パックに金具部分があ

り、それが擦れる音なのかと考える。だが、駐車場のコンクリ床の上に置かれた二人の保

安官のインターナル・フレーム・パックは、確か、サイド・ポケットのファスナーも、難

燃性の高い、植物性柔軟プラスチックだった。

またシヨルダー・ベルトの調節部分、ウエスト・ベルト部分ともに、本体と同じ素材で、

金具の類いは使用されていなかった、と、晃は記憶している。

インターナル・フレーム・パックに金具がないのなら、では、晃に聞こえている金属の

摩擦らしき音は、どこから出ているものなのか？

まさか、自分たちの跡を、何者かが尾けてきているのではないのか？

俄に、晃の背筋に、ぞわぞわっと戦慄が走る。もしも追跡者が尋香なら、晃たちの動き

がすでにセンター側に知られていることを意味する。

晃は歩を緩めて、笠井三等官の隣に並んだ。

「笠井さん、その……、さっきから、妙な金属音がしてるんだけど。誰か尾けてきている

様子は……？」

尋ねながら、晃はそっと、背後を振り向く。

笠井三等官は、さして慌てた風もなく、無表情に「ああ、はい」と、晃を見た。

「追跡者の気配は、ありません。もしいれば、自分と水原二等官の

ヘルメットの内蔵ディスプレイに、赤外線サーモグラフィ画像が映し出されます。ですが、現在は時刻以外の情報は映されていません。あなたに聞こえている金属音は、自分の体から出ているものと思われず。自分は、体の八十パーセントの骨を、強化ナノ・セラミックにしています。関節部分にはチタン合金が使用されています。……これです」

笠井三等官は、右手を晃の耳元へと近付けた。曲げられた防護用手袋の中の指の関節が、ぎりっ、と鈍い金属音を響かせる。

「……あ、この音だ」

音源が判明して、ほっとしたと同時に、別の疑問が晃の脳裏に湧いてくる。

「でも、八十パーセントの骨が強化ナノ・セラミックと金属って…。それは、もしかして、怪我で？」

保安官なら、任務上、刑事犯の追跡、逮捕などで大怪我という状況もあり得る。あるいは任務以外の時間での怪我かもしれないが。

笠井三等官は、相変わらずの無表情のまま、「いえ」と短く否定した。

「え？ 怪我でないなら、どうして？」

晃の疑問を汲み取ったかのように、脇から浅野が笠井三等官に尋ねた。と、本人ではなく、前方の水原二等官から返事が来た。

「笠井は自ら望んで、サイボーグ化したんです。笠井だけではありません。公安では、内勤である一課以外の保安官で、自ら希望してサイボーグ化している者が、数多くおります。」

我々の所属している特殊警邏隊の隊員は、ほぼ百パーセント、体のどこかをサイボーグ化しています。自分も、両手足の骨は全て、強化ナノ・セラミックです。もっとも、笠井のように、全身の骨の八十パーセントと、脳機能の一部を人造物にしている者は、特殊警邏隊でもごく僅かですが」

中奥区に置かれた、塔経市中央官庁を頂点とした市の統制システムは、公安という圧倒的な力によって、市の隅々まで行き渡っている。

死都真樹区の、治安が最悪な南外縁の住人ですら、特権をほしい

ままにする官僚への不

満や怨嗟はあつても、保安官の存在に怯え、直接に憤懣をぶつけたりはしない。なのに。

「どうして、そこまで？」

懐疑に眉を顰め、晃は水原二等官の、大きなインターナル・フレーム・パツクを背負つ

た、保安官にしてはやや細いと思われる背を見詰めた。

「レリア・D・iウイルスが原因ですよ」水原二等官は、淡々とした声で答えた。

「十二年前、大勢のレリア・D・iウイルス感染者が『特異病状』の発現によって、暴徒

化しました。当時の公安は、ほんの一部の者を除いて、保安官のサイボーグ化は許可して

いませんでした。その理由は仰る通りで、塔経市でのテロや、大規模な暴動などあり得な

いと思われていたからです。けれど、現実に暴動は起きた。鎮庄のために出動した保安官

の多数が、死傷しました。事態を重く見た公安本部は、次のレリア・ウイルスの流行に備

え、保安官のサイボーグ化を奨励したんです。結果として、自主的にサイボーグになる保

安官が増えました。??これが、表向きの理由です」

水原二等官の、最後の言葉に驚いて、浅野が聞き返した。

「え？ 表向きには、って……、じゃあ、他に裏の理由があるんですか？」

大きな水溜まりを防護用ブーツで、ばしゃり、と踏んで、水原二等官は足を止めずに振り向いた。

「はい。少なくとも、我々のような特殊警邏隊の隊員には。我々は、暴徒鎮庄のためでは

なく、尋香と戦うために、サイボーグ化しました。この事実は、特殊警邏隊内部の、第一級機密です」

きん??と、バルバットの澄んだ中音の弦が鳴るような水原二等官の声音が、地下道の中に反響する。

声の残響に被せるように、麻生が口を開いた。

「尋香は、全身の骨格を全てチタン特殊合金に換えている。その上、疼痛物質の量を、薬物によって制御しているため、痛みもほとんど感じない。肉体の限界を超えて筋力を使うことができる」

晃は、慄然とした。

骨格も、感覚機能も、全て戦うために改良され、制御された、戦闘集団。

麻生の説明で、なぜ尋香たちが己の命も顧みず、エアカーを体当たりさせるような無謀な行動を取ったのか、ようやく合点が行った。

水原二等官が、想像以上の事実に関を強張らせた晃をちらりと見ると、表情を引き締め、進行方向に向き直った。

「センターは、尋香という兵隊を得て、今や塔経市の中枢機構を完全に掌握しています。まさに、やりたい放題な状態です。が、我々特殊警邏隊が、そもそもセンターに対抗しようとした動機は、センターの暴走を許さない、などという正義感からなどではないんです」

水原二等官は、大きく息を吸い込むと、歩行を続けたまま、天井を見上げる。

「一言で言えば『私怨』です。特殊警邏隊の隊員は、十二年前のレリア・Diiウイルス感染者の暴動の際、家族が保安官として出動し、死傷している者が大半を占めます。亡くなった者の遺体で、遺族に戻された時に身体の欠損のなかった遺体は、一つもありませんでした」

言葉を切ると、水原二等官は、何かを決心したような顔で、笠井三等官を振り返った。

「話しても、いいかな？」

先輩保安官の遠慮がちな問いに対し、笠井三等官は「はい」と、逆に機械的に頷いた。

「……笠井三等官も、遺族の一人です。当時、公安二課に所属していた笠井三等官の姉、笠井由利香二等官の遺体は、頭部がないまま、公安の宿舎へ戻されました。……笠井二等官は、上官である八木讓治公安二課・第二小隊長との結婚を、控えていました」

晃は、更なる驚きに目を見張った。

市立大図書館の地下保管庫で八木が晃に話した、十二年前に亡くなった部下とは、八木の婚約者だったのだ。

晃は、どうして八木が自分を雇い、妹美鈴の死因を調べようとしている自分を手伝ってくれたのか、漸く今にして分かった。八木も、愛する人を失っていたのだ。

八木も麻生も浅野も、更に笠井三等官も、晃が現在関わっている人々はみな、何かしら大事なものを失っていた。それも、レリア・Diiウイルス、いや、センターと、尋香が

らみで。この関わり合いは、果たして偶然なのか。

晃の疑問の答は、すぐに浅野がくれた。

「特殊警邏隊は、父が公安副局長に就任してすぐに編成したんだ。って、以前、父の秘書

官をしていた一番上の兄貴に聞いた。人選も、父が独断で行ったって。??父は承知で、

どころか、わざと警邏隊隊員に、十二年前の暴動の時に出勤して死んだ保安官の遺族を選

んだんだ。遺族に返された遺体のどれもが、どこかしら、センターにもぎ取られていた事実を知っていたから」

「それは、本当なのか？」

浅野の、淡々とした、だが、とても重大な告白に、晃は激しく動揺する。

「ああ。俺も、兄貴から特殊警邏隊の設立を聞かされて、何でそんな部署を作るのかと、

その時は思った。でも、水原さんや笠井さんの話を聞いて、父が何をしたかったのか、や

っと分かったよ。父は多分、日野の妹さんの件も知ってた。だから、コリンを匿うのを買
つて出たんだ」

浅野は、柔和だが厳しさを秘めた笑顔を、晃に向けた。

晃は、自分が一人でここまで来たわけではないことを、初めて痛感した。

内臓を全てを抜き取られていた美鈴の遺体を見て憤り、真実が知りたくて闇雲に進んだ。

最初は何も見えぬ行く手に、やがて、コリンという少女が現れた。

コリンは、晃の真つ暗

だった足下に、妹美鈴に繋がる一筋の光をくれた。

光を辿り前へと進むうちに、浅野が、八木が、麻生が、木村女史が現れ、次々と扉を開いてくれた。

全ては、偶然ではない。真実を知ろうとした行動が、晃を今ここまで導いている。晃の

周囲に、志を同じくする仲間を、呼び寄せている。

「急ぎましょう」と、水原二等官に促され、晃と浅野は再び歩き始める。

地下道の、湿ったコンクリートを踏み締めながら、晃は思った。

仄かな八口ゲンライトの明かりだけが頼りの薄暗い地下道を、晃たちは歩き続けた。先

刻、麻生と降りたばかりの『シャトー・オブ・ウインド』への階段

を通り過ぎる。

二百メートルほど先に、Ｔ字路が現れた。先頭の水原二等官が、Ｔ字路を左に進む。

ほとんど平坦なコンクリート道を黙々と歩き、地上へ通じているらしい階段の前を、いくつも通り過ぎる。

昼から動きつ放しの上に、長時間に亘って硬い路面を歩行した疲労が、晃を徐々に俯させる。尋香に体当たりを喰らい、大破するエアカーから八木と共に転がり出た時に打った箇所が、今頃になって痛み出す。

顔を歪めた晃に、振り返った浅野が「大丈夫かい？」と声を掛けた。

浅野の声を聞いた水原二等官が、後ろを向いた。

「あともう少しで、真樹区南外縁の出口に着きます。頑張って下さい」

防護手袋の、控えめなガッツポーズに、晃はどう返していいのか分からず、中途半端に片手を、胸の辺りまで挙げてみせた。

地下道は、直後に大きく右にカーブした。

百メートルほど右曲線が続き、次に左へ鋭く曲がると、直線に戻った。

「この先が、地上への出口です」

前方を指差した水原二等官の防護服の胸ポケットから、突然、携帯電話の呼び出し音が聞こえた。水原二等官は足を止め、胸ポケットのファスナーを開ける。

風防を上げ、携帯端末に取り付けた、折り畳み式のイヤホンマイクを、ヘルメットの中へ差し込んだ。

「こちら水原。……了解しました」

静かな声で短く応答し、通話を切った水原二等官に、浅野が驚いた顔で尋ねる。

「携帯は、使用可能なんですか？」

晃も、浅野と同じ気持ちで、思わず水原二等官の横顔を見た。

保安官の体内送受信機を、情報課のメイン・コンピュータで管理している公安である。

保安官が使用する他の通信機器も、全て公安情報課が管理しているのではないのか？

とすれば、サブ・コンピュータがシャット・ダウンしている今は、使用不能なのではないのか？

何より、そもそも、このトンネル内で携帯電話が、なぜ使えるのか？

晃たちの疑問を全て理解したらしい水原二等官は、微笑んで、二人を交互に見遣った。

「まず、このトンネル内には、携帯用のマイクロ基地局が、天井付近に等間隔で埋め込まれています。古い型ですが、性能はかなり良好です」

晃と浅野は、同時に天井を見上げた。ハロゲンライトの薄明かりでは、はつきりとはしない。でも、水原二等官の言う通り、指の先程度の小さな白いボタンのようなものが、天井に取り付けられている。

晃たちが目を下へ戻すと、水原二等官がにっこりと笑った。

「それから。確かに、通常は我々保安官が使用する通信機器の全てが、公安情報課のメイン・コンピュータの監視下に置かれます。ですが、現在、我々の携帯の通信経路は、公安のコンピュータではない、《奇跡の羽根》の仲間が運営している、民間の携帯会社のメイ

ン・コンピュータで制御しています」

《奇跡の羽根》という、木村女史や麻生たちが在籍する組織がかなり大規模であるのは、

公安特殊警邏隊を含んでいると聞いた時点で理解した。が、民間の携帯会社まで組織に入

っているとは、晃は思いも寄らなかった。

驚き過ぎて絶句してしまった晃に、麻生が面倒くさそうに言った。

「《奇跡の羽根》の構成員には、中央の官僚もいる。それでなければ、携帯会社を丸ごと

など、押さえられんだろうが」

「なるほど」と感心する浅野の声に、「行きましょう、時間がありません」という、笠井

三等官の冷静な指示が被さった。

水原二等官が、「おう！」という弾んだ応答をし、二本の指を額に当てて前へ振るとい

う、おどけた敬礼をする。

どうにも軽いノリに「この人は、本当に特殊警邏隊に選ばれるほどの優秀な保安官なん

だろうか？」と晃は、ほんの少し不安になる。

等間隔のハロゲンライトを、ちょうど二十個、通り過ぎたところで、ふつつり地下道が

途切れた。

晃たちの眼前に、見上げるほどの高さのコンクリート壁が立ちただかる。壁の前には、

真っ赤な塗装を施された螺旋階段が、天井近くまで伸びていた。

階段の最上段は、コンクリート壁面の上部に取り付けられた、鉄扉へ渡るキャットウォ

ーク風の短い鉄橋の端に繋がっている。

「あの扉の先が、真樹区南外縁の大通りに面したビルの一階です」先ほどのおどけた表情から一変し、真剣な顔で水原二等官が鉄扉

を指差す。

「扉を潜れば、敵地です」

「だからと言って、引き返す気は一切ありません」

同じく真剣な眼差しで返した浅野に、水原二等官は大きく頷いた。

「では、お二人は、これを持って下さい」

インターナル・フレーム・パックを背から下ろすと、水原二等官は中央の留め具を外し、

中から二丁の小型荷電粒子銃を取り出した。

「尋香は、我々特殊警邏隊隊員でも、素手では倒せない相手です。お二人には、なるべく尋香との接触を避けて、センター内に突入していただきます。ですので、この銃は、あくまでも護身用です」

簡単に使用方法を説明すると、水原二等官は浅野と晃に銃を渡した。手のひらに収まるほどの小型銃だが、初めて武器というものを手にした晃は、銃身の冷たい感触に、一瞬、身震いした。

水原二等官は、強い目で晃と浅野を見た。「ビル北側の業者用の通用口から、センター心臓部である、ビル地下二階が、この世界で採集されたあらゆる生物、非生物のデータが保存されている、免疫センターのメイン・コンピュータ室です」

メイン・コンピュータのデータバンクに、美鈴の記録もあるはず。しかし、メイン・コンピュータには間違いなくセキュリティ・ロックが掛けられているだろう。ロックを外し、膨大なデータの中から、美鈴や笠井由利香二等官の情報を拾い出すのは、内部の職員、それも、よほどデータに詳しい人間でなければ無理だ。「センター内部に、《奇跡の羽根》の人間が入り込んでいるんすか？」

晃の問いに、水原二等官は大きく頷いた。

「《B?2》という人物が、お二人をサポートするようになってます」

「コードネーム、ですか？」浅野の質問は、晃も思ったことだ。

水原二等官は、表情を変えるでもなく「そのようなものです」と答えた。

「我々も《B?2》については、あまり詳しくは知らされていません。ですが、《奇跡の羽根》のリーダーが信頼している人物なので、信用できると考えています」

本名を仲間にも明かしていないのは、多少妙ではある。が、ここまでできてあれこれ詮索しても仕方がない。

「分かりました」と、晃は短く了解した。

簡単な作戦説明を聞き終え、晃たちは、水原二等官を先頭に、一列になって螺旋階段を登った。長年ずっと使用されていなかった鉄の階段は、錆び止めの赤い塗装が無数に罅割れてささくれ立ち、手袋をしていない晃と浅野は、手すりを掴むことに躊躇を覚えた。

三階分はあるだろう階段をどうにか上り切り、細い鉄橋を渡る。

水原二等官が、鉄扉の、レバーハンドル式のノブに手を掛けた。

扉が開く。ぷん、と、真樹区外縁独特の、饅えたスラムの臭いが、微かな夜の空気の流れと共に、入ってくる。

水原二等官が、まず扉の外へ首を出し、素早く周囲を確認する。

「……まだ、この辺りは大丈夫なようです。出たら、すぐに右隣のビルの一階の店へ入って下さい」

さしもの特殊警邏隊隊員も、かなり緊張しているのだろう。硬い

声で早口に指示すると、
水原二等官は、するり、と、表へ出た。

次いで、麻生が出る。慌てた風もなく堂々と扉を跨いだ隻腕の男の後ろに、浅野と晃が続いた。

最後に出た笠井三等官が、静かに扉を閉めた。歩道の街路灯の明かりに照らされた、黄色く塗られた地下道への扉を、晃はなにげなく振り返る。

扉の真ん中に、朱色の褪色防止剤入りの塗料で、大きく文字が書かれていた。

『これより内部は危険地域により、立ち入りを禁じる。公安』

いささか色が薄くなった、角ゴシックの『公安』の二文字は、書かれた年代など関係なく、南外縁の凶悪なマフィアですら震え上がらせる、強力な呪文だ。どつりで、扉の中の階段とトンネルの存在が、今まで誰にも見つからなかったわけである。

おまけに、扉には外側のノブがなかった。恐らく、扉に文字を記した当時の公安が、トンネルの存在を部外者に見られないようにと考え、外側のドアノブを取り外したのだ。

「念の入ったことだ」晃がなにを見ているのか気がついた麻生が、皮肉に唇を釣り上げた。

「自分たちが隠して、そのまま忘れ去った道を、まさか逆に使われるなどは、やつらは夢にも思っていないかったろうな。世界を、あの忌わしい城から眺めて、全て分かっている顔をしていやがる」

麻生は、顎で歩道の先を指し示す。晃は、指された方角へ目をやった。

地上から上空へと光を放つ街路灯が、ぼんやりと夜空を曇らせている。薄靄が掛かった

ような景色の中に、真樹区センタービルが聳え立っていた。

「明かりが、点いてる」

晃は、目を見開いた。

夜は通常、街路灯の光をクリスタルの表面が乱反射するだけで、内側からの明かりなど

一つも見えないセンタービルが、今夜は窓という窓の明かりが全て、煌々と点いている。

「どうも、こちらを威嚇しているようですね。……あるいは、釣る気かな」

低い声で呟き、水原二等官はヘルメットの風防を下ろした。麻生はふん、と鼻を鳴らした。

「釣られてやるさ。??よく見ておけ。これから俺たちが乗り込む場所を。『神の代行者』」

を気取り、世界を上から観ているつもり、やつらの『城』を」振り向き、晃の顔を見詰める麻生の目の強さに、晃は僅かに戦いた。己の中に生まれそ

うになるこれから先の展開への恐怖を押し込めるべく、晃は固く唇を引き結んだ。

水原二等官が、滑るように右隣のビルに向かって移動を開始した。晃たちも、水原二等

官に倣った。周囲を気を配りつつ、空に光を放射しているLEDの街路灯を避けて走る。

普段なら賑わっているはずの街路に、通行人が一人も見当たらない。気味の悪いほど静

まり返った街を、いつもと変わらぬ街路灯の明かりが照らす。

水原二等官は、目的の店のドアを押し開いた。「早く」と急かす声に、晃と浅野は更に足を速める。

ちらりと見た3D・レーザー・ディスプレイの看板には『ファイヤー・ウインド』という文字が書かれていた。ショット・バーか、ホワイト・ウインドと同じミュージック・パブだろうと、晃は想像した。

店内は、はたして晃が思った通りのミュージック・パブだった。見慣れたリスニング・

チェアと、ほんの少しだけ、ホワイト・ウインドのものと形の違うカウンター。

ここは、いつもの職場なのではと、晃は束の間、錯覚する。

カウンターの前には、五人の保安官が立っていた。水原、笠井両特殊警邏隊隊員と同じ

型の防護服を着用した五人は、晃たちに気付くと声を上げた。

「おー。遅いつすよ、水原さん」

真ん中に立っていた、一番背の低い隊員が、フルフェイス・ヘルメットの風防を上げて、入口に駆け寄ってきた。

「いや、済まない。……で、様子は？」

水原二等官は苦笑しつつ、後輩らしき笑顔の仲間に問いかける。

「はい。C隊は、すでに戦闘配備についています。D隊は、八木課長の指揮待ちです」

八木の名を聞いて、晃は、はっ、とした。思わず一步を踏み出す。「店長、無事なんすか？」

小柄な晃より更に小柄な隊員は、驚く風でもなく、晃に目を向けた。

「ええ。ぴんぴんしてますよ。……あー、あなたですね、課長の店で働いている日野くん、でしょ？」

頷いた晃に、隊員は、体に似合った童顔を、くしゃっと歪ませて笑った。

「頑固で生意気だけど、根は素直で真面目で可愛いヤツだって、あの堅物の八木課長が嬉しそうに言っていました」

『あの堅物』で偏屈な八木から、可愛いなどと言われたのかと思うと、身の毛がよだつ。

気色悪さに眉を顰めた晃に、隊員は慌てて、「あ、いえ、決して悪口じゃありませんから」

と、方向違いな訂正を付け加えた。

晃の斜め後ろで、水原二等官と浅野が、一緒に吹き出す。晃は、眉間に皺を寄せたまま

「なにが、おかしいんだ？」と、二人を睨んだ。
浅野が、笑いでひしゃげた顔を無理に戻しながら、「いいや」と首を振った。

「ここで無駄話をしている暇はないだろう。サブ・コンピュータの復旧まで、あと二十時間ちよつとだぞ？」

扉に寄り掛かった麻生が、苛立たしさを含んだ強い声を上げた。
「準備が整っているのなら、すぐに作戦に懸かったほうがよいと思いますが」

笠井三等官も、抑揚がないながら、水原二等官や仲間の保安官のおふざけに、少々苛ついているらしい発言をする。

水原二等官は「すまん」と肩を竦めると、小柄な保安官に真面目な顔で言った。

「では、益田三等官。早速、作戦を始めよう」
水原二等官よりくだけた性格の益田三等官は、表情を引き締める
と、「はっ」と敬礼し、

防護ブーツの踵を合わせた。

五人の保安官が新たに加わった一行は、再び敵陣となる店外へと向かった。

ファイヤー・ウインドの扉の外は、相変わらず静かだった。益田三等官の話では、午後

五時に、公安が夜間外出禁止を発表したためだ。

特殊警邏隊隊員たちのセンター攻略作戦は、至ってシンプルである。各五人から十人を

五隊に分け、時間差でセンタービル正面へ攻撃を仕掛ける、という作戦骨子だ。

A隊から順に始め、晃たちが合流したE隊が最後に攻撃する。尋香の人数は『B12』

から約四十人という連絡が来ている。

ファイアー・ウインドを出る間際、晃は益田三等官から、

「センター内のアトリウムに入ったら、すぐに左側の壁面上の監視カメラに二度、頷いて

くれと、先刻『B-2』から連絡が入りました」と、告げられた。

LEDライトの明かりで薄められた夜の闇の中に立ち、晃はしばし、センタービルを見

詰めた。

あの光の城の中に、コリンがいる。早く助け出さなければ、コリンはどう処置されるか

分からない。ホワイト・ウインドに転がり込んできた時の大怪我も、多分、センターから

逃げ出した時に負ったのだろう。

コリンを傷付けたのは、間違いなく尋香だ。

晃は、大きく息を吸い込むと、周囲の音に耳を澄ます。

水原二等官や、益田三等官たちE隊の動く音以外、他の人間の物音は聞こえない。

息を潜めた街の中には、だが、確実に尋香という、牙を持つ女戦士たちが隠れている。

敵の気配に注意を払いつつ、晃たちとE隊は、店の扉の前を離れた。

「恐らく、尋香はセンタービルの近くを護っていると思います。近付いて、先に我々と接触するのは、公安三課と四課の保安官でしょう」

E隊の後ろ、最後尾に付いた晃に、益田三等官が下がってきて囁く。晃は、ぼんやりと

見上げていた、薄闇に浮かぶセンタービルから、足下からの街灯に透けて見える益田三等

官の真顔に目を移した。

「俺は……、メイン・コンピュータから妹のデータを取り出すのもう一つ、人を探さなきゃなりません」

「コリン、ですか?」

頷く晃に、益田三等官は難しい顔をして、唸った。

「コリンに関しては、八木課長と麻生さんにも頼まれて『B?2』にセンター内を探して

貰ったんですが……。それらしい人物は見つからなかったそうです」「どうして?」と言い掛けて、晃は声を飲んだ。

同じ組織に所属していても、部署が違えば顔も名前も知らない事例は多々ある。

『B?2』は、コリンとは面識がない、別の部署の人間なのだろう。急速に萎んだ気持ちを抑えて「そうですか」と、晃は歩き出す。

後ろから、益田三等官が追い掛けてきた。

「でも、ですね。免疫センターのメイン・コンピュータで検索すれば、必ず見つけ出せる

と思いますよ。うん、大丈夫です」

何の根拠で、と、晃は一瞬むっとする。しかし、益田三等官なり

に、晃の気持ちを落ち

込ませないよう、一生懸命に気を使って言っているのだろう、と思
い直した。

「そうですね。コリンは、俺がきつと見つけ出して、連れて帰りま
す」

無理矢理どうにか口の端を吊り上げて意気込んだ表情を作った晃
に、益田二等官は子供
のような笑顔を返した。

その直後。センターの方角から、稲妻のような閃光が、夜空に走
った。続いて聞こえて
きた、なにか大きなものが砕けたらしい轟音。

「ハンディ・タイプの荷電粒子砲の光だ！」益田二等官が叫んだ。

「いよいよ、始まったな」麻生が厳しい声で言った。

「我々も、所定の位置に急ぎましょう」水原二等官が、歩を速めた。
人影がまるでない、異様な南外縁の街中を、晃たちとE隊の五人
は、センタービルに向
かった。敵から見られないよう、ビルの壁伝いに慎重に進む。

現在の場所からセンタービルまでは、目算で約二キロメートル。
普段なら、さほどな距

離ではない。が、半日以上ずっと歩き続けた疲労は、晃の動きを確
実に鈍くしていた。

履き慣れた合皮の編み上げブーツが、やけに重い。一步を歩く度
に、ふくらはぎの筋肉
が引き攣れる感じがする。

五百メートルほど、ビルに沿ってジクザクに前進する間に、晃は徐々にE隊と水原二等官たちから遅れ始めた。追い付こうと早足にした途端、足がもつれた。

盛大に歩道に転んだ晃に、E隊の最後尾の隊員が気が付いた。

「大丈夫ですか？」

駆け戻ってきた隊員は、晃を助け起こすと、外套の埃を軽く叩いてくれた。

「ありがとうございます」

みつともなくて、晃は俯いて礼を言う。晃より頭二つ分背の高い隊員は、フルフェイス

・ヘルメットの風防越しに、微かに笑んだ。

「どこも怪我はないですか？」

そこへ水原二等官が、先頭から引き返してきた。

「どうした？ 赤嶺三等官」

「なんでもありません。俺が、ちょっと、こけただけで」

晃は、どんな顔をしてよいのか分からず、眉を顰めて水原二等官を見た。水原二等官は

風防を上げ、につ、と笑った。

「気を付けて下さい。先はまだ、ちょっとありますから」

「では」と片手を挙げ、水原二等官はE隊の先頭に戻る。地下道でずっと背負っていたイ

ンターナル・フレーム・バックをファイヤー・ウインドに置いてきて背が軽くなったため

か、水原二等官の足取りは、やけに軽快だ。

「行動が早いすね、水原さん」

その上、さすがは日頃から鍛練している保安官である、浅野邸から続く地下道を歩き詰めた後だというのに、全く疲れが見えない。

自分とさして年が離れていないだろう水原二等官の背を、半ば呆れ、半ば羨ましく見送

った晃に、赤嶺三等官は「水原先輩は人一倍、元気な人ですから」と柔らかい声で返した。

晃は、赤嶺三等官のイントネーションを聞いて、ふと思い付いて尋ねた。

「失礼ですけど、もしかして赤嶺さんて、奈波市の出身ですか？」

この国の最南端に位置する奈波市は、十二年前のレリア・D?iウイルス大流行で、二百年間に亘って辛うじて保っていた市の人口、約千人の四分の三以上を失い、壊滅した。

原因は、不十分な病院施設と、首都塔経市からあまりに離れた場所のため、ワクチンの輸送が間に合わなかったためだと噂されている。

生き残った僅かな人々では、街の機能を維持することができず、レリア・D?iウイルス

ス流行の収束から三ヶ月足らずで、奈波市はオオトゲアレチウリの大波に飲まれた。

大都市である塔経市では、奈波市の出身者は珍しい。好奇心から思わず尋ねた晃に、赤嶺三等官は「そうです」と、静かに答えた。

「自分は、奈波市の中心部に、一家七人で暮らしていました。けれど、今は一人です」

「ご家族全員が、その……、レリア・D?iウイルスで亡くなられたんですか？」

頷く赤嶺三等官の表情が、風防越しでも分かるほど、曇った。

兄弟がレリア・D?iウイルスの犠牲になったのは、晃も同様だ

った。にも関わらず無

遠慮に尋ねてしまい、晃は申し訳ないことをした、と反省する。

晃が謝罪を言い出すより早く、赤嶺二等官が口を開いた。

「ですが、家族は生きています。もう体はありませんが、内臓や脳は、免疫センターの中で実験体に移植され、今も生き続けていると、研究者から聞かされました。??どんな形

でも、家族が生きているのなら、自分は満足なんです」

すつと、赤嶺三等官の手が腰に伸びる。

急に様子が変わった赤嶺三等官に、晃は、嫌な予感を覚える。

赤嶺三等官の手が腰のホルダーから引き抜いた荷電粒子銃を握り、晃に銃口を向ける。

銃口から発された細長い光が、晃の太腿に一直線に届くまで、○一秒もかからない。

当たる寸前で躲した晃は、道路側の植え込みの陰に転がった。

「どうして、俺を撃つんですか?」

なにが何だか分からない。驚きと衝撃が緋い交ぜになったまま、

晃は怒鳴った。

赤嶺三等官は、植え込みをゆっくり回りながら、抑揚のない声で答えた。

「自分の故郷、奈波市は、もうありません。でも、センターの中には、自分の家族が残っ

ています。あの中に、自分の故郷があるんです。ですから、自分はセンターを守ろうと、

堅く決めたんです」

身を低くした晃の前に、赤嶺三等官が立った。再び、赤嶺三等官が晃に銃を向ける。

晃は、道路に体を投げ出す。晃の動きを追った赤嶺三等官の腕が、荷電粒子銃の引き金

を引く??

しかし、銃口から迸った光は、晃の体には当たらなかった。

伸ばした右手の先の路面を削った最高出力の荷電粒子の稲妻に、晃はおののく。

「早く立って！」

声の方向に目を向けると、水原二等官が赤嶺三等官の腕を掴んで押さえつけていた。

「晃くんっ、早く逃げて！」

自分よりも大柄な赤嶺三等官をなんとか押さえ込みながら、水原二等官が必死に晃を促

す。晃は、急いで立ち上がると、駆け出した。

異変に気付いたE隊の他の隊員たちが戻ってくる。恐怖と疲労で足がもつれ、晃は再び

倒れかかる。歩道のタイルに手がつく前に、笠井三等官の腕が晃を支えた。

と同時に、益田三等官の、水原二等官を呼ぶ悲鳴のような声が聞こえた。

振り向くと、赤嶺三等官の荷電粒子銃が、水原二等官の大腿部を撃っていた。短い呻き

声を上げ、水原二等官が歩道に倒れる。

引き返そうとした晃の腕を、笠井三等官の力強い腕が捕まえる。

「離せ！」と晃が叫ぶのと、益田三等官が赤嶺三等官の銃を握った手を撃つタイミングが、

重なった。

荷電粒子銃が、赤嶺三等官の手から離れ、街路灯の仄明かりの中、宙を舞う。

腕を押さえて蹲った赤嶺三等官に、銃を構えたままの益田三等官が近付いた。

「赤嶺！ 貴様、なんでっ！」

激しい憤りで声を裏返らせた益田二等官の詰問に対し、赤嶺三等

官は、少し離れた晃に

ようやく聞き取れるほどの声で、答えた。

「家族も、家も、レリア・D？iウイルスによって奪われて、俺は、とうとう独りぼっち

になった。遠縁を頼って、塔経市に来た。伯父も伯母も、優しかったけど、俺は、やはり

独りだった。……みんなに、会いたかった。公安に入っても、特殊警邏隊に入っても、家

族への想いは変わらなかった。そんな時、《B？2》に言われた。

「君の家族は、実験体

の中で生きている」と。だから??？」

赤嶺三等官の言葉は、最後は涙で掠れた。

「それで仲間を、家族を守りたいって理由で、裏切ったのかつ？」
銃を向けたままの益田二等官を睨んでから目を逸らし、赤嶺三等官は、薄明かりの中で
風防を上げ、見上げた。

「……体はなくなっても、家族の臓器は生きてる。俺は、家族を、もうなくしたくないんだっ」

泣き笑いの顔で、赤嶺三等官は力なく両膝をタイルの上に着く。

E隊の先頭から引き返してきた麻生が、厳しい表情で水原二等官を助け起こした。

「《B?2》と連絡を取っていたのは、笠井と赤嶺、それと水原くんか」

低く唸った麻生に、赤嶺三等官が、青いLEDライトの光に照らされてなお青い、亡霊のような顔を向ける。

「……免疫センターの柳沢副所長は、今夜の事態を、かなり以前から把握していた。《B

?2》による情報流出は、柳沢副所長も承知のことだ。《奇跡の羽根》の動きも、副所長は知っている。もうすぐ、三課の連中がここへ来る」

赤嶺三等官の言葉が終わるや否や、通りの反対側の建物から、十人ほどの、武装した保安官が飛び出してきた。

紺色の防護スーツを纏った三課の保安官たちは、手に手に荷電粒子銃を持ち、晃たちを包囲するように散開する。

水原二等官に片腕を貸し、迫りくる敵を睨み据えた麻生に向かっ

て、赤嶺二等官が間延びしたような声で言った。

「あなたと日野くんに関しては、生け捕れと副所長から言われている。」「大事な実験体だから」と。他は、場合によっては殺しても構わない、と」

「赤嶺つ、貴様??！」食いしばった歯の間から、怒りを押し出すように水原二等官は唸った。

先輩保安官の、憤怒の形相を見上げていた赤嶺二等官は、不意に乾いた笑い声を立てた。

「俺は……、間違ったことなんかしていない。??投降して下さいよ、水原さん。そうす

れば、命までは取られない。どだい、無理なんですよ、公安や、中央、免疫センターなんて巨大なものに、俺たちだけで楯突こうなんて」

「負け犬の世迷い言を聞いている暇は、ない」

朗らかなこれまでの様子からは考えられない酷薄な態度で、水原二等官は赤嶺二等官の提言を切り捨てる。

梟を押さえていた笠井二等官が、不意に梟に囁いた。

「右の二人を潰します。敵が倒れたら、斜め右のビルに向かって走って下さい」

麻生に支えられていた水原二等官が、麻生の腕を離れた。その行動が合図になった。

先頭に残っていたE隊の二人の隊員が、素早く路上に横転、荷電粒子銃の引き金を引いた。

公安のどこの部署よりも訓練を積み重ねてきている特殊警邏隊員の動きは、見事であ

る。応戦する間もなく脚を撃たれた三課の保安官が、悲鳴を上げて転倒する。

「走って！」という、笠井三等官の叫びに背を押され、晃は指定されたビルの玄関へと――目散に向かう。

灰色の外套をはためかせて走る晃の脇を、荷電粒子銃の稲妻が掠める。

ひやりとして、一瞬びくつと足を止めかけた晃の手を、浅野が捕まえた。

「気にするなっ！ 止まったら撃たれるっ！」

晃は、浅野に引つ張られ、再び走り出した。二人の背後で何度も荷電粒子銃が歩道のタイルを抉る音がした。

這々の態で、右斜め前のビルの正面玄関に飛び込む。強化アクリルの自動扉が閉まる寸

前に三課の保安官が一人、ビル内に滑り込んできた。

ライフル型の荷電粒子銃を腰高に構えた敵に、晃と浅野はじりじりと、後ずさりでも奥へ向かう。

正面玄関から続く廊下は、大の男が二人やっと通れるほどの広さである。その上、廊下の両側には、飛び込んで隠れられそうな部屋もない。

晃は、一瞬ちらつと、背後を振り返る。

背後は突き当たりに見えた。が、天井に等間隔に並んだLEDの明かりの様子からだと、左右に通路が伸びているようだ。T字路まで下がり、どちらかの通路に飛び込むほかに、逃げ道はない。

晃は、横目で背後の浅野に目配せする。浅野は分かっただらしく、僅かに頷いた。

保安官は、赤嶺三等官が言っていた通り、晃たちは生け捕りにするつもりようだ。今のところ、荷電粒子銃を発砲してくる気配はない。

向き合う三課の保安官の、濃紺のフルフェイス・ヘルメットの風防を睨み据えながら、晃は左手で壁を撫でるように触りながら後退する。

息詰まる時間が、どれほどだったのか。

突然、正面玄関が開き、麻生が入ってきた。驚いた保安官が振り向くのとほぼ同時に、麻生はヘルメットで防護された保安官の頭部を素手で殴った。

ハンマーのように横に振られた麻生の左腕が、フルスピードでヘルメットに当たる。

晃は、思わず顔を背けた。いくらなんでも、無理だ。強化ナノ・

セラミックに耐熱絶縁

体塗料で色付けした、鋼鉄をも凌ぐほどの硬度を誇る保安官のフルフェイス・ヘルメットを、素手で殴るなんて。絶対に腕が折れる。

がきん、という、硬質のもの同士がぶつかり合う音がした。麻生の怪我を確認すべく目

を戻した晃は、ライフル型荷電粒子銃を両手で振り被ったまま、横様に倒れる保安官を目撃する。

衝撃の結末に驚いて駆け寄った晃は、保安官のヘルメットの側頭部に大きな穴が開いているのを見つけ、更に驚く。

晃はあんぐり口を開けたまま、目を保安官から麻生に向けた。かなり急いでここまで来たのか、まだ肩で息をしている麻生は、倒した相手に目を落とし、

咳いた。

「俺の腕は、レリア・D？iウイルスのせいで、骨が強化ナノ・セラミックと同等の硬さ

になっている。腕だけじゃない。全身の骨の硬度が、やたら上がってるんだ」

顔を顰め、麻生は己の拳へ目を移す。

「皮膚も、皮下組織も、骨の硬化に合わせたように頑強になった。

…… 感染して、そこだ

けは得をした点かもしれん」

「でも、右腕は……、尋香に折られた、んですよね？」

遠慮がちに尋ねた浅野に、麻生は唇を歪めた。

「折られたんじゃない。いくら強化ナノ・セラミック並みに骨の強度が増したといつて

も、駆動部の関節は弱い。俺の右腕は、尋香が肘の関節から、引き千切ったんだ。だが、

尋香も、ただでは済まなかったけどな。俺は皮一枚でぶら下がった右腕から、やつの手を引き剥がすのに、やつ目を狙って、思い切り荷電粒子銃をぶつ放した。チタン超合金の頭は、荷電粒子には強いが、脳だけは弱い。尋香は頭部の穴という穴から、溶けた脳をぶちまけて、倒れた」

飯山医師から以前聞いていた事実ではあるが、改めて、千切られる腕と飛び散る脳を想像して、晃は気持ち悪くなった。同じ想像をしたらしい浅野が、隣で口を片手で押さえ俯いた。顔を背けた晃の耳に、再び玄関の自動扉の開く音が聞こえる。

「まだ、こんなところにいたんですか」

益田三等官だった。小型の荷電粒子銃を片手に構えた益田三等官は、風防を上げると、

目に掛かった汗を指で拭った。

つい先刻別れたばかりなのに、益田三等官の防護服は、もうあちこちに焦げ痕があった。

かなり激しい戦闘が三課の保安官との間で繰り広げられたのだと、晃は気付いた。

「早いとこ、センターへ向かって下さい。この調子だと、じきに尋香まで出てきそうですよ」

口をへの字に曲げた、小柄な益田三等官を見下ろして、麻生は渋い顔をした。

「センターに辿り着く前にやつらに出くわすのは、得策じゃあないな」

「でしょ？ ですから、これ、どうぞ」

益田三等官は、ウエスト・ベルトに吊るした携帯ホルダーから携帯電話を取り出し、麻生へ手渡した。

左の手のひらに載った折畳式の電話に麻生が鋭い視線を落とした時、電話が鳴った。

晃は音に驚き、びくん、と身を竦ませる。浅野も目を見開いて、携帯を見詰めた。

麻生は、晃と浅野を渋い表情のまま一瞥すると、携帯を開いた。

「こちらaE35?1J6qの携帯??八木かつ?」

麻生の強い声が呼んだ名に、晃は弾かれたように駆け寄った。

「店長からですか?」と尋ねた晃に、麻生は振り返って頷く。

「今、どの辺りだ？ センタービルの、北側だと？ …… ああ、分かった」

「八木課長は、なんて？」

通話を終え携帯を畳んだ麻生を、益田三等官が焦れた顔で見上げる。麻生は、難しい表情で答えた。

「尋香が十人ほど、センタービルの正面に貼り付いている。やつらは全員強化ナノ・セラミック製のバタフライ・ナイフを携帯しているそうだ」

痛みを感じず、己の筋力の限界を知らない尋香が、戦闘用のナイフを縦横に振るったら、どうなるか。こちらとしては、相当の損傷を覚悟しなければならぬ。晃は恐怖を感じ、固唾を飲んだ。

「それから。裏へ回って、じいさんに会え、と」

麻生は、仏頂面で外套の内ポケットに入れた。浅野が首を傾げ、麻生の顔を見る。

「じいさんって、誰ですか？」

「《奇跡の羽根》のリーダーだ」
てつきり《奇跡の羽根》のリーダーは、麻生だと思っていた。意表をつかれた晃は、歩き出した麻生を追い掛けて、麻生の、中身のない外套の右袖を掴んだ。

「何者なんすか？ その“リーダーのじいさん”って？」

足を止めた麻生は、晃の手から無表情で右袖を引き抜くと、ずいっと、息が掛からんばかりの近さに、顔を寄せてきた。

「センタービルに行けば、誰だか分かるぞ」

度肝を抜かれて目を見開く晃に、麻生は、片頬を歪ませて、いたずら小僧のような笑み

を見せた。

こんな表情の麻生は、見た記憶がない。返す言葉を失った晃の肩を、麻生は、

「行くぞ」と叩いた。

逃げ込んでいたビルは、正面玄関から裏口へ抜けることができた。麻生を先頭に、晃と浅野は、センタービルに通じるルートを進む。最後尾には、益田三等官がついてくれた。

敵の目がないか確認しながらビルの外壁に沿って進むのは、時間も、神経も費やす。

人気の少ないのを幸いと通りを闊歩する猫が、歩道の側面に設置された、夜空に放射される淡いLEDの明かりを横切る。緊張がピークに達していた晃は、猫の影に思わず飛び上がった。

気が付いた浅野が振り返り、苦笑した。

「猫、通ったね？」

「分かってるよ」と、晃は恥ずかしさをごまかすため、口を尖らせた。

気を取り直そうと、晃はベルトに吊るしたアナログ・ウォッチを、ビルの玄関灯の薄明かりに翳す。細い針は、十時三十分を指している。

気付けば飯山医院からここまで来るのに、半日以上も経っている。飯山医師は、大丈夫だろうか？

それに、尋香に連れて帰られたというコリンは、どうしているだろうか？

二人とも、まさか既に殺されたりはしていないと思いたい。だが、人を人ともみていな

いというセンターである、必要なしと判断すれば即座に処分、という場合もあり得る。

飯山も、コリンも、もはやこの世界に存在しないかもしれない？
マイナスな思考を振り払おうと、晃は長髪を二、三度乱暴に振り
回す。

先を行っていた麻生が、周囲を一巡り見渡し、通りを跨いだビル
の正面玄関へ向かって
走った。晃と浅野、益田三等官も続く。

濃紫色の強化アクリル製の両開きの扉を押し開け、フロアへ入る。
正面がエレベーター、
左右が片開きの扉となっているフロアは、どう見ても先ほどのビル
のように通り抜けでき
るとは思えない。

が、麻生はこのビルの構造を知っている様子で、迷うことなく右
の扉を押し開けた。

二百年前、真樹区がこの国の経済拠点だった頃には、さぞ活気の
あるオフィスであった
ろう室内は、現在、LEDの非常灯がぼんやりとした光を放つほか
は、何一つない。

晃たちが立てる埃が、足下を照らすLEDライトの薄い光の中に、
乱舞している。

麻生は薄闇の中を、どんと進んでいく。細長いオフィスの中
を突っ切り、左側面の
角にある扉を開けた。

出た先は、暗闇だった。勝手知ったる動作で、麻生は扉のすぐ脇
を手で探る。

間もなく天井のLEDシーリング・ライトが点灯した。

柔らかい明かりの下に立ち、晃はほっと緊張が解けるのを感じた。
と同時に、自分たち

を先に逃して戦闘の場に留まった者たちを思い出す。

「水原さんと、笠井さん、大丈夫かな……」

誰に問うともなしに呟いた晃に、浅野が「そうだね」と小さく同

意を返した。

「結構、囲まれてたしね。俺たち、よくあそこを突破できたよな」

「水原さんたちなら、大丈夫ですよ」

やや心配気味な表情を浮かべた浅野に、益田三等官が笑いかけた。

「我々特殊警邏隊は、こういった野戦の訓練を、嫌というほど受けています。ですので、

少々の窮地では簡単に音を上げません。……とは言っても、赤嶺の裏切りは予想外でした
が」

「赤嶺も赤嶺なりに、色々と悩んだ結果だろう」

麻生はぶつきらぼうに言い、歩き出した。晃は内心で頷いた。

麻生も八木も、腹が立つほど口が悪い。だが、皮肉を言いながらも、二人とも言った相

手に対して実はとても誠実なのだ。

晃は、ようやく人間関係が少し解ってきた。

赤嶺三等官の裏切りは、一瞬でも仲間と思い、信頼した晃としては、決して許せるものではない。しかし、麻生は「やつなりの理由があつたのだ」として容認した。

麻生の、赤嶺三等官に対しての見解が正しいかどうかは別にして、裏切られても許した

背後には、麻生なりの命への憐憫があるように、晃には感じられた。

どんな人間の死であつても二度と見たくはない、という思いは、晃のように、十二年前

のレリア・D?iウイルス蔓延の悲劇で親族を亡くした者は皆、例外なく持っている。麻

生に至つては、己の身がレリア・D?iウイルスによって変異したのだから、なおさらだ。

麻生たち《羽化しても生き残つた人》は、これからの人間にレリア・ウイルスというモ

ンスターとどう対峙したらいいかを教えてくれる、生きた教科書だ。大事にするのが当然

だと、晃は思う。

なのに。有機体は、人も例外ではなく、全て実験体としか見えないというセンターの

研究者たちは、これまでに捕縛した《羽化しても生き残つた人》たちを、切り刻み、シャ

ーレに押し込め、電子顕微鏡で観察するためにプレパレートに封印したのだろうか。

晃には、どうあつても理解できない精神構造だ。

突然、名を呼ばれ、晃は物思いから意識を現実に引き戻された。

慌てて顔を上げてみる

と、麻生と浅野がビルの裏手の扉から外へと出ていた。

「ぼんやりしていると、置いて行くぞ」

麻生は、怒っているというより、呆れている声音で急かすと、晃に背を向けた。晃は、

まだ自分を笑って見ている浅野に膨れっ面をして見せながら、外へ出た。

出た先は細い路地で、すぐまた同じようなビルの裏口が見えている。路地がやけに明る

いのは、三階辺りに設けられた、ビルとビルを繋ぐ連絡通路の下側壁面に、長方形のLED

ライトが取り付けられているためだった。

連絡通路で繋がったツイン・ビルは、真樹区では珍しくはない。

晃の住んでいるビルに

隣接しているビルの一つも、ツイン・ビルだ。

巨大なビルをいくつも建てると、ビルの壁面によって街を抜ける風が阻まれてしまう。

細長いツイン・ビルにすれば、間に路地を取り、そこを風が抜けるので、街の温暖化が防げる。

現在は干上がり、オトゲアレチウリが覆い尽くしてしまった海に、塔経市は二百年前までは面していた。海があった頃には、塔経市には夏場は、涼しい海風が吹き込んでいたと伝えられる。

自然を研究し、共存しようと試みていた一方、自然を破壊し続け、オトゲアレチウリ

という、身に魔物を潜ませた化け物を引き出してしまったのは、どうしてなのか？

人は、生命をどうしたいのだろう。次のビルの通路を進みながら、

晃はまた、そのこと
ばかりを考えていた。

ツイン・ビルを抜けた晃たちは、また通りに出た。

通りの向こうは、小さな児童公園だった。長い間使用されていないと見られる公園は、

壊れた遊具が伸び放題の雑草に埋もれている。周りを囲う高さ七十センチほどの塀には、

子供向けに、蝶や鳥の形のLEDのカラーライトが取り付けられていた。

赤や黄色の可愛らしい光は、打ち捨てられて久しい遊び道具の残骸を、揶揄するかのよう
に照らしている。

晃たちは雑草の中へ分け入った。赤錆を纏い、脆くなった遊具の成れの果てを避けて、公園の中程へと差し掛かった時。行く手の通りの街灯に、人影が浮かび上がった。

「尋香だ」という浅野の密やかな声に、ぼんやり考え事をしていた晃は、夢から覚めた人のように、はっと目を上げた。

か細い肢体に、海老茶色の、ワンピース・タイプのスリム防護服を着た尋香は、コリンと同じ、耳の下で切り揃えた白い素直な髪を、夜風に靡かせている。右手に握られたバタフライ・ナイフが、蝶の形の照明にきらりと光った。

背の低い草ばかりが生い茂った公園では、隠れようもない。尋香の顔は、はつきりと晃たちに向けられている。

少女のような体つきの尋香は、ナイフを持ち直し、ゆっくりと近づいてきた。

麻生が左腕を横に上げ、浅野と晃を背に庇う。益田三等官が、荷電粒子銃を構え、麻生の脇に並んだ。

晃は、鼓動が徐々に早まるのを感じる。

尋香が、足を速める。公園の雑草が薙ぎ倒され、風に乗り、草の臭いが晃の元に運ばれる。麻生は腰を落とし、飛び掛かってくるであろう敵に備えつつ、後ずさる。

晃と浅野は、麻生の広い背に押されて下がった。

尋香がナイフを振り翳し、麻生に躍り掛かる。益田三等官が、荷電粒子銃の引き金を引いた。

細く伸びる閃光が、薄闇を裂く。的確に顔面を狙ったはずの光線は、あっさり尋香の驚異の身体能力によって回避されてしまった。

寸で宙で体を捻り、荷電粒子銃の攻撃を躲した尋香は、目標の麻生よりも左に逸れて着地した。猫のような軽やかさで、尋香は着地の体勢からすぐさま、麻生にナイフを繰り出す。

麻生は、体を反転させ、右袖で尋香のナイフを払う。しゅっ、という小気味良い音がした。麻生の外套の右袖が、十センチほどを残して裂けていた。

尋香のナイフが、麻生から晃と浅野へと向きを変える。凶刃が浅野に届く寸前、晃は浅野に体当たりした。

ナイフを避けた二人は、草むらに倒れ込む。迫る尋香の腕が、晃の脇腹にナイフを突き立てようと振り下ろされた??

が、白い手に握られたバタフライ・ナイフが晃の体に吸い込まれることはなかった。

麻生の左腕が、尋香の腰を押さえていた。と同時に、益田三等官が、今度は狙い違わず、荷電粒子銃を尋香の目に命中させた。

小さな落雷にも匹敵する電流で目から脳を焼かれて、尋香は絶命する。がっくり力の抜けた体を、麻生はそつと地面に下ろした。

「危なかったな」と、片眉を釣り上げた麻生に対して、益田三等官が「すみません」とヘルメットの頭を搔いた。

「下手すれば、麻生さんまで撃ち抜いてしまう、とは思ったんですが」

「益田の腕は信用している。俺が心配したのは、そっちじゃなくて、この二人だ」

渋い顔で告げると、麻生は、草の中に座り込んだままの晃に腕を伸ばした。麻生の手を

掴もうと手を伸ばして、晃は、自分の指先が小刻みに震えているのに気が付いた。

「……いいつす、自力で立ってます」

尋香の襲撃の恐怖に震えている、などという、みっともない事実を知られたくない。特に、麻生には。

立ち上がるうと、晃が草の上に手をついた瞬間。先に立ち上がった浅野が「新手だっ！」

と、緊張した声を挙げた。麻生と益田三等官が、同時に浅野の目の先を振り返る。

向かいのビルの前に、三課と思われる紺色の防護服の保安官二人と、先刻倒した尋香と

同じ、海老茶色のワンピース・タイプの防護服を着た尋香が一人、立っていた。

晃は、奥歯をぐつ、と噛み締める。

こう次から次と敵が現れるとなると、やはり赤嶺三等官の言っていた通り、こちらの動き

きはセンター側に筒抜けなのだろう。

このままでは、コリンを助け出すどころか、センターに辿り着くのも、至難の業だ。

だが、諦めてしまうことは断固できない。何としても、晃はセンターに辿り着かなくてはならない。

三人の保安官が、ライフル型の荷電粒子銃を構えた。尋香が、手の中に納めていたバタフライ・ナイフの刃を出す。

先程の尋香が襲撃してきた恐怖が、緩やかに晃の背筋を這い登ってくる。

突破策はあるか、という思いを込め、晃は麻生の横顔を見上げた。晃の視線に気付いた麻生が、ちらり、と後ろに視線を向ける。

麻生の腕が、僅かに上がった。晃は、麻生の手が左前方を指しているのに気が付いた。タイミングを計り、左のビルに走れという合図だ。

晃はゆっくり頷くと、右に立つ浅野の腕を掴んだ。

晃の動作が合図になった。三課の保安官が、一斉に荷電粒子銃の引き金を引く。晃と浅

野は、雑草の中を一目散に、せいぜい息を切らせて左側のビルへと走った。

飛び交う閃光をどうやって交い潜ったものか、何とか無事に公園を抜けた時。

晃の眼前に、尋香が立った。胸の高さにバタフライ・ナイフを構えた尋香は、LEDライトに赤い目を光らせて向かってくる。

晃は、浅野を背負ったまま後ずさる。浅野が、遊具の鉄屑に躓いて倒れた。晃は浅野の足に引つ掛かり、浅野の上に倒れる。

倒れながら晃は、水原二等官から預かった小型荷電粒子銃を、必

死で外套の内ポケットから取り出した。

ナイフを振り上げてくる尋香は、痛みを感じないためなのか、銃口を向けられても怯む

様子がない。白髪の、少女にしか見えない容姿の殺戮者は、無表情に晃を見据え、どんどん近づいてくる。

晃の鼓動は、恐怖に凄まじい速度で脈打っている。銃を固く握った両手の震えが止まらず、引き金に掛けた指にも、力が入らない。

晃の下敷きになってしまった浅野は、倒れた時にどこかに怪我をしたのか、横になったまま動かない。

早く尋香を倒さなくては。このままでは、浅野ともども、尋香の刃に殺されてしまう。

薄闇の中で、尋香の顔が、造作まではっきりと見えるほどに近く。もうだめだと、と

晃は目を瞑り、覚悟を決めて引き金を引いた。

軽い衝撃が、手のひらに伝わる。続いて、どさりと重たいものが地面に落ちる音がした。

晃は、恐る恐る、目を開ける。

街灯の明かりが薄めた闇の中に、それまでであった尋香の姿は、もはや見えなかった。代

わりに、見知った防護服の、見慣れぬ男が立っていた。

特殊警邏隊の濃灰色の防護服を着用し、ヘルメットは被っていない。スキン・ヘッドの

男の出現に、晃は驚いて跳ね起きた。

「早く立ち上がって下さい。間もなく、四課の保安官もこちらにやってきます」

静かな低い声を聞き、晃はようやく男が笠井三等官であるのが分かった。てっきり見慣

れない人物だと思ったのは、ヘルメットがなかったからだ。

最初の敵をどうにか退け、こちらへ駆け付けてくれたのだ。三課の保安官との戦闘がか

なり過激であったのは、笠井三等官の防護服のあちこちが、焼け焦げや傷や血液で汚れ、

さらにフルフェイス・ヘルメットがなくなっていることで分かる。

ほうつ、と、晃は体から力が抜けた。強く握り締めていた手から、荷電粒子銃が滑り落ちた。

笠井三等官が、晃の足下に転がった銃を拾い、渡してくれた。礼を言い、手を伸ばした

晃は、笠井三等官の、向かって右の背後に、尋香が仰向けに倒れているのに気が付いた。

一辺五十センチの車道用特殊セラミック・タイルに大の字になった尋香に、晃は一瞬、ぎくり、とする。

「あの……、笠井さん。俺が、尋香を殺したんすか？」

晃は、倒れたままの浅野に、膝について声を掛ける笠井三等官に、おずおずと尋ねた。

荷電粒子銃の引き金は、確かに引いた。

笠井三等官は、ゆっくりと振り向く。真上から見下ろした笠井三等官のスキン・ヘッド

には、いくつもの手術跡と、音響機器の入出力端子のような、小さな丸い穴がいくつ空いているのを、晃は見付けた。

「いえ。日野くんではありません。自分が、背後からナイフで心臓を刺しました」

感情の窺えぬ無機質な口調で、笠井三等官は答えた。晃は自分が殺したのではなかった

ことに内心で少しほっとしながらも、同時に、敵を断固として退ける勇気がない自身を恥じた。

「尋香は、センターの命令には絶対に背きません。また、痛みというものを知りません。」

殺さない限り、この女たちは、いつまでも我々を襲ってきます」

穏やかだが、はつきりとした笠井三等官の言葉に、晃は背を叩かれた気分になった。ただ

額いて自分の弱さを受け入れる以外にない。

笠井三等官に腕を引かれ、ようやく浅野が立ち上がった時。晃の背後で、どーん、という轟音がした。

晃は思わず首を竦める。同じく身を縮めた浅野と、目が合う。振り向こうとした時。

「何をしている！ 早くビルへ駆け込め！」麻生の怒声が聞こえた。晃は慌てて走り出しながら、麻生たちに首を振り向けた。

麻生と益田三等官は、公園の右側の出口まで敵を後退させていた。しかし、新たな敵が

出現し、対装甲車砲型の大型荷電粒子銃を携えて、二人を狙っていた。

先程の轟音は、大型荷電粒子銃が遊具の残骸を撃ち抜いた音だった。

大型の荷電粒子銃だけではない。新手には、尋香が二人も加わっている。

あんな大勢を、麻生と益田三等官だけに任せて、自分たちは逃げてしまつていいのか？

晃は逡巡し、束の間、立ち止まった。

迷う晃に向かって、もう一度、大声で麻生が怒鳴った。

「俺と益田が命がけで戦っているのを、きみは、無駄にするつもりかっ？」

麻生の言い分も分かる。だが、ここで仲間を助けることも、自分の義務ではないのか？

晃は、ぐつと唇を噛むと、一步、麻生たちの方向へと踏み出す。

晃の動きに合わせるかのように、敵の大型荷電粒子銃が再度、発射された。麻生と益田

三等官は、向かってくる太い光の束を、地面に横転して避ける。目標を失った光の束は、

対面のビル壁面のクリスタル・コーティングを、轟音とともに破壊する。

LEDライトの作り出すほの明るい世界が、朦々と立ち込める粉塵で濁る。麻生も益田

三等官も無事かどうか、確認できない。晃は粉塵の中へ、走り込もうと動いた。

晃の脇を擦り抜けるように、浅野も粉塵に向かっていく。が、二人の体は強い力によって、その場に引き止められた。

「麻生さんたちのお気持ちをお二人は無にする積もりですか？」
笠井三等官の強い腕が、晃と浅野の腕を、それぞれ掴んでいた。

振り解こうと腕を振った晃に、笠井三等官は、峻厳な声で告げた。

「あなた方の戦場は、ここではありません」
晃ははつとした。

そうだ、自分の使命は、美鈴の死の真実を知ること。コリンを救い出すことだ。そのた

めに体を張ってくれている麻生たちの行動を、覚悟を、台無しにし

てはいけない。

情に負け、危つく本題を忘れてしまふところだった。

無表情だが、笠井三等官の手からは晃たちを思い遣る熱が、伝わってくる。浅野も気付いたようだった。

浅野は笠井三等官に、「すみません」と謝った。

「そう……、そうだったんだよな。俺たち、コリンと飯山先生を助けに行こうと思ってた

んだよな。それと、日野の妹さんの遺体の謎を調べに」

浅野は、解放された手で、苦笑いを浮かべつつぴしゃり、と自分の頬を叩いた。

「何、テンパってたのかな、俺たち」

「ああ。……ありがとっす、笠井さん」恥じ入りながら、晃は笠井三等官に頭を下げた。

笠井三等官は、「いえ」と抑揚なく返す。

粉塵の向こうから、悲鳴が聞こえる。やはり気になって振り向いた晃に、笠井三等官は、

「気にはいけません」と、強い声で諭した。

晃は頷き、向かうべき方向へと踵を返す。

再び悲鳴と怒号が聞こえる。麻生たちのものか、敵のものか。晃は、後ろ髪を引かれる

思いを堪えて、ビルへと駆け出した。

しんがりは、笠井三等官が引き受けてくれた。ビルの中に入ると笠井三等官は、三つ

ある扉のうち、真ん中へ入るよう、晃たちに指示した。

背後に、保安官が二人、追ってきていた。笠井三等官は玄関の脇に隠れて待ち伏せ、入

ってきた保安官を次々と殴り倒した。骨格をサイボーグ化している笠井三等官の一撃に、あつけなく保安官たちは昏倒する。

扉を薄く開け様子を見ていた晃に、笠井三等官は平板な口調で指示した。

「その部屋の奥の扉が、裏口へ抜ける廊下へ繋がっています。行って下さい」

晃は、握っていたドアノブを放した。

昏倒した保安官二人を跨ぎ、笠井三等官がバランスで閉まりかけた扉を引き開ける。

晃たちは、長年使用されていない建物内に舞う埃の中を走り、裏口へと出た。

通り抜けられるビルは、それが最後だった。センターまでは、そこから長い上りの坂が

続く。通り沿いのビルの凹凸に隠れながら進むしかない。

左手にセンタービルの明かりを見ながら、晃たちは敵に注意しながら進んだ。

晃は、先刻の戦いでどつと疲労が増していた。両足が、もはや自分のものとは感じられない。丸太でも引き摺っているようだった。

あと少し、あとちょっと、と、己の挫けそうな気持ちを励ましながら、のろのろと前へ

進んでいた。

体力がほんの少ししか残っていないこんな状態で再び敵に出くわせば、絶対に逃げ出せない。恐らく、浅野や笠井三等官に、自分を置いていってくれ、と告げる覚悟をしなければならない。

晃は、半ば諦めの心境で歩を進めていた。

しかし、幸運というべきだろう、敵には一切見つからず、センターの正門前百メートルの辺りにまで、なんとか辿り着いた。

晃たちは、センターの正門の左手前のビルの陰から様子を窺った。門前には尋香六人と、保安官十人が、びっしり張り付いている。

麻生が受けた八木からの連絡では、門前の尋香は十人ということだった。四人は、別な場所に移動したということか。

「あの保安官は、二課ですね」
薄暗がりですら、どうして見分けられるのか分からないが、笠井三等官はさざりと言った。

晃は、あっと思った。

「二課って、店長が元小隊長だった……？」
笠井三等官は、黙って頷いた。

公安の保安官たちは、個々人の判断で『奇跡の羽根』に協力している。表立って公安上

層部に叛旗を翻しているのは、特殊警邏隊のみだ。

分かつてはいるが、八木の元部下たちが敵になっていると考えると、なんともやり切れない。

眉を顰めた晃に、笠井三等官は幸いな補足をした。

「八木課長の元部下の保安官は、ほとんどが公安を退職しています。皆、民間人となって

《奇跡の羽根》のメンバーに加わっています」

「じゃあ、現在の二課の保安官は、八木さんとは関係が全然ないんだ……」

これから生死を懸けて戦わねばならないのだ。八木が、元部下と敵味方にならないで済

んで、晃は内心でほっと胸を撫で下ろした。

笠井三等官は、正門前の保安官の人数を、改めて数えた。

「十人、ということは、一小隊だけです。人数からすると、第一小隊か第二小隊です」

淡々と分析する笠井三等官に、浅野が「そんなことまで、分かるんですか？」と、やや興奮したような、上ずった声で訊いた。

「二課は、公安の本体ともいべき機動部隊です。第一小隊から第五小隊まであり、各小隊の構成人数は、十人から二十人。大型火器を携帯する場合としない場合で、小隊の人数は変わります。第一と第二小隊は先鋒を勤めることが多いので、人数は通常、最小です」

学習コンピュータの論文解説を聞いているような笠井の説明は、分かりやすいが堅苦しい。晃は少々頭が痛くなった。眉間に皺を寄せた晃に、笠井三等官の視線が向けられる。

「八木課長は、十二年前のレリア・D？iウイルス感染者の暴動の鎮圧に際し、めざましい働きをした功績で、小隊長から二課長に昇進しました。自分の姉が殉職して、三カ月後

です。八木課長は、課長として半年間職務したのち、退職しました」
笠井三等官が言わんとしている事柄が、晃には分かった。八木は二課課長として職務に

就いていた間、自分は助かり、許嫁が死んだという事実にも、猛烈に苦しんだのだ。苦しみ

ながら、許嫁の遺体に頭部がなかった謎を解こうと、必死に動き回ったのだ。

その八木が、今回の、千載一遇である機会を、晃に託した。失敗はできない。

「では、行きましょう」笠井三等官が、徐に、ビル陰から出た。

晃と浅野は笠井三等官について、道路を渡った。低い植え込みに隠れるように、身を屈め、門前を見据える。

正門に背を向けて、通用口へと路肩を北側へと向かう。街路灯の光を避けながらの中腰の行軍は、疲労した足に堪える。

伸び放題の植え込みの灌木の、横に飛び出した枝を避けようとして、足がもつれ、晃は思い切り尻餅をついてしまった。

痛みに声を発しかけて、辛うじて飲み込む。笠井三等官の腕が、すかさず晃の体を起こした。囁き声で怪我の有無を聞かれ、大丈夫だとジェスチャーで返した。

周囲に注意を払いながら静かに前進し、やがて、三人はセンターの北側通用口に着いた。

門の高さは、正門と同じ三メートル八十センチ。上部には、侵入者防止のための針状のセンサーが無数に埋め込まれている。扉の幅は、人間が通ることだけを想定しているため、

およそ一・五メートル。この幅を超える物品は全て、貨物用エアカーで搬入している。

門の内側は、貨物用エアカーが離着陸するための、大型のエアカーポートが設けられている。またビルの通用口は、貨物用エアカーがそのままビル内へ侵入できるよう、間口を広く取っている。

横に幅のある通用口の上部には、夜間照明の、やけに長い直管型

LEDのブルーライト

が、ぼんやりと灯っていた。二つの細長い照明の前には、二十人ほどの保安官が並んでいる。

灌木同様、手入れされていない、枝が伸び過ぎた楠の陰に陣取り、
晃たちは敵の動きを
じっと見詰める。

保安官たちは、ライフル型の荷電粒子銃を腹部の前に構え、両足を肩幅に広げ、微動だにしない。黒いフルフェイス・ヘルメットを、時折ゆっくりと左右に振っている。

「こんなに警備が厳重な場所に、本当に『奇跡の羽根』のリーダーがいるんですか？」

浅野が怪訝な顔で、声を潜めて笠井三等官に尋ねた。

「というより、この厳重な警備体制で、どこにリーダーって人がいるんすか？ 上手く、その人に会えたとは仮定して、どうやって中へ入るんすか？」

どう見ても、無理だろう。非難が混じった晃の質問に、笠井三等官は冷静を崩さずに答えた。

「『奇跡の羽根』のリーダーの奥平さんは、元国立生物学研究所の所長で、専門は『植物性誘導性植物シノモン』の分類と研究でした。研究の途上で、自分たちの『目印』を消す物質を、発見したそうです」

もしかしたら、例の『香り』のことか??と晃は思う。奥平さんという人が、麻生と同じ《羽化しても生き残った人》なら、己の生命を守るのに『香り』を消すのは、なにより大事だ。

訳が分からないという表情で、浅野が晃を振り返る。が、今は、詳細な話をしている時間はない。

「あとで説明する」と、晃は浅野の肩を軽く叩いた。

「けど、『目印』を消したとしても、センターの近くをうろついていたら、不審者として尋問されますよね？」

晃の疑問には、意外な方向から答えが返ってきた。「年寄りというのは、そういう時こそ便利なんだな」

声に振り向き、晃は驚いた。反対側の路肩からこちらへ渡ってきた老人は、晃の見知った人物だった。

「あんたっ！ 真樹区の野外ステージで、いつも俺の歌を聴いてた……！」

「しっ！ 声大きいよ」老人?? 《奇跡の羽根》のリーダー奥平は、胡麻塩の髭の生えた口に入さし指を当てた。

晃は、思わず息を止める。

笠井三等官と浅野が楠の枝の間から首を伸ばし、警護の保安官がこちらを気付いていな

いか、確かめる。幸い、保安官は晃の声には気が付かなかったようだった。晃はほっとして、

自分の頭に片手を乗せ、止めていた息を吐き出した。

奥平は、晃の表情を覗き込むと、おどけた顔で、にやっと笑った。「年寄りは、どこにいても疑われることが少ないんだよ。力はないし、縁石なんか腰掛

けてばーっとしていれば、ちょっとぼけてるかもしれない、と思われるしね。よもや、こ

んなじじいが、反乱分子を率ってるかもしれないとは、保安官も思わないのさ」

確かに、そうかもしれない。真樹区南外縁という、生活困窮者や弱者、敗者が集まる場

所で、老人は更に弱い存在だ。最低弱者と思われる真樹区外縁

の高齢者が、絶対的支

配者である塔経市中央官庁や公安局に、喧嘩を売れるはずがない、と誰もが思う。

さすがに《奇跡の羽根》という大組織を指揮するリーダーである。侮れないなど、晃は

気を引き締めて、奥平の皺深い顔を見詰めた。

「さて」と、奥平は笑顔のまま、くたびれた灰色の長い外套の内ポケットから、十センチ

ほどの長さの、細長いカードキーを取り出した。

「搬入業者に潜入した仲間が、やっと持ち出してきてくれた。しかし、これは、あいにく

『神の代行者の城』の外門を開けるだけの鍵だ」

奥平は晃の手を取り、片目を瞑って、手のひらにカードキーを載せた。

「このカードキーのICチップには、免疫センターに納入している、各搬入業者にそれぞれ

れ振り当てられている暗証番号と、会社とセンターとの間で取り決めた暗号文が、書き込

まれている。だが門内に入るには、他に二つの生体認証を行わなくてはならない。静脈認

証と、虹彩認証だ。生体認証は、《B?2》に前もって日野くんのもの、セキュリティ

システムに登録しておいてもらった」

《B?2》の名を聞いて、晃は微かな不快感を覚えた。

赤嶺三等官は、《B?2》からセンターの内部情報が《奇跡の羽根》側に漏れている事

実を、センターの副所長は知っている、と言っていた。

赤嶺三等官がセンター側の動きを知っていたのは、つまり《B?

2》が赤嶺三等官を裏

切らせたからではないのか？

《B?2》は二重スパイであり、《奇跡の羽根》の構成メンバーを一人でも多く裏切らせ

る工作を行ったのではないのか？

不安と不審が顔に出たのだろう、奥平は微笑んで、そつと晃の肩に節くれ立った手を載せた。

「赤嶺くんの裏切りは、水原くんから先程、聞いた。しかし、赤嶺くんが私たちから離れ

ようと思った理由は、《B?2》が勧めたからではないよ。《B?2》は、家族のことで

後悔している赤嶺くんは、単なる事実を告げただけにすぎない。家

族の臓器を実験材料に使われて、赤嶺くんのように、それでも家族が生きていると考えられる人間は、そう多くはない」

妹・美鈴の臓器も、実験に使われた可能性が高い晃としては、奥平の言葉は全く同意できる。赤嶺三等官の考え方は、遺族の中でも特殊だと思う。

しかし、裏切りは強要していない、ただ事実を告げただけなら、本当に《B?2》が二重スパイでない、という保証にはならない。

「畏かもしれない。だが『畏であっても、敢えて乗れ』と、先刻、麻生は言った。他に方法がないのだから、敵の撒いた餌と承知していても、食い付くしかない、と。」

頭では納得していても、どうにも腹の虫が納まらず、晃は奥平を睨んだ。

「今は、こんなこと言うべきじゃないのは、分かっています。けど、俺は《B?2》って人が、信用できない」

この期に及んで文句を言うのは、時間の無駄であるし、無意味であるのも分かっている。

口をつけて出てしまった文句の納めどころに迷いつつ、奥平を見据え歯を食いしばった

晃に、奥平は「ふむ」と唸って、胡麻塩の顎髭を撫でた。

「私は、真樹区の、崩れかけた野外ステージで歌う君を、ずっと見てきた。君の歌には、

いや、『声』には、人々を強烈に惹き付ける何かがある。その何かとは??ひとつには、

君の誠実な人柄なのだろうと、私は分析している。君は頑固で勝ち気だが、根は正直で素

直だ。正義感も強い。だからこそ《B?2》や赤嶺くんの言動に、反発を感じるんだろう」

「どうだね? というように目を覗き込まれ、晃は返す言葉に詰まった。奥平は、晃が自

分について常々思っている心情を、見事に言い当てた。

更に、赤嶺三等官と《B?2》に感じている、不信感の根本も。

奥平は不意に苦笑すると、戸惑う晃から視線を外した。

「そうだな……。私も、今この状況下で言うべきではないことを、言ってしまったっているね」

「大丈夫です、先生。晃くんは、やるべきことは全て、理解しています」

笠井三等官の平板な声が、晃を擁護する。意外に思っ振り向く晃に、笠井三等官は無

表情で頷いて見せた。

「時計を見せてくれないか？」と、奥平は唐突に晃に頼んだ。何だろう、と思いつつ、晃

は腰のベルト・チェーンで下げている時計を、黒の合皮パンツのポケットから引き出す。

奥平は、晃から渡された時計を手に取った。楠の枝の間から漏れる街灯の明かりに照らし、時刻を確認する。

「そろそろだな。余興のクライマックスまで」

奥平は、にやっ、と口角を引き上げた。どう見てもくたびれた老人でしかない奥平なの

に、いたずらを企んでいる子供のような笑顔は、きらきらとして見えた。いったい何が始

まるのか？ 鼓動が早まり、「何が、始まるんすか？」と、恐る恐る、晃は奥平に訊ねた。

「『打ち上げ花火』だよ」と、奥平はいたずら小僧の顔のまま、告げた。

「だが、とても大事な花火だ」

「仕掛け物の作動は、やはりA隊ですか？」

笠井三等官が、感情の入らない声を潜めて、奥平に訊ねた。

「保安官たちが、うまく陽動に乗ってくればいいんだがねえ。駄目な場合には、八木く

んたちD隊に援護を頼む段取りになっているよ。??君たちは、通用品口に並んだあの保安

官たちが動き出したら、中へ駆け込みなさい。入ったら、右側の壁の扉を抜けて、廊下を

ひたすら進めば、正面玄関のアトリウムへ出られる。センタービルは、入る場合は、アト

リウムを通らないと、どこの階にも行けない厄介な構造になっているんでね」

奥平が苦笑混じりに答えた直後に、巨大な光の炸裂が、センターの正面門の方角で起こった。

続いて、地を揺する轟音が、晃たちの耳を襲う。

裏門からは見えるわけがないのだが、晃たちは、思わず正面門の方向を振り返る。

「何なんですか？ あの光は？」浅野が、半ば驚き、半ば楽しそうに奥平に訊ねた。

奥平は「本当に花火だよ」と、親指を立て、おどけたジェスチャー付きで返した。

そんな奥平の態度に、浅野は呆れた顔になる。

再び正門方向から光が上がる。間違いなく、花火のようである。

白い光ばかりでなく、

上部には、赤や青の色がちらほらと見える。

作戦通り、裏門を警護していた保安官たちが動き出した。互いに何かを確認し合う仕草

をしたあと、保安官たちが、裏門を離れる。

「たかが花火でも、爆発物は爆発物。地上で炸裂すれば、怪我人も出る。とにかく、うまく行ったようだね」

楽しげに笑う奥平が先頭になり、晃たちは、そろそろと木陰から出る。

「裏門のロックの解除番号は、ここに記してある」

奥平が、外套の右ポケットから紙片を取り出し、浅野に渡した。

「ここから先は、君たちの力だけが頼りだ。私たちは、周囲から援護するしかできない。

通用口からアトリウムまでの廊下には、隠れられる部屋は一切ない。

《B?2》は、保安

官や尋香はその辺りには配置されないように工夫したと言っていた

が、予定は変更される

こともある。気を引き締めておきなさい」

晃は、奥平の言葉をしっかりと頭に叩き込み、黙って頷く。

「行きます」という笠井三等官の言葉を合図に、晃と浅野、笠井三等官は走り出した。

裏門を照らす街灯の中へ、三人は躍り出る。残っていた二人の保安官が晃たちに気付く

より先に、笠井三等官が荷電粒子銃を発射した。

小銃から発射された閃光は、狙い違わず二人の保安官の喉を焼いて貫通する。

笠井三等官の、あまりの射撃の腕の良さに、晃は驚愕した。束の間、その場に立ち尽くす。

ぼかん、と、口を開けて突っ立っていた晃を、笠井三等官が振り返った。

「何をしているのです？ 急ぎますよ」

先に行った浅野が、紙片の解除番号を見ながら、門の脇に取り付けられた小型のキーボードを叩く。程なくキーボードの上の小さな液晶画面に『解除』の文字が点灯した。

笠井三等官が、裏門の扉を引き開ける。素早く中へと滑り込む笠井三等官に従いて、晃と浅野も門内に入る。

通用口のすぐ手前で、呼吸困難で息絶えた保安官を見下ろし、晃は申し訳なく思った。

仰向いた顔は、黒いフルフェイス・ヘルメットに隠されていて、表情は分からない。

無念だったろうと、晃は想像する。こんな争いさえ起こらなければ、この二人の保安官は死ぬことはなかった。晃も、この保安官たちとは出会わなかったか、もつとよい出会い方をしたかもしれない。

センターが、晃たち市民を実験体としか見なさない態度を探らなければ。更に、レリア

・ウイルスなどという『悪魔』が、この世界に蔓延しなければ。

人間が、オオトゲアレチウリという怪物を、深い森の闇から引き出さなければ？

だが、過去は決して覆らない。晃たちは、先の時間へ進むしかない。今、自分たちがし

ている行為が、もっと先の未来に、きっと光をもたらすように、信じるしかない。

浅野が、通用口の扉の前で「早くっ」と、手招きしていた。

晃は、悪夢のような『過去』を振り切るべく、二人の保安官の遺体から目を逸らし、歩き出した。

「何してたんだ？ 早くしないと、正門へ行つた連中が戻って来ちゃうよ！」

少々苛立つた口調の浅野に、晃は「悪い」と謝る。外套の内ポケットから、奥平から預

かったカードキーを取り出す。

大型の貨物用エアカーがすんなりと格納される大きさの通用口の右端に、カードキー・

ボックスの付いた生体認証のセキュリティ・ボックスが取り付けられている。

「カードキーを読み取った後、生体認証セキュリティ・ボックスが作動を始める仕組みです」

晃は、淡々と説明する笠井三等官の隣に立つと、カードキーをボックスの差し込み口に挿入した。

音もなくカードキーがボックスの中へと吸い込まれ、一秒経つか経たないかで、吐き出

された。程なく、生体認証ボックスのモニターが立ち上がった。

女性の声に似せた音声ガイドが、生体認証を要求してくる。晃は、本当に認証されるの

か、不安な気持ちのまま、右手のひらをモニターに押し付けた。奥平がいった通り『B？』

2』が予め晃の生体認証をシステムに登録していれば、何事もなく認証されるはずだ。

音声ガイドは、すぐに『認証しました』と返した。虹彩認証も同様に、問題なく認証さ

れた。晃は、胸を撫で下ろした。

ほっとしたのは、晃だけではなかった。脇で見守っていた浅野が、小さな声で「よしっ」

と気合いを入れ、拳を握った。

笠井三等官が、ボックスの赤いボタンを押す。通用口の、ファイブ・セラミックス製の

オーバー・スライディング・ドアが、ゆっくりと持ち上がっていく。

大きく口を開けた通用口の中は、大型台車が三台、奥に並べられている以外は、何もな

かった。晃たちは、奥平に教えられた通り、淡いLEDライトが数カ所灯る構内の、右側の壁の扉を開けた。

二・五メートルほどの幅の廊下は、障害物もなく、左へ真っすぐが続いている。

「向こう側から敵が入ってきたら、おしまいな」

規則正しく並んだ直管型のLEDライトを仰ぎ見ながら、浅野が低く呟いた。晃は、敵

が反対側からやって来ないことを祈りながら、廊下に飛び出した。

この疾走が最後ではない。まだまだ先がある。だが、晃は速度を落とそうとは思わなかった。

長時間の行軍に加え、敵の襲撃で転び、あちこち打ち身を作った体は、もう限界だと悲鳴を上げている。それでも、晃はあらん限りの力で走った。

あともう少力でコリンに会える。もう少力で、美鈴の遺体の謎が解ける。コリンと美鈴の関係が分かる。そう思うだけで、疲労を押し退けるほど、心が躍った。

向かっている先の扉から敵が入ってくることもなく、晃と浅野、笠井三等官は、五百メ

ートル以上はあると思われる長い廊下を、走り抜けた。

晃は次の入口に辿り着くと、扉の左脇に取り付けられたセキユリティー・ボックスに飛

び付いた。生体認証の作動の遅さにいらいらしながら、扉を開ける。

認証が済み、開いた扉からすぐにアトリウムへと飛び出ようとした晃の腕を、笠井三等官が掴んで止めた。

「お待ちなさい！ 敵がアトリウムに詰めていたら、危険です！」
常でない強い声が、晃のうわついた気持ちに冷や水を掛けた。たたらを踏んだ晃は、恥ずかしさに、かつ、と全身が熱くなる。

「自分が先に、向こう側を確認します。安全でしたら、お二人に入っていたできます」

有無を言わせぬ姿勢で、笠井三等官は晃を扉の前から排除した。
晃と浅野に、扉の脇の壁に体をぴったり寄せようジェスチャーで指示すると、笠井三等官は荷電粒子銃を構えた。自身も壁に身を預けて隠れながら、扉をそつと開ける。

素早く扉の向こう側を覗き見た笠井三等官は、晃たちを振り返った。

「敵はいません。入ります」密やかに告げるのとほぼ同時に、笠井三等官が扉の中へと滑り込む。晃と浅野も、用心しつつ入った。

センタービルのアトリウムは、五階までの吹き抜けになっている。天井と、四方の壁面

は、建設構造用の特殊炭素合金の骨組みを籠目状に組み合わせ、その間に透明な特殊加工アクリル板を嵌めている。

床から二メートルの辺りに設置された、可動式LEDアップライトの光を受け、特殊コーティングされたアクリル板と炭素合金が、水色に輝いていた。

可動式のライトがゆっくりと回転するに連れて、アトリウム全体が水色から茜色に変わ

る。

晃は、幼い日に美鈴と見た、夕日に染まるセンタービルを思い出した。

晃たちの住んでいた場所からは、このアトリウムは他の建造物の陰になって、見るこ

はできなかった。だが、懐かしいあの日の光景の主演は、紛れもなく、今こうして自分が

いるビルなのだ。

いにしえの都への憧れと賞賛を胸に見詰めていた建造物は、現在、晃にとって疑惑と憎

悪の対象になっている。それでも、ここに全ての疑問の答がある。

もうちょっと待ってる、と、晃は、心の中で微笑む美鈴に向かって囁いた。

「《B?2》の指定した監視カメラって、あそこのカメラじゃないのか？」

浅野の指摘に、晃は慌てて振り向いた。

正面玄関への通路を背にすれば左側になる、晃たちに近い壁の上方に、小型の監視カメラ

ラがあった。他に監視カメラは二台、正面玄関を背にして真正面の、二機のエレベーターの上に取り付けられている。

「壁の、というと、あれだけですな」

笠井三等官が冷静な態度で、壁の監視カメラの撮影範囲へと歩いていく。浅野も後に続く。

晃も二人の横に寄り、監視カメラを見上げた。アクリル板と骨組みの合金の反射光に鈍

く光るレンズの向こうから、《B?2》という、得体の知れない人物が自分たちを見ているのかと思うと、何やら薄気味悪くも感じる。

脇に立つ笠井三等官が、軽く二度、頷くと、突然、二機あるエレベーターの左の一機の扉が開いた。

「乗れ、ということでしょう」と、笠井三等官は、躊躇なく左右に開いた扉の中へ踏み込む。

晃は「大丈夫なのか？」という言葉を読み込んで、笠井三等官に従った。晃たちが乗り込むと、扉が静かに閉まった。

『お待ちしていました』という、明らかに人工的な、女声に似せた機械音声が、天井のスピーカーから流れた。

待っていた、というからには、この声の主は《B?2》なのだろう。

普通、緊急用のマイクでやり取りすれば、互いの声は電話の声とほぼ同様に聞こえるはずである。なのに、なぜ《B?2》の声は機械音声のように聞こえるのか？

もしかこれが《B?2》の肉声なのか？ それとも、肉声を聞かれないがために、わざと音声を加工しているのか？

無機質な音声の不自然さに、晃は不信感を抱く。

「どうして、自分の声で話さないんだ？ あんた、本当に《B?2》なのか？」

やはり《B?2》は、センター側の人間で、自分たちはまんまと罠に嵌まったのか？

どこからかモニターで自分たちを見ているのであろう《B?2》を睨み付けるつもりで、晃は監視カメラを見上げる。

ややあって、再びスピーカーから声が流れた。

『声に関しては、事情があり、お会いした際にお話しします。エレベーターは、地下一階までですので、地下一階のエレベーター・ホールでお待ちしております』

音声が終わらないうちに、すつ、とエレベーターが動き出した。一分も経たず下降は終わり、閉じた時と同様、音もなくエレベーターの扉が開く。

晃は、アトリウムへ入る時のこともあり、反射的に壁際に体を寄せた。

同じことを考えたらしい浅野も、反対側の壁に体を寄せた。

が、笠井三等官は、身構えもせず、平然と扉の中央に立ち、エレベーター・ホールを見渡している。

笠井三等官の様子に、大丈夫なのかと、晃はこわごわ首を伸ばし、エレベーター・ホールを見た。

三メートル四方ほどの地下一階のエレベーターホールには、警戒した保安官や尋香の姿は見当たらなかった。代わりに、白いウェット・スーツ型の防護服を着た女性が一人、立っていた。

一見して、女性は武器らしきものは携帯していない。研究員のようだ。

が、一つ奇妙なところがあった。顔の真ん中から上、額までを、不透過の黒色スクリーン・グラスで覆っているのだ。

武器を携帯していなくとも、顔を隠しているという時点で、十分に怪しい。

晃は、女性に対し不信感を募らせる。晃とは反対に、真正面から対峙している笠井三等

官は、至って落ち着いた態度で女性に尋ねた。

「あなたが《B?2》ですか？」女性は、ゆっくりと頷いた。

『お待ちしていました』と言った声音は、先程の機械音声と全く同じである。しかも、唇が全く動いていない。

どうなっているのか、と驚き、晃は身を乗り出す。

半身、エレベーターの扉口から乗り出した晃に気が付いた《B?

2》が、ややぎこちな

い動きで、晃に顔を向けた。目線の分からないスクリーン・グラスの顔に『直視』され、

晃は思わずぞつとする。

『???私の声が耳障りなのは、本当に申し訳ありません。ある事情で、声帯を失ってしま

いましたので、この装着型マイクロ・バイオ・コンピュータで脳波を測定し、スピーカーを振動させて、音声にしています』

音は機械的なのに、よく聞くと《B?2》の話し方には、人らしい抑揚がある。逆に

「そうですね」と返した笠井三等官の言葉には、肉声なのだが感情の起伏がなく、平板である。

二人の相違に気が付いて、晃は奇妙な気分になった。

『みなさんを、これから地下二階のメイン・コンピュータ・ルームにご案内します。どうぞ』

《B?2》が、くるりと背中を向けた。後頭部の高い位置で一つに束ねた黒髪が、ふわり、と揺れる。

瞬間、《B?2》の髪の中に、装着型マイクロ・バイオ・コンピュータから伸びた幾本もの細い管が潜り込んでいるのが見えた。

脳に直結しているコンピュータは、声帯の機能を補っているだけではないだろう。

なぜ、このような状態になったのか、との問いが頭を過った。だが、今は尋ねるべきではないと思い、晃は脳裏の質問は打ち消した。

歩き出した《B?2》に従って、笠井三等官も動き出す。多少の不安と疑問があるが、とりあえず前へ進むしかない、と決めて、晃も《B?2》の後を追った。

エレベーター・ホールから出ると、《B?2》は左右二つの通路の、左へと入った。

通路は、左にゆっくりと湾曲していた。左側の壁は透明な強化アクリル板が一面に張られている。

アクリル板を通して見える光景に、晃は息を飲んだ。

地下一階から二階を抜いて造られた広いワンフロアの室内の中央に据えられているのは、

巨大なメガ・バイオ・コンピュータである。

乳白色の強化ナノ・セラミックで覆われた円筒形のマシンは、見た限り、直径二十メー

トルはある。晃が知る限りのコンピュータの規模を遙かに凌駕している。

中奥区立大学のメイン・コンピュータも、世界のメガ・バイオ・コンピュータの五指に

入ると言われているが、それでも免疫センターのマシンの半分ほどの大きさでしかない。

異常な大きさである。確かに、塔経市中、いや、世界中の生物の研究情報を処理するた

めには、これくらいの規模でなければならぬのかもしれない。

晃の隣を歩く浅野が、やや興奮ぎみに呟いた。

「凄い……。これだけの規模のマシンが、なんで世に知られてないのかなあ？」

首を捻っている浅野に、足早に進む《B?2》のすぐ後ろを歩いていた笠井三等官が、あつさり「免疫センターのメイン・コンピュータだからですよ」と、説明した。

「ああ、そうか」浅野は、得心した顔で頷いた。

「公式、非公式の膨大なデータの詰まったコンピュータですものね。桁外れに大きいというだけで、外部に興味を持たれ、見学したいなどと申し込まれても、確かに面倒だ」

各重要機関などのメイン・コンピュータは、通常、公安のメイン・コンピュータと同様、外部からのデータの改竄や盗難を防ぐために、直接ネットワークに接続はしていない。

さらに、免疫センターに恨みを抱く者は多い。設置場所が知られて、侵入者にシステムへの危害を加えられることを恐れ、公開しないのだろう、と晃は思った。

晃たちも、システムに危害は加えないが、中身を盗み見るだけで立派な不法侵入者である。

程なく通路が終わり、防火扉の向こう側に階段が現れた。淡いLEDライトの照明が、十段ほど下りた踊り場の象牙色の床面を照らしている。階段を下り切ると、眼前にメイン

・コンピュータ・ルームの扉が現れた。ふと、晃は背後を振り返った。

階段には、踊り場と一番下の段の左上に、監視カメラが取り付けられている。この二台

の監視カメラも、《B?2》のセキュリティー・システム操作により、センターの他の人

間に晃たちの侵入が見られないよう、オフにしてあるはずである。

しかし晃は、なぜか階段のこの二台のカメラが、生きているように思えた。

誰かが、自分たちをじつと監視している。というか、ここへ来る道程を、監視カメラの

向こう側の誰かに、ずつと誘導されていたような気がする。

そもそもビル内に入ってから眼前のコンピュータ・ルームに来るまで、《B?2》が工

作してくれているとはいえ、見事に全く敵に遭遇しないのが妙だ。

晃は俄に、ぞつ、と総毛立った。頭の中に『危険』という赤いシグナルが点滅する。

公安や中央官庁を牛耳り、違法な拉致や人体実験を隠してきた免疫センターが、簡単に

不法侵入を許すはずがない。

明らかに、免疫センターは晃たちを罠に誘い込んでいる。

《B?2》が、コンピュータ・ルームの扉のロックを解除した。晃の頭中のシグナルが、

一層ちかちかと忙しく明滅する。

どうにか抜けられそうな粗さの罠であれば、敢えて乗ってもいいだろう。しかし、目が

細かく複雑に細工された罠に、果たして自ら飛び込むべきか？

抜け出せなければ、皆の期待も、今までの努力も辛抱も、全て水の泡である。

晃の中で答が出た。

「入ったら、危険だ」晃は、体半分ほど自分を追い越していた浅野の肩を掴んだ。

浅野は驚いて振り返る。

「なんで？ なにかあった？」

「この罨は、危険すぎる。入ったら、俺たちは絶対に抜け出せなくなる」

真剣に引き止める晃に向かって、浅野は柔らかく笑んだ。

「ここまできたら、危険はどうしようもないよ。今、目の前のコンピュータ・フロアのドアを開けて、もし敵が飛び出してきても、どう見回しても隠れられる場所なんか全然ない。

だから、俺らには逃げようがないし。??覚悟、固めたんじゃないの?」

「覚悟は、した。でも……」

どう話したら、分かってもらえるのか。怖じ気づいたわけではない。

確かに、機会は、これ一度きりなのかもしれない。

やっとこじ開けた扉は、ここで手を離せば再び閉じてしまい、次には、より堅く閉ざさ

れ、二度と開かないだろう。だからこそ、しくじってはいけない。しくじれない。

しかし、真実を掴んでも自分たちが囚われたのでは、意味がない。「言いたいことは、何となく分かるよ」と、浅野は真顔になった。

「ここまでの道程が、あまりに順調すぎておかしいって、日野は感じてるんだろ? それ

は、俺も同じだ。でも、俺は何か大丈夫な気がするんだ。日野も俺も、コリンに出会って

から大変な事柄に直面している割には、運がいいことに、怪我もほとんどないし」

「そんな、気だけじゃ危険すぎるだろう!」

晃は、思わず声を荒げてしまった。麻生たち《羽化しても生き残った人》や、美鈴の遺

体に対するセンターの仕打ちを考えれば、人を殺めるのに躊躇などしないのは明白だ。

晃の声の大きさに、扉の向こうへ入っていた《B?2》と笠井三等官が、何事かと戻ってきた。

「どうしたのですか？」と、二人を交互に見遣るサイボーグ保安官の、感情の表れない顔

を一瞥して「何でもないです」と答えると、晃は強い思いで浅野を振り返った。

「引き返そう。今なら多分、まだ罠から逃げられる、と思う」

「やはり、勘のいい獲物は罠に掛かりづらいようだ」

突然、頭上から男の声が響いた。晃は驚いて真上を振り仰ぐ。遙か上方の天井は、白い

壁紙が貼られているだけに見える。が、ホワイト・ウインド風のミニージャック・パプで取

り付けている、埋め込み型の壁面スピーカーが設置されているらしい。

「完全に釣り込めなかったが、ここまでなら充分だ」

僅かに笑いを含んだ声に、晃は完全に自分たちが罠の網の奥に嵌まり込んだことを悟った。

「逃げろ！」と晃が叫ぶのと、前後の扉が完全にロックされるのが重なる。《B?2》が、

再びロックされたメイン・コンピュータ・ルームの扉に取り付く。

その刹那、晃たちが閉じ込められた空間に、白いガス状のものが立ち込めてきた。

「催眠作用のあるガスです。吸い込まないよう……」

笠井三等官の忠告も空しく、晃は目一杯ガスを吸い込んでしまった。たちまち目が回り、膝が崩れる。

「わい???!」という、《B?2》の奇妙な叫び声を最後に聞いて、晃の意識は途切れた。

……遠くから、音が聞こえる。

晃は、真樹区の崩れ掛けた野外ステージに立って、ぐるりと周囲を見回す。風が晃の周りを、踊るように巡っている。

早春の、まだ冷たい風に乗って流れてくる音楽は、どうやらニューエイジ・ミュージックのようだ。

でも、ドラムビートだけが強く聞こえ、メロディがはっきりしない。曲は何だろう???

と、晃は耳を澄ます。

徐々に、メロディがはっきりしてくる。曲は、スカイボーイの『風のように』だった。

この曲は、スカイボーイの四枚目のアルバムに入っている、晃は、『空を飛ぶ』の次に

『風のように』が好きだった。アデル杉山も、同じ『風のように』を歌っている。シングルカットもしたはずだ。

晃は、自然と体でリズムを刻む。

低音から始まる『風のように』は、終盤になるとかなりな高音になる。晃は、目を瞑り、

頭の中でスカイボーイと一緒に歌う。聞こえているメロディが、『空を飛ぶ』に変わった。

自分の口から、いつの間にか『空を飛ぶ』の旋律が流れているのに驚いて、晃は目を開けた。

と、眼前に美鈴が立っていた。

鴻女子大付属女子高校の、紺地の胸元に白いバラが刺繍されたウ

エスト丈の上着と、同色の細い車襷のスカートを履いた美鈴は、二つに結んだ長い髪を振って、首をやや左に傾ける。

「晃兄ちゃんのほうが、アデル杉山より上手だよ！」
につこり笑う美鈴の、いつもと変わらぬ笑顔と仕草に、晃はほつと安心する。

ああ、なんだ、美鈴は生きているじゃないか。事故で死んだなんて、誰がそんな、途方もない嘘を言ったんだ？

美鈴が「もつと歌って」と、晃の手を取る。妹の手は、恐ろしく冷たい。その冷たさが、晃に愕然と現実を思い出させた。

?? 違う。美鈴は死んだんだ。

一年前に間違いなく、エアカーの事故で。晃は、美鈴の遺体を見た。切り刻まれ、粗大ゴミ用パックに入れられた、美鈴の遺体を。

血塗れの、内臓を全て抜かれて、申し訳にもならない僅かなぼろを詰め込まれた、ぺちやんこになった体を、母親と晃が絞ったタオルで綺麗に拭いた。事故で切断された両脚の、骨と筋が飛び出した部分を、次兄と三番目の兄が布で覆い、美鈴が髪を結ぶのに使っていたリボンでそれぞれ縛った。

大事に着ていた、お気に入りの水色のワンピースを着せ、棺に移した美鈴の体は、驚く程に軽かった。晃は、あまりに悔しくて、棺の縁を力一杯ぎゅっと強く握りしめた。

美鈴は、死んでいる。では、今、目の前にいるのは、誰なんだ？

晃は、半ば恐怖におののきながら、口を開いた。

「おまえは、誰だ？」

「美鈴よ」と、美鈴の姿をした《誰か》が答えた。と同時に《誰か》の形が変形する。

ぐにやり……と、粘土細工を壊すように《誰か》が、ひしゃげる。全身から鮮血が迸り、晃の足下に、見るみる血の池を作る。

晃は叫んだ。恐ろしさと悲しさが胸を占め、両手で長い髪を掻き毟りながら、目を見開いて妹の名を叫んだ。

その間も、美鈴の姿の《誰か》は潰れ続ける。潰れながら《誰か》は、けらけらと、け

たたましい笑い声を上げていた。笑い声を止めさせたくて、晃は更に、喉が焼けるように痛むまで叫んだ？

気が付くと、晃の目は、ぼんやりとした明かりを見ていた。

背中に硬いものが当たっていた。硬いものが床面である現実を理解するのに、数十秒も掛かった。

晃は、どこか見知らぬ部屋の床に、仰向け状態で転がっていた。

頭が朦朧としていた。しばらくして、明かりの正体は、天井から下げられた球形のLEDペンダント・ライトであると分かった。

晃の寝転がっている床面から、やや黄味掛かった淡光を放つ丸いライトまでの距離は、

凡そ二メートル。LEDライトは、構造上、上部が暗くなる。それから推察しても、ここ
の天井は免疫センターのメイン・コンピュータ・ルームの天井よりは、ぐっと低いことになる。

免疫センターの、メイン・コンピュータ・ルーム。その言葉を思い浮かべた途端、晃の目が覚めた。

そうだ、自分は免疫センターのメイン・コンピュータ・ルームへ向かっていたのだ。浅

野と笠井三等官、それに《B?2》と一緒に。

他の者たちは、ここにいるのか？ 確かめようと、晃は急いで上半身を起こした。ぐらり、と景色が回った。まだ、先刻の催眠ガスの影響が残っている。

先程の奇妙な夢も、ガスのせいだろう。潰れていく美鈴に似た何者かの姿を思い出して
気分が悪くなった晃は、まだ覚醒しきっていない頭を両手で抱え、前屈みに上体を折る。

刹那、替えがなく、履き過ぎてぼろぼろになった革のブーツの先端に衝撃がした。

ばちっ、という、炒り豆が爆ぜるような音に驚いて、晃は顔を上

げた。

靴先を見る。僅かに黒く合皮が焦げている。足先には何の支障もないが、一体何に触れて起きた衝撃なのか、と足先を覗くと、数ミリの場所に、青く光る細い線が見えた。

晃には爪先の線が、荷電粒子によって描かれていると、瞬時に分かった。線は円を描いて、晃の周囲をぐるりと囲んでいる。

直径は二メートルほどである。靴の先が触れてショートした強さから、まともに体が線に当たれば、火傷か、下手をすればショック死し兼ねない量の荷電粒子が張り巡らされていると判断できる。

どうやら、この線は『檻』らしい。

晃を『檻』に入れたのは、間違いなく免疫センターの人間だ。この場所も、免疫センタービルの一室だろう。

床面に放電口がないことから推測して、放電口は上であろうと思いい、晃はもう一度じっくり天井を見上げた。

ペンダント・ライトの淡い光が邪魔になり、天井そのものがよく見えない。そこで初めて、晃は自分の推測が間違っているのに気が付いた。

天井が低ければ、床に反射したペンダント・ライトの光で、ぼんやりとでも天井の造形は見える筈である。天井が見えないのは、ライトのコードが、思った以上に長いのだ。床から二メートル程の高さの照明の光が全く届かないくらい、この部屋の天井は高い。

その上、広い。ペンダント・ライトの光は、確かに淡いものだが、

それでも晃の服や靴

を充分はつきりと見せている。

にも関わらず、荷電粒子の檻の先に何かがあるのか、ほとんど見えない。ぼんやりと分かる、床から上へと伸びた、幾本もの細長い棒状の物体も、上部に半

円形の水槽らしきもの

を載せていると分かるだけで、中身までは、はつきりしない。

見えないのなら、と、晃は耳を澄ます。しかし、聞こえるのはほんの微かなモーターら

しき機械音と、こぼこぼという、水槽内にエアポンプが空気を送るような音のみである。

人声も、靴音も、何一つしない。

薄闇に包まれた、動き回るのも制限された場所で、晃が得られた情報は、このただっ広

い室内に、恐らく自分一人だけが閉じ込められている、という現実だった。

誰か近くにいれば、晃と同じく『檻』に入れられた状況でも、気配で話し掛けてくるはずだ。

「みんな、どこにいるんだ……？」

生きているのか、それとも、殺されてしまったのか？

襲いくる不安に気持ちが挫けそうになり、晃はぎゅっ、と下唇を噛み締める。

突如、目の前に一人の男の3Dレーザー・ディスプレイが現れた。青緑の、体にぴった

りフィットしたドクタースーツを着た男は、神経質そうな切れ長の目で晃を見ると、薄い

唇の右端を持ち上げる。

「やっとお目覚めのようだね、日野晃くん」

年齢は、晃より三つ四歳は上に見えた。細面の顔には、どこかしらで見た覚えがある。

だが、思い出せない。しかし、声は、はっきりと覚えている。先刻晃たちのいたメイン

・コンピュータ・ルームの前室に、催眠ガスを撒くように指示した男の声だ。

晃は、本当にこの部屋の床に立っているが如く眼前に立つ、等身大の3Dレーザー・デ

ィスプレイの男に、激しい嫌悪を感じた。

「他のみんなを、どうした？ まさか、殺したんじゃないだろうか？」

低く唸るように、晃は詰問した。男は「おやおや」と、わざとらしく肩を竦める。

「初対面の会話の端緒は、お互いに名乗り合うのではないのかな？ 僕の名を尋ねる前に、

仲間の安否を尋ねるとは。余程こちらに信用がないようだね？」

余裕ある態度で晃を揶揄する男を、晃はむかっとして睨み付ける。

「あんたの名前なんか、聞きたくもないし、どうでもいい。俺が知りたいのは、浅野と笠井さんがどうなったのか、ってことだっ！」

「ははは、正直じゃあないな、晃くんは。本当に一番知りたいのは、妹の美鈴ちゃんの内臓の行方だろう？」

なるほど、全て調査が済んでいる訳か。

晃は向かつ腹を立てている割には、頭の隅で冷静に考えた。こういう思考の使い方ができるようになったのも、何かとっては、どやしつけてくれた八木のお陰かもしれない。

男の嫌味な笑い顔を睨んだまま、晃は声を落とし、答える。

「妹のことも、確かに知りたい。でも、今は生きている仲間の安否のほうが、大事だ」

「仲間……ねえ」男は、嘲りを深め、くるりと晃に背を向けた。

「やはり、物事は順序に従って進めよう。まず、僕が何者なのかを名乗らせてもらおう。」

「?? 僕は、柳沢聡哉。細菌・ウイルス学博士で、塔経市中奥区立大学客員教授。また、免

疫学と脳科学、生物情報学でも博士号を持っている。ああそれと、法医学者でもある。現

在の主な職務は、免疫センターの副所長」

では、この男が、赤嶺三等官の言っていた、《柳沢副所長》か。

二十五、六の若さで五つの博士号と、名門大学の客員教授とは、並大抵の天才ではない。

ずば抜けた能力で若くして高位を得た、中央の衆目を集める人物、というわけか。

世界が閉塞し、人々の気持ちも荒廃している現代。野心もバイタリティーも頭脳もある

若者に、公安の上層部や中央の高級官吏が現状打破の期待を寄せ、柳原に過剰な権利を与えたのも頷ける。

だが、天才だからといって、何をしてもよい訳ではない。特に、人の心を踏み躪り、人を人とも思わぬような所行を繰り返しているのは、許せない。

晃は、《奇跡の羽根》への裏切りを吐露した時の、赤嶺三等官の悲痛な表情を思い出し、眼前の柳沢に対し、ますます嫌悪を募らせた。

おまえの話など聞いてやるものか、という態度をあからさまにするために、晃は片膝を立て、

立て、そっぽを向いて質問を繰り返した。

「浅野と、笠井さんは、どこだ？」

「ほう。僕の肩書きに驚かないとは。君は、中々の変人だね？」

本当に驚いた、といった表情で、柳原は?? 正確には、柳原の3Dレーザー・ディスプレイ

レイは、晃の顔を覗き込んでくる。

何なんだ、この男は?? と、晃は呆れ返った。

柳原は、自分が他人よりも優れている事実を挙げ連ね、どうだとはばかりに踏んぞり返り、

相手が賞賛するのを当たり前に思っている。

晃は、自分も随分と子供っぽい性格だと自覚しているが、柳原ほど恥知らずではない。

柳原は、勉強はできるが、躰の全くなっていない小学校低学年の児童と大差ない。

こんな、人としての程度の低い人間に、晃も浅野も、他の仲間も、傷付けられ、振り回

されたのだと思うと、晃は猛烈にやり切れない気分になった。

怒りを通り越し、もうどうでもいいという気持ちになり、晃はがつくり頂垂れた。

晃の態度をどう見たのか、柳原はふん、と露骨に鼻を鳴らした。

「反応の薄い人間は、つまらないね。……まあいい。本題に入るとしようか？」

唐突に周囲が明るくなった。照明の量が増えたのに気付き、晃は何事かと顔を上げる。

眼前に平面ディスプレイが展開されていた。縦が二メートル、横

が四メートル程もある

大型ディスプレイには、現在のものらしい免疫センターの表の様子が映し出されている。

尋香たちが《奇跡の羽根》のメンバーと思しき長い外套を着た人々と、戦闘用の上下濃

灰色の防弾ウェアにフルフェイス・ヘルメットを着用した、公安特殊警邏隊の隊員を相手に戦っている。

「随分と君の『仲間』は、苦戦しているようだね」

確かに、特殊警邏隊員も《羽化しても生き残った人》たちも、尋香の動きについて行けず、後退を余儀なくされているように見える。

センタービルの正面玄関の、煌々と照らされたLEDライトの中に浮かぶ敵味方の攻防

戦も気になったが、それよりも晃の意識を引き付けたのは、平面ディスプレイの明かりに照らされた、この部屋の様相だった。

スクリーンを使用しない光ディスプレイを透かして見えたのは、先程までは形がはつき

りとしなかった、細長い金属棒の上に載った、水槽の中身だった。

中身は、人の脳だった。一つの水槽に一つずつ入れられている脳には、水槽表面に取り

付けられた合成ゴムチューブから中へと伸びた金属の針が、何本も刺さっている。

晃は、脳に刺さった細い金属針から水槽上部のチューブへ、逆に視線を辿る。チューブ

は、天井に近い場所に走っている太い合成ゴムチューブの中へと、引き込まれていた。

また、支柱の金属棒からもチューブが水槽内へ伸びており、脳に

取り付けられていた。

晃がディスプレイを透かして見える範囲だけでも、六本の金属棒が聳えている。六人分の脳が、それぞれの水槽に入っているのだ。

晃は、驚愕を禁じ得なかった。

通常、メガ・バイオ・コンピュータの中央演算には、人工タンパクが使用される。人間の脳細胞と同じように、細胞単位でDNA塩基での情報処理を行い、細胞間の伝達を伝達物質で行うよう、設計されている。

人間の脳を模しているのだから、いつそ人の脳を使用すれば仕事が早いのは、紛れもない事実だ。脳だけを生かす技術が、ない訳でもない。

だが、本当に人間の脳を取り出し、バイオ・コンピュータと化してしまうなど、常識ある科学者なら絶対に考えない。マッド・サイエンティストの所業だ。

晃がディスプレイでなく、水槽を見詰めているのに気付いた柳原が、細い眉を吊り上げ、不機嫌そうに肩を反らした。

「ただのブレイン・メガ・コンピュータ・システムに、そんなに興味があるのか？」

柳原の傲慢な言い方が、どうにも癪に障った。晃は、柳原の尊大な表情を、思い切り睨み上げた。

「何だい、恐い顔をして？ 珍しいものでもあるまい？ この世界は資源が少ないのだから、使えるものは何でも再利用する。当たり前じゃないのかな？」

柳原は、むしろ驚く晃が珍しいとばかりに、首を傾げる。

柳原の言う通り、この世界には資源がない。オオトゲアレチウリに支配された地上から、昔のように無機物資源を人間が無尽蔵に掘り出すことは、もはや叶わない。人間は、廃棄したものを極力再利用し、数少ない採掘場所からは、枯渴を防ぐため制限をかけ資源を確保している。

ほぼ全ての有機物、無機物を再利用して暮らしている。しかし、人間も『リサイクル』

しようと考えるのは、免疫センターくらいだろう。免疫センターの人間は、柳沢を含め、完全に人としての感覚が狂っているとしか思えない。

晃は、猛烈な吐き気がした。

『人も獣も植物も、有機体は全部、ただの実験対象物だ』と語った麻生の言葉が、眼前に

現実として見えている。

再利用、という柳原の言葉から、どういう人間たちがブレイン・メガ・コンピュータ・シ

ステムに組み込まれたのか、晃には想像がついた。

ならば生前に本人たちが、ブレイン・メガ・コンピュータ・システムの一部になると意思表示している可能性は、皆無だろう。

「もしかして、このコンピュータは、あんたたちが拉致した人たちのなのか？」

答はわかっていたが、敢えて尋ねた晃に、柳原は面倒くさそうに、「そうだよ。実験体として捕獲した連中だよ。必要なのは、体のほうだったんだけど、メ

イン・コンピュータの容量が足りなくなっただけ。ちょうど良いから実験体の脳を計算機

にして、メイン・コンピュータを外付けハード・ディスクにしたんだ」と、返した。

晃の中の怒りのボルテージが、かっと上がる。床を思い切り両手で叩き、怒鳴った。

「あんた！ それでも人間かつ？」

柳原が、道化師のような、甲高い笑い声を立てた。

「人間だよ。君たち愚か者以上にね。……ああ、愚か者といえば、

《B?2》も、君に匹

敵するね。あの女は、自分が僕に操られているのを全く気付かずに君たちをセンター内

まで見事に誘導してくれたね」

晃は、煮えくり返った腑を吐き出すように、柳原に言葉を吐き付けた。

「おまえは《B?2》に、何をしたんだっ？」

「簡単な記憶操作だよ」と柳原は、にたり、と笑った。

「《B?2》の脳には、これから自分が行動するプログラムの指示

を僕が出したという事

実を、記憶から全て消去するように、暗示を与えたんだ。《B?2

》は、僕の指示を、さ

も自分で考えて決定したように思っている」

柳原は、人の脳をブレイン・メガ・コンピュータ・システムとして、小さな水槽に平気

で押し込める人間である。《B?2》の記憶を自分の思惑で好き勝手に操作するくらい、

どうということもない些事なのだろう。

柳原という人間の本性に対し、晃はますます嫌悪と憎悪が深くなる。

晃の感情など、まるで斟酌なく、柳沢は勝手に喋り続ける。

「記憶の操作といえば、君たちを裏切った保安官、あー、名前を忘れてしまった。実験体

の名前なんて、いちいち覚えられないしね。その保安官の記憶も、《B?2》を介して、少し

操作したねえ。大体、奈波市だったか、あんな常夏場所から、わざわざサンプルを輸送

する程、免疫センターも暇じゃあないんでね。彼の家族の臓器なんて、移植も何もしていない。

今頃、土に埋めた遺体安置袋の中で、レリア・D?iウイルス塗れで腐ってるよ」

命を賭して、せめて愛する家族の断片である臓器を守ろうとした赤嶺三等官の心をも、

この無神経なマッド・サイエンティストは踏み躪ったのだ。

柳原が、記憶の操作や虚の情報で騙したのは、《B?2》や赤嶺三等官だけではない。

赤嶺三等官と同じく《B?2》と交信していた水原二等官や笠井三等官、また《B?2》

の情報を信じた麻生も、八木も奥平も、やはり騙されて罫に嵌められたのだ。

「しかし、待てよ」と、晃は考えた。

赤嶺三等官はともかく、八木や麻生、水原二等官が、柳原の嘘の情報を、そんなに簡単に

に信用するだろうか？

もしかしたら、麻生たちは《B?2》がもたらす情報の全てが正確でないことは、百も

承知していたのかもしれない。

センターの挑発に対して「釣られてやるさ」と、麻生は嘯いた。現在こうして晃が置かれている最悪の状況も、麻生や奥平は、あの程度まで予測していたのだ。柳原が悪魔なら、『奇跡の羽根』リーダーの奥平は、晃の印象としては、どう見ても妖怪変化である。

酸いも甘いも知り尽くした、海千山千の老科学者が、柳原のような若造に簡単に騙される筈がない。

本当に罠に嵌められたのは、むしろ柳原と、晃なのだ。だとすれば、奥平たちは、晃も騙して、何をしようと画策しているのか？ 晃が捕まるように仕向けて、柳原から何かを引き出そうとしているのか？

少なくとも、奥平たち『奇跡の羽根』の連中は、晃を釣り餌に使ったと思われる。ならば、もう仲間とは呼べない。

でも??と、晃はまた迷う。尋香の執拗な攻撃から、麻生は命懸けで晃を守ってくれた。その姿勢が見せ掛けだとは、とても思えない。

晃は頭が混乱した。では、いったい誰が、晃の味方なのか？ 不安が脳裏を埋めていく。

俯いたまま黙りこくってしまった晃の態度に、柳原は喉の奥に籠る、嫌な笑い方をした。

「何だい？ もう観念してしまったのか？ つまらないね。なら、日野くんがもつと怒るような、楽しい話をしようか？」

晃は柳原を見ずに、訊ねた。

「奥平先生を、知ってるか？」

「奥平？ 誰だい、それは？」

柳原は、本気で「知らない」という雰囲気を出した。晃は、

妙な違和感を持った。

先刻、笠井三等官が「奥平は元国立生物学研究所の所長だった」と、説明してくれた。

免疫センターとは異なる機関だとしても、公的施設の、しかも研究対象が一部は重なると

思われる研究機関の元所長の名を、副所長という役職に就く柳原が知らないというのは、

どう考えてもおかしい。

どちらが正しくて、どちらが虚偽を口に出しているのか？

晃の、現時点での乏しい情報では、判断はつけ兼ねた。

更に混乱し、悩み続ける晃の眼前で、柳原が大型ディスプレイの画面を切り替えた。

ビルの外の薄暗い中に戦いの火花があちこちと上がっていた景色から変わり、ディスプレイ

レイの中は、全面が目映い光に覆われた。

唐突に明るくなった眼前に、晃は眩しくて、思わず目を閉じる。

柳原の、嬉々として人をいたぶる、何とも嫌らしい声が、頭の上から降ってきた。

「ほづら、目を開けてみて見るといいよ。君の大事な『仲間』の姿だよ？」

『仲間』という言葉に、はっとして晃は目を開けた。

途端、晃は息を飲んだ。ディスプレイに映っていたのは、半裸で宙吊りにされた浅野だった。

LEDアップ・ライトの白い光が、気を失い、ぐったりと目を閉じ、やや頂垂れた浅野の、青白い顔を照らしている。

よく見ると、浅野の体の周りから無数の細かい泡が上がっている。特徴のある、ゆっく

りと上昇する泡だ。

浅野がLPF（生体保護液）に浸されているのだと、晃には分かった。宙吊りのように見えたのは、立ったままの状態の浅野が、両腕を横に広げていたからだ。

浅野が実験体として捕縛された事実よりも、晃をもっと驚かせたのは、浅野の左背面から、大きな羽根が見えていることだった。天へ向かって先端を伸ばした白い羽根は、鳥の翼に酷似している。

レリア・D？iウイルス感染者で羽化した者は、ほぼ百パーセント、肩甲骨と背中皮膚が、蜻蛉や甲虫といった、昆虫の羽根の形状に変化した。

デイスプレイに映る浅野の背後に見える羽根は、晁が見た覚えのある羽根の形とは、大きく異なる。

「面白いだろう？」柳原が悪魔のような笑顔で、晁を覗き込んだ。「ウイルス・モンスターたちはみんな、普段は長い上着で羽根を隠して生活しているから

ね。君も見るのは初めてだろう？ ……それにしても、こんな羽根は見たことがないよ。

この羽根は、一見すると鳥の翼のようだ。けど、よく見ると、外観は同じでも質が違うの

が分かる。この羽根には、羽毛がない。何十枚もの羽に見えるのは、薄い膜の重なり合いと、膜に描かれた模様なんだ。しかもこの羽根は、背中にある亀裂状の開口部から、出し入れができる」

では、この羽根は、間違いなく浅野の背中から生えているのだ。晁は、愕然とした。

「とても変わったウイルス・モンスターだ。もっとよく見せてあげよう」

柳原はデイスプレイを操作し、浅野の羽根を拡大する。柳原の解説の通り、鳥の翼に見えた羽根は、シルクのレースのように薄い膜が幾重にも重なってできている。

膜には、細い筋が規則的な間隔で刻まれており、全体を遠目で見ると、その筋と膜の重なりが、鳥の羽のように見えるのだ。

浅野もまた、レリア・D？iウイルスの過酷な洗礼を受けた《羽

化しても生き残った人
の一人だったのだ。

晃は、落胆とも嘆きともつかない気持ちで、恐らく現在では唯一の味方と思える友の、無惨な姿を見詰めた。見詰めながら、晃は「けれど」と、内心で疑問を呟いた。

浅野の体からは《羽化しても生き残った人》の特徴である、花の匂いがしなかった。もし匂っていたら、晃には瞬時に分かった筈だ。

浅野が匂わないのと、形状が変わった羽根に、何か関係があるのだろうか？

しかも、背中の亀裂に羽根が仕舞えるというが、浅野の背は自然に盛り上がったもおらず、そんなものが入っているようには見えなかった。

晃の思考を読んだように、柳原の3Dディスプレイがぐいつ、と、悪意に歪んだ顔を近づけてきた。

「日野くんにも、このモンスター??いや、君にとっては仲間か？
こいつがウイルス保菌者だとは、分からなかったんだね？ この男には『匂い』がなかったんだね？」

「な……、んで、そのことを……？」 晃は、驚きに言葉を詰まらせる。

どうして、自分が《羽化しても生き残った人》の匂いを嗅ぎ分けられる事実を、柳原は知っているのか？

免疫センターには、世界中のありとあらゆる情報が集まってくる。公安や中央官庁のメイン・コンピュータに収集された情報も、提示申請をしたものは、全部が提供されている。

市の中央コンピュータには、詳細な個人情報が記録されている。仕事場や学校などでの健康診断、身体測定の結果なども、すぐに追記される。だが、晃は身体測定やその他の、身体に関するアンケートや検査でも、一度も『匂い』の話をした覚えがない。

「どうして僕が、君の嗅覚について知っているのか、とても不思議に思っているだろう？」

柳原は、不気味な笑みを絶やさずに、続けた。

「君の妹の、日野美鈴だよ。彼女は大学に入学する際の身体測定で、人の匂いが凄く気になる」と、大学の校医に相談していたんだ。その報告を受けて、僕はひよっとしたらと

思っ、日野美鈴の極秘調査を命じた。結果、日野美鈴は《尋香》

の能力を有すると、判明したんだ」

晃は、美鈴が自分と同じ能力を持っていた事実を、今この瞬間に初めて知った。

美鈴は生前、晃には何でも話していた。兄弟姉妹の中でも年が一番近いせいかな、幼い頃から、遊びに出るにしても、美鈴は晃にくっついていた。

いつも一緒にいた。何でも相談してくれていると、思っていた。なのに、どうして『匂

い』の話に限って、打ち明けてくれなかったのか？ もし、美鈴が話してくれていたなら、

晃はこんなに、美鈴の死について考え込まなくて済んだかもしれない。

そう思った刹那、晃の頭の中で、思考がスパークした。

《尋香》と《羽化しても生き残った人》と、晃および美鈴兄妹の『能力』。

柳原は、美鈴を実験材料にするために、極秘調査したのだ。そこで《尋香》と同じ『能力』を持っていると判断、事故に見せ掛けて殺した。

晃は、柳原の、優越感に浸った顔を睨上げた。握り締めた拳が、我知らず怒りに震え始める。

柳原は、口角を引き上げた口を、ゆっくりと開いた。たった今、晃が想像した通りの答を、晃に告げる。

「日野美鈴については、最初から潰すつもりだったんだ。羽化しても生き残っているモンスターは、『匂い』を嗅ぎ分けられるウイルス・モンスターは、非常に珍しい貴重種だ。僕

たちが飼っている《尋香》の能力は、君たちの??オリジナルの《

《尋香》の能力を研究、
開発して、人造人間のコリンたちに植え付けたんだ。しかし、君たちオリジナルには、まだ僕たちが解明していない、特殊な能力がある。僕は、その能力をどうしても解明したい。
それにはオリジナルの《尋香》である日野美鈴の細胞の全てを、徹底的に分析し研究する必要があると思ったんだ。コリンの一人に日野美鈴の臓器を移植したのも、未知の能力の研究の一環だよ。ほら、臓器も神経伝達という点では、脳と同等に思考しているからね」

晃は、悔しくて、ぐっ、と奥歯を噛んだ。

たかが研究のために、柳原は、晃の大事な妹の命を奪った。しかも、潰すつもりだった

など、まるで実験用の鳥のような言い方をしている。更に、研究のために、美鈴の臓器全てを、コリンに移植したのだと。

臓器移植を受けた患者が、提供者の記憶を受け継ぐという例は、ごく少数だが、報告が

あると聞く。いわゆる『細胞的記憶理論』に関しては、臓器移植が始められた五百年以上前からメカニズム解明の研究は相当数が行われてきた。

とはいえ、残念ながら未だに理論的解明はなされていない。専門家が分かっていない現象を、晃のような素人が論理的に理解できる訳もない。

コリンが美鈴の臓器を移植されているだろうとは、晃も薄々ながら気付いていた。

晃が浅野の家の離れでコリンを見舞った時、コリンは、美鈴がどんな妹だったのかと尋

ねた。あの質問は、コリンの中にある美鈴の記憶と、晃が知っている美鈴とを、照合したかったのでは、と、晃は思った。

コリンは、美鈴の記憶を、確かに受け継いでいる。その証拠が、夕焼けのセンタービル

の情景だ。美鈴と晃の、二人だけの思い出である、茜色のセンタービルの光景を、見ず知

らずの他人のコリンが、知っているはずはない。

美鈴は確かに、コリンの中に生きている。晃は今、赤嶺三等官の

気持ち痛い程よく分かった。

なのに、柳原にとっては、コリンはただの研究材料でしかない。その上、コリンは個人名ではない、と言った。

「コリンは……、一人じゃない、だと？」

晃は、緊張でからからに乾き、嘎れた声で尋ねた。

柳原は、切れ長の目を苛ついた様子で、一層すーっと細くする。

「そう言っただろう？ コリンとは、僕たちが飼っている人造人間の総称だよ。たくさん

いるんでね。センター内では、普通、番号で呼んでいる。君の妹の臓器を移植したコリン

は、二十一番だ。従順な実験体だったんだが、残念ながら、もうすぐ廃棄処分だよ」

あまりにも強い衝撃が、晃の全身を震わせる。

コリンが、殺されてしまう。やっと見つけたと思った美鈴の『真実』が、また自分の手

元から消えてしまう。

腰を半ば浮かせ、歯を剥き出して柳原を睨む晃の目に、涙が滲んだ。

「何でだっ？ どうして、コリンを殺すんだっ？」

「薬が切れたからだよ」柳原は軽く首を傾げ、人差し指で頭を指した。

「二十一番だけじゃなく、コリンはみんな、人為的に解離性同一性障害を起こさせている

んだ。理由は、センターでの研究内容の機密保持と、ある程度、一般生活ができるように。

部分的に記憶を消去する方法もあるんだけど、やり方が難しくくてね、下手をすると、必要

な命令も忘れてしまうようになって、使いものにならなくなってし

まうんだよね。解離性

同一性障害を起こさせるほうが、より安全性が高いんだ」

浅野が、コリンの解離性同一性障害を疑ったのは、正しかったのだ。

人為的にしろ、何人ものコリンが、コリンの中にいる。では、晃が会っていた、美鈴の記憶を持ったコリンは、誰なのだ？

「じゃあ、美鈴は……、コリンの誰の中に……？」

晃は呆然として呟く。柳原が「面倒臭いねえ。これだから、ド素人は」と、顔を顰めて頬を指で搔いた。

「君が会っていたのが、主人格で日野美鈴の記憶を持った、二十一番。コリン実験体は大多数の場合、主人格は僕たち研究員に従順で、大人しい性格に造られている。尋香の能力を与えられたものだけは、副人格に戦闘用の闘争的人格を造られるけどね。コリンたちは定期的に脳内物質調整の薬を投与されて、人格の統合による、主人格の記憶の復帰が起こらないようにする。??ああ、話が大幅に逸れちゃったね」

柳原は、くるり、と晃に背を向けた。と、柳原の3Dディスプレイが消える。

晃は、ほっと両肩を下げた。

束の間、晃はまだ大型ディスプレイに映し出されている、浅野の姿を見詰めた。

晃が、浅野を巻き込んでしまった。自分が美鈴の遺体の謎にこだわりの、コリンの中に美

鈴の姿を見つけたりしなければ、浅野は捕えられたりしなかったのだ。

L P F（生体保護液）に浸けられ、実験体にされたりもなかった。何より、浅野が、お

そらくは絶対に隠しておきたかったであろう、羽化している事実を、曝さずに済んだ。

晃は、申し訳なくて俯いた。小さな声で「ごめん」と、何度も呟く。

後悔の涙が、握り締めた両手の拳と、頭上の、LEDペンダント・ライトが作った晃自

身の影に落ちた。

ぼたり、と肌に当たった涙の感触が、晃を現実に戻す。泣いていたって、事は進まないだろう、と自分自身を叱る。自分の責任だと悔やむのなら、

浅野を一刻も早く助け出さなくてはいけない。

また、笠井三等官と《B?2》の消息も気になる。晃を騙してここまで連れてきたにせ

よ、笠井三等官たち公安特殊警邏隊と《奇跡の羽根》のメンバーたちが、いずれも免疫センターに反抗しているのは事実だ。

麻生たちにも会って、本当のところを問い質したい。それにはまず、周囲に巡らされている荷電粒子の『檻』から、何としても抜け出さなくては。

何か術はないものか？ 晃は、強行軍のお陰で埃っぽくなった外套の袖で涙を拭くと、もう一度じっくり周囲を見回した。

大型ディスプレイの画面の遙か後ろに、ちらりと何かが動く気配がした。

「敵か？ それとも、味方か？」と晃が警戒した時。いきなり大型ディスプレイの画面が切り替わった。今度も、LPF（生体保護液）に浸けられた人の姿が映し出された。

晃は、浅野同様に立った姿でアクリル容器に收容されている見知った人の姿に、思わず瞠目した。

「飯山先生っ！」と大声で名を呼んだところで、ディスプレイの中の飯山医師に聞こえるはずもない。身を乗り出した晃は、飯山医師の頭部に、ブレイン・ギアと呼ばれる、脳波

を読み取り、別所にあるコンピュータにケーブルで情報を伝える器

具が取り付けられてい
るのに気付いた。

何のために？ と、心中で問いかける晃のすぐ傍に、いつやっ
きたのか、生身の柳原
が立っていた。

晃は、半透明ではない柳原の姿に、一瞬ぎよつとする。

3Dディスプレイで見ていたものと同様の、嫌らしい笑みを浮かべた柳原は、携帯電話

型の小型コンピュータで、大型ディスプレイの画面をアップにする。

「君のお友達の画像ばかりじゃあ、飽きちゃうと思ってね。紹介しよう。僕の兄だ。兄と

言っても、遺伝子的に、っただけだね。僕は、父の長年の研究の成果で生まれた天才だから

「どついうことだ……？」と柳原を振り仰いだ瞬間、晃はあつと思つた。

確かに似ているのだ。大型画面に映し出された飯山医師の顔と、

柳原の顔は、瓜二つと

まではいかないが、なるほど兄弟と言われて頷ける。

先程、初めてディスプレイで柳原に会った時、どこかで見たと思つた理由は、飯山医師に似ていたためだった。

だが、遺伝的には兄弟だ、と強調するのは、なぜなのか？

両親の一方が違うという意味なのか？ それとも、体外受精などの特殊な方法で、どち

らかが誕生しているから、なのか？

様々な状況を思い浮かべる晃にふん、と嘲りの笑いを浮かべ、柳

原は腕を組み、大型デ

ィスプレイを振り返る。

「兄は普通の生まれ方をした。けれど、僕は父の研究を継ぐべく、生まれる前から選抜さ

れた。その意味は……」

突然の轟音が、柳原の声を遮った。

何事が起きたのかと、音の方向へ首を向けた晃の目に、《B?2》と笠井二等官の姿が見えた。

二人は、混乱の中でも、上手くガスを吸わなかったようだ。晃たちの前に素早く駆け寄ってきた笠井二等官は、矢庭に柳原の腕を掴むと、荷電粒子銃を頭に突き付けた。

「やつと、お会いできました。柳原副所長。本来なら、こんな形であなたと対面したくはなかったのですが」

変わらぬ、平板な口調の中に、笠井二等官なりの怒りが含まれているのを、晃は感じ取った。笠井二等官の脇に控えていた《B?2》が、静かに、しかし鋭い声で柳原に言った。

『早く、日野くんを解放しなさい。さもないと、あなたただでは済みませんよ』

柳原は、だが、独特の、喉の奥で転がすような、嫌な笑い方をした。

「ただで済まないのは、君たちのほうだろうね？ ほら」

柳原は、顎を前方へ突き出した。と、周囲の薄闇から、保安官たちが数十人、ぞろり、と出てきた。

手に手にライフル型の荷電粒子銃を持った保安官は、脳の入った水槽の細い支柱と支柱

の間に、ほぼ等間隔で並んだ。水槽は、晃が閉じ込められた『檻』から凡そ二メートル離

れている。水槽内の脳は、ブレイン・メガ・コンピュータ・システ

ムの一部なのだ。傷付

ける訳にはいかない。

「君たちは、さぞかし上手くここへ忍び込んだ積もりだったろうけどね。僕は、君たちが

日野くんを助けにくるのは、計算済みだったんだよ」

柳原は、げらげらと大声を上げて笑った。

「一旦は日野くんを置いて逃げたけど、君たちは、絶対に日野くんを見捨てない。必ず助

けに来る。なぜなら、『仲間』だからだ、とね。??でもねえ、そもそも『仲間』って、

何なんだい？ 親兄弟、とか、友達とか、なんで君たちは、そんなものに拘泥するのかな

? 教えてくれないかな、その笠井さんちのご姉弟？」

晃は意外な事実にも、一瞬、息を止めた。

笠井三等官と《B?2》が姉弟だというのはか？　つまり《B?2》は、十二年前のレリア・D?iウイルス感染者の暴動の際に殉職した、笠井由利香二等官なのか？

八木は「自分が退院した後に、部下の、頭部のない遺体が公安の宿舎へ返されたのを聞いた」と言っていた。弟である笠井三等官も、八木とほぼ同じ事実を語った。

殉職したはずの人間が、生きている。では、つまりセンターは、笠井由利香二等官がまだ生きているうちに頭部を切断し、利用したのだ。

今、晃の周囲に林立している、水槽に入れられた脳たちと同じように『リサイクル』したのだ。

悍ましい人体実験の指揮をしたのは、恐らく、今晃の眼前にいる男だ。

晃は、笠井三等官に腕を掴まれたまま、壊れた人形のように前後に頭を振り、ばか笑いを続ける柳原に向け、怒鳴った。

「てめえは、人間じゃねえ！　人の皮を被った、化け物だ！」

柳原は一時ふっと笑いを止め、虚ろな顔で晃を見た。
「化け物、とも少し違うけどね。でも僕は、君たちが人質にして逃げるのに値しない人間

なのは、事実だね。??二課の人たち、この連中は、僕ごと射殺したらいいよ。あー、日

野くんだけは、大怪我くらいにしておいて」

「何を言ってるんだっ！　おまえ、免疫センターの副所長だろうが

っ？」

当たり前のように自分自身の射殺命令を出す柳原に、晃は驚愕と同時に疑問を抱いた。

「免疫センターの組織の仕組みがどのようになっているのか、晃にはよくわからない。が、副所長、というからには、ナンバー2の地位であろう。」

更に、先刻からの柳原の言動から察して、センターの活動の実質的な実権は、柳原が握っているようだ。

その柳原を、本人の命令があつたにせよ、反乱分子を殲滅するために、保安官が「やむを得ず」射殺するとは、とうてい考えられない。

これは見せ掛けだ？？と、晃は思った。自分を殺してもいいから笠井三等官姉弟を射殺しろ、と命ずれば、笠井三等官たちが怯む、と見ているのだが、柳原は、昏い笑みを浮かべ、衝撃的な事実を告げた。

「残念でした。僕は、ダミーなんだ。柳原聡哉という人物には、何人もダミーがいる。

僕は、その中の一人。だから、僕が死んでも、すぐに僕の代わりが出てくる。……せっかくブレイン・メガ・コンピュータ・システムの扉を破壊してまで侵入したのに、君たちが

逃げ遂せる勝算は、限りなくゼロ、だよ」

「それは、違う！」と、居並んだ保安官の背後から、突然、鋭い声が飛んだ。

晃と笠井三等官、それに《B?2》??笠井由利香元二等官も、反射的に声のした方向へ顔を向けた。

声の主は、水槽を載せた支柱の立ち並ぶ、薄暗闇のコンピュータ・

ルームを、ゆっくり

と、こちらへ向かって進んでくる。

周囲より黒い人影が動く度に、足下で何かがふらふらと動いているのを、晃は見つけた。

晃の頭上のLEDペンダント・ライトの明かりが届く範囲にまで、その人物が歩いてき

た時。人影の足下で揺れているものが長い外套の裾であり、その人物が足を引き摺っているのが原因で、気になるほど揺れが大きいのだと確認できた。

長い外套を着た人物は、晃たちのすぐ手前で、止まった。

LEDライトが浮かび上がりさせた人物の顔を見て、晃は驚愕に「あっ！」と声を上げた。

黒革の長い外套の肩程までに髪が伸び、無精髭を生やしていたが、その顔は紛れもなく、

柳原のものだった。

「いったい、何が起こっているのか？ 訳が分からず、晃は、笠井三等官が捕まえている柳原を見た。」

柳原は、先刻までの野卑な笑みを引つ込め、代わりに、恐怖とも悲哀ともつかない、硬い表情で、自分と瓜二つの男をじっと見ている。

「君の代わりは、もういない。先程、僕が残り全員を殺した」

外套の柳原に似た男が、静かに柳原を見詰めた。柳原は、低い唸り声を上げた。

「馬鹿な……！ 何でそんな無駄なことをする？ あんたのダミーたちは、これから先、

僕が死んだ後も、ずっと僕の、いや、あんたの研究を引き継げるはずだったんだぞ！」

「今の僕の研究に、何の意味がある？」

外套の男、いや、柳原聡哉・国立免疫センター副所長のオリジナルが、憐憫に満ちた深い声でダミーに訊いた。

「《YT?2》。君はずっと、自分が僕の『影』である事実を、恨んでいた。そうだろ？」

君は、僕がこの姿に……、レリア・D?iウイルスに感染、発病したために、急遽、造

られた。僕は、君に僕の体の研究及びレリア・D?iウイルスの『特異病状』を発症した

患者の研究・観察をさせた。君は当初、熱心に羽化し始めた僕を調べ、様々な発見もして

くれた。でも、その発見や研究は全て『僕』の、柳原聡哉の名で記されてしまう。君は、

やがてすぐに、自分の成果なのに、自分の名ではない男の名で、研究結果を評されるのに

気付き、不満を募らせていった。??僕さえいなければ、と。名声への執着は、この体

なる以前の僕の心に強くあったものだ。だから、君が、全ての研究結果を己のものにしな

ければ気が済まなくなったのは、僕の責任でもある」

淡々とした、《YT?2》に対する懺悔とも受け取れる、オリジナルの柳原副所長??

柳原博士の言葉に、晃はぐっ、と胸を突かれた。と同時に、晃が催眠ガスで気を失う寸前

に聞いた笠井元二等官の言葉の意味も、よく分かった。あれは《YT?2》の“わい”だったのだ。

ドクター・スーツを身に着けた《YT?2》は、乾いた、力のない笑い声を立てる。

「あんたがいるから、僕に不満があっただって? 自分を買って被るのもいい加減にしろよ。

僕の研究は、僕のものだ。あんたの名前、柳原聡哉で出ようが、僕が出した成果には変わ

りがない。僕が嫌だったのは、あんた自身だ」
「僕自身、だと?」と、柳原博士は問い返す。

「どついう意味だ?」
「わかんないかなあ?」

《YT?2》は、がちり笠井三等官に腕を掴まれたまま、柳原博士に顔を近付けていく。

「あんたの、その姿だよ。ウイルス・モンスターになった、その体だよ! 僕とおんなじ

顔の、おんなじ遺伝子を持った人間が、レリア・D?iウイルスのモンスターだなんて、

全くもつて、許せないんだよっ！」

歯を剥き出して、憎悪をあからさまにする《YT?2》とは反対に、同じ顔の柳原博士

は、悲しげな表情で口を開いた。

「《YT?2》。君の性格や行動の歪みは、間違いなく僕の歪みなんだろうね……。僕も、

きつとこの体にならなければ、今頃は《YT?2》と同じ、誤った行いをしていたんだろ

う。……人工臓器を移植すれば、回復する見込みは十分にあっただろう笠井二等官の頭部

を、僕にも内緒で違法に切断してコリンに移植し、記憶の大半を抹消して《奇跡の羽根》

を監視する役に就かせる、などという」

柳原博士は、《YT?2》を捕えたままの笠井二等官と笠井元二等官を、交互に見た。

「済まなかった。こうなる前に、僕がもっと機敏に動けていたら、よかつたんだが」

『いえ。博士の責任ではありません』と、笠井元二等官は恭しく頭を下げた。

『抹消された私の、笠井由利香の記憶を、メイン・コンピュータのメモリー・バンクの中

から探し出し、私の記憶装置に戻して下さったのは、博士です。お陰で私は、こうして弟

と一緒に、あなたのために働くことができました』

笠井元二等官の話で、ようやく晃は合点が行った。笠井元二等官が赤嶺三等官に話した

「柳原副局長」とは、オリジナルの柳原博士を指していたのだ。

柳原博士は笠井元二等官から《奇跡の羽根》の活動の様子を聞き、内々に協力していたのだ。

奥平が笠井元二等官を信用できると断言した背景にも、恐らく、笠井元二等官の後ろに

柳原博士がいる事実を知ってた。

笠井元二等官が赤嶺三等官に告げた、家族の臓器が移植されて生きていく、という話も、

間違いなく本当だろう。笠井元二等官は《YT?2》からでなく、

柳原博士から赤嶺三等

官の家族の話聞いたのだ。

柳原博士は笠井元二等官に頷くと、晃へと目を向けた。

同じ顔形であるのに、性格が変われば、こつも変容するものか？

？と、つくづく感心し

てしまう程、柳原博士の表情は、優しく穏やかだった。

「日野くんにも、お詫びが言いたい。妹の美鈴さんの件は、僕にはどうにもならなかった。

ちよつと美鈴さんがここへ運び込まれた時、僕は度々起こる羽化の後遺症の発作で、激し

い頭痛に苛まれていてね。上階の自室に引き籠ってだったんだ。僕の体調が回復して、階下へ戻った時には、既にセンター内は《YT?2》に賛同した者で大半を固められていた。

僕は《YT?2》に自室に隔離される寸前、何とかコリン二十一番を外へ逃がした。二十

一番をセンターから君の元へ送ったのは、君への警告でもあったんだ。レリア・D?iウ

イルス感染者は、血縁で症例が同一になる傾向がある。奥平先生から聞いていた、君の尋

香としての『特殊能力』を、美鈴さんも、多分有していた。その事実を、センターが突き

止めているという情報を君に伝え、羽化した者にとって、福音者になるかもしれない君を

守りたかった。……そして何より、二十一番を、美鈴さんの『形見』を君に返したかった

んだ」

「やっぱり、二十一番を逃がしたのは、あんたか」

《YT?2》が、拗ねた子供のように、口を尖らせた。

「どうもおかしいと思ったんだ。二十一番が、勝手に外へ出るはずもないし。まあ、でも、

お陰で予定より早く、日野晃が手に入ったけどね」

《YT?2》の、濁った目が、晃を見る。先刻とは変わり、全く感情の欠片も見えない瞳

に、晃はぞつとした。

「日野くんは、サンプルじゃない！」柳原博士の力強い声が、《YT?2》の視線を晃から引き剥がした。

「すぐに日野くんを解放しろ。それと、浅野くんもだ。もう、市民の人権を踏み躪る行為

は、止めるんだ」

「からからと、壊れた操り人形の手足が鳴るような声で、《YT? 2》は笑った。

「散々、市民の人権を踏み躪ったあんたが、今更この期に及んで善人になる積もりかい？」

面白いねえ、やれるものなら、やってみるといい」

柳原博士は、苦り切った表情をみると、背後で一部始終を見ていた二課の保安官たちに向き直った。

「国立免疫センター副所長の権限により、命令します。すぐに包囲を解き、日野晃以下二名を、解放しなさい」

「お言葉ですが」と、晃の真正面に立っていた、やや年嵩の保安官が一步、前に出た。

「今回の《奇跡の羽根》の行動は、もはや単に国立免疫センターへの反発という次元では

ありません。《奇跡の羽根》の行動は、我々公安及び、塔経市中央庁へのテロ行為である

と見なされます。従って、我々は、これより公安本部の作戦命令Bの実行に移り、《奇跡

の羽根》の殲滅を開始致します」

愕然とする晃の目に、保安官たちの荷電粒子銃の銃口が上がるのが映る。《YT? 2》

が、けたたましい笑い声を上げた。

「残念だったねえ！ あんたはもう、お払い箱だってさつ。権力者は、いざ事が起これば、

保身しか考えなくなるからね。少しでも危険なものは、みんな切り捨てる。副所長の権威

も、もはや紙屑と一緒に！」

柳原博士は、ぐっ、と両手の拳を握り、肩を怒らせた。目を見開き、保安官の銃口を見

ていた晃に、「僕が動いたら、出なさい」と、低く命令する。

どうする積もりなのか？ 周囲は、一分の隙もなく、保安官に囲まれている。

勝算の見当が全くつかないが、晃は言われるまま、膝を立て、すぐに動ける体勢を取った。

じりっ、と、保安官たちの輪が縮まる。先程の、二課の課長と思しき保安官が銃をやや

下げて、柳原博士に呼び掛けた。

「副所長、どうか、その場を退いて下さい。さもないと、我々はあなたも反逆者として、射殺しなければなりません」

「すればいい。僕は、これまでずっと、《奇跡の羽根》に協力してきた。それに、僕自身

も《羽化しても生き残った者》だっ！」

言い終わるか終わらぬかのタイミングで、柳原博士が『檻』の一部に腕を突っ込んだ。

ばちばち、という、荷電粒子が他の物質分子と衝突する音がする。驚き、戸惑う晃に、

激痛を堪えた柳原博士が「早くっ！」と怒鳴った。

二課の保安官の一人が、荷電粒子銃の引き金を引いた。真っ直ぐに晃に向かっていた光の束は、しかし途中で笠井三等官の撃った荷電粒子銃の閃光に弾き返される。

笠井三等官が腕を緩めた隙に、《YT?2》が水槽の支柱の間へと逃げ出した。

俄に、室内に殺気が満ちる。迷ってはいられない。

晃は意を決し、柳原博士の作った『檻』の隙間から出ようと動く。唐突に『檻』の荷電粒子が消えた。

柳原博士が『檻』に腕を入れた以上に驚き、晃は狼狽えて天井部分を見上げる。青白い

光の輪が、すつ、と、天井に吸い上げられるように消えていくのが見えた。

LEDペンダント・ライトを避けて、天井をよく見ると、直線や曲線の荷電粒子発射口

が、途中で枝分かれしながら、天井全体を長く覆っている。天井の荷電粒子発射口は、ど

うやら『檻』のためだけのものではなく、侵入者を撃退するためのものだ。

晃が理解した直後、全ての発射口が青白く光った。何事かと見上げた二課の保安官たち

の頭上に、複雑な線描の荷電粒子が発射された。

確実に射撃を受けた何人かの保安官が、激痛を訴えながら床に転がる。逃れた者も、陣形を崩し、後退する。

刹那、天井付近のスピーカーから、声が降ってきた。

「センターのコンピュータ・システムの大半は、僕がコントロールできるようにしました。

ですので、早くコンピュータ・ルームから出なさい」

聞き覚えのある口調に、「誰だ？」と言い掛けた晃の手を、笠井元二等官が掴んだ。

『ありがとうございます。飯山先生』

飯山医師と聞いて、晃は、まだ起動している大型ディスプレイを慌てて見た。画面に映

し出されている飯山医師は、ほとんど先程と変わらず、眠ったようにLPF（生体保護液）の中に浮いている。

「先生は、何で話せるんだ？ あの映像の場所は、どこなんだ？」

センタービルに侵入したのは、美鈴の『真実』を知るためと、コリンと飯山医師を助け出すためだ。

晃を引いて走り出そうとする笠井元二等官に、晃は訴えた。

「先生を探さなきゃ！」

『分かっています。でも今は、無理です』

笠井元二等官の、冷徹とも聞こえる返答に、目前の水槽の強化アクリルが割れる軋み音が重なる。

二課の保安官の撃った荷電粒子が、晃たちを外れ、ブレイン・メガ・コンピュータ・システムの一部を破壊した。

LPF（生体保護液）が水槽の割れ目から流れ出し、たちまち、水中に浮いていた脳が下に落ちる。異常事態を察知した内部制御システムが、大音響で警報を鳴らす。

晃は、保安官たちが退いてできた包囲の隙間から笠井元二等官と共に、ブレイン・メガ・コンピュータ・システムの、林立する脳の樹木の間へと逃げ込んだ。すぐ後ろからは、

柳原博士を抱えた笠井三等官がついてくる。

薄暗闇の中、二課の保安官が撃ち放つ荷電粒子の閃光と、飯山医師の操る、侵入者撃退

用の荷電粒子システムの光が交錯する。双方の銃撃によって、ブレイン・メガ・コンピュータ・システムを構築していた多くの脳の水槽が、次々と壊されていく。

「飯山先生！」と、晃は、破損し飛び散る水槽のアクリルの破片や、零れ落ちるLPF

（生体保護液）や脳を避けて走りながら、呼び掛けた。

「助けに行くから！ どこにいるんすかっ？」

必死に尋ねる晃に「僕の話は、いいですよ」と、穏やかな声が答えた。

「センターに連れて来られる時に、両足の大腿骨と、内臓の一部を損傷してしまいました。

現在は、LPF（生体保護液）と、ブレイン・メガ・コンピュータ・システムの力を借り

て、どうにか生きています。この状態では、助け出されても、すぐ死にます。……僕に構

わず、君たちは早くセンターから脱出して下さい」

「でも」と口走った晃を、笠井元二等官が、『静かにつ』と、鋭く制する。

気が付くと、眼前に半透明の強化アクリル板の壁が迫っていた。

壁の向こう側に、人のシルエットが見える。小柄な人影は、急いだ靴音と共に、晃たちの

の目の前に迫ってきた。

「下がって」と、背後にいた笠井三等官が前へ出た。荷電粒子銃を、シルエットに向けて構える。

人影が、不意にどんどんっ、と壁を叩いた。

「そこに、誰かいますか？」

声に聞き覚えがあった。「コリン！」と呼びながら、晃は一步前へ出た。

「晃兄ちゃん？ 晃兄ちゃんが、そこにいるのね？」

その呼び方は、生前の美鈴と同じだった。コリンは、完全に美鈴の記憶を受け継いでいた。

「今すぐ助けるから、壁から離れてっ！」

力強く叫ぶコリンの影が、何か大きなものを下げ持っている。気が付いた笠井三等官が、

晃たち三人を、コリンの影を中心に、大きく左右に開かせた。

直後。壁の向こう側で眩い光が輝いた。

鋸で金属を切断するような、引き攣れるような高音に続き、どーん、という爆音がした。

半透明のアクリル壁に、穴が空いた。人一人どうにか通れるだけの穴の向こう側に立つ

ていたコリンの手には、携帯式で最大級の、対装甲車砲型大型荷電粒子銃が、握られていた。

か細い少女の腕で、いったいどこから、こんな大物の銃を引つ張ってきたのか？

あまりにも突飛な登場の仕方に、東の間、白いウエット・スーツ型の戦闘用防護服に身

を包んだコリンを、晃は呆然と見詰めてしまった。

柳原博士に背を叩かれ、我に還った。

「早く抜けないと。すぐ後ろに保安官が来ているよ」

穏やかだが、緊迫した声で、晃は現状を思い出す。背後を振り返ると、数メートルも離

れていない場所で、侵入者撃退用の荷電粒子システムが、広範囲で輝くのが見えた。続く

轟音に、晃は思わず首を竦める。

先に笠井元二等官が穴を潜った。柳原博士が続いて潜り、晃の背を笠井三等官が押した。

晃たちが壁の外へ出ると同時に、中から数本の荷電粒子銃の光が伸びてきた。まだ穴の

前に立っていた晃と笠井三等官は、光を横目に捉え、素早く両脇へ転がって避ける。

晃たちが避けたとほぼ同じタイミングで、コリンが手にしていた大型荷電粒子砲の引き金を引いた。

大型荷電粒子砲の反動は凄まじい。男でも晃くらいの体格だと、簡単にひっくり返って

しまう。だが、か細いコリンが、びくともしない。晃は改めて、コリンが人造人間なのだ
と認識する。尋香たちと同じく、骨格を改造され、薬物で記憶や性格を操作されているのだ。

それでも、コリンは美鈴の『形見』だった。

追っ手が来ないのを確認し、コリンは大型荷電粒子砲を、その場に置いた。

「お兄ちゃん、早く！」

穴の脇の壁に転がったままの晃に、細い手を伸ばしてきた。晃は、生前の美鈴とは違う

が、同じように愛しい妹の手を握り返す。

コリンが嬉しそうに笑った。花のような笑顔に、晃も自然と笑みを返した。

「とにかく、この部屋から出ましょう」

柳原博士に肩を貸した笠井三等官が先に立ち、動き出す。

ブレイン・メガ・コンピュータ・システムのあるコンピュータ・ルームは巨大な円形を

していた。天井に等間隔に並んだ、正方形の小さなLEDシーリング・ライトが薄い光を落とす通路を、晃たちは丸い壁に沿って、反時計回りに出口を探して歩いた。

「玄関アトリウムには、尋香五人と、四課と五課の保安官四十人が突撃の態勢で詰めています。上へ行くしかないですね」

歩き出して間もなく、飯山医師の声が、また上方から聞こえてきた。

「君たちがいる、ブレイン・メガ・コンピュータ・システムのあるコンピュータ・ルーム

は、メガ・バイオ・コンピュータ・ルームの真下で、地下三階になります。上がるには、

申し訳ありませんが、階段を利用して下さい。現在、ブレイン・メガ・コンピュータ・シ

ステムの稼働率が六十パーセントまで落ちていますので、エレベーターの制御が全然でき

ません。……ちよつと、立ち回りを派手にやりすぎましたね」

「先生は、大丈夫なんすかっ？」苦笑する飯山医師に、晃は立ち止まり、右手の壁の上

に取り付けられた監視カメラを見ながら尋ねた。恐らく、最初にセンター内を案内してく

れた笠井元二等官と同じく、飯山医師は監視カメラで晃たちの行動を見守ってくれている

に違いない。

晃の考えた通り、監視カメラのレンズが、晃の顔を見つけて角度を変えた。

「ええ。さっき説明したように、僕はもう動けませんから。それに、彼等の……、ブレ

イン・メガ・コンピュータとなった彼等の、最後の願いも、聞き届け

なければなりません」

「ブレイン・メガ・コンピュータとなった人々の願い、ですか？」

晃は、頭の隅のどこかで、答が解っている問いを、飯山医師に投げかけた。

「『このまま、誰にも見付けられずに、永遠に眠らせて欲しい』。

?? 体を失った彼等の、

そして、彼等同様、もはや動けない僕の望みです。……それより、気を付けて下さい。ブ

レイン・メガ・コンピュータ・システムの稼働率が落ちているため、全ての階で防災シス

テムが稼働を始めています。通路確保のために、どうか防災扉の開閉をコントロールし

ようと思っっているんですが、防災システム用のコンピュータは、ブレイン・メガ・コンピ

ュータ・システムとは直結していないため、思うようにいきません。ところどころ通行止

めになると思いますので、監視カメラの映像を、『B?2』、いえ、笠井二等官の装着型

マイクロ・バイオ・コンピュータに送ります」

やや緊迫した飯山医師の声に、笠井元二等官が『わかりました』と頷いてみせた。

数秒後。笠井元二等官が装着型マイクロ・バイオ・コンピュータに、各階の一部の

監視カメラの映像が送られてきた、と告げた。

『?? コンピュータ・ルームのマークAの出入り口から、保安官が出てきます。ちょうど、

私たちの現在位置とは真反対の出入り口です』

笠井元二等官は、冷静だが緊張感を含んだ口調で伝えると、歩き出した。晃たちも、気

を引き締めて後に続いた。

『非常階段が、外壁側マークFの表示の左側にあるはずですか？？
すぐ、そこに』

笠井元二等官の指差す先に、非常階段があつた。

階段に取り付けられた防災用扉は、緊急システムによつて稼働を始めていた。

急がなければ、防災用扉が完全に閉まってしまふ。足早に扉に向かいながら、柳原博士

が、「階段は、ここだけかい？」と笠井元二等官に尋ねた。

笠井元二等官は、振り向かずに返答する。

『三か所あります。ですが、他の箇所の扉も、同時に緊急システムによつて閉鎖を開始しています。閉鎖速度と、先程の戦闘で生き残つた、二課の保安官がこちらに向かつている

現状を考慮すれば、この非常口以外の選択肢は存在しません』

笠井元二等官が説明している間にも、通路をこちらへ向かつてくる保安官たちの忙しな

い靴音が聞こえてきた。

扉は、既に半分以上も閉まっている。笠井元二等官は速足を駆け足に変えた。コリンに

手を引かれた晃も、走り出した。

反対方向からやってきた二課の、十数名の保安官が、走りながら荷電粒子銃を一斉に発

射する。

身を低くして、転がるように、先頭の笠井元二等官が防災扉の向こう側へ飛び込む。

笠井三等官が、足の悪い柳原博士を担ぎ上げ、走り出そうとした時、保安官の一人が撃

つた荷電粒子の閃光が、笠井三等官の右大腿部を貫いた。

衝撃でバランスを崩し、笠井三等官が、背負つた柳原博士と共に

倒れる。動けない二人
に向かつて、保安官たちが容赦なく射撃する。遮蔽物がないため、
二人は床に俯せる。咄
嗟に、柳原博士は自分の外套を広げ、笠井三等官の背に掛けた。

柳原博士の外套の右袖に『檻』に腕を突っ込んだ際の焦げ痕が見
えないことから、どう
やら柳原博士の外套は、耐荷電粒子の処理がされた布を使用してい
るらしい。

保安官たちは、遮二無二荷電粒子銃を撃ちまくっている。保安官
たちが容易に二人に近
付かない理由は、笠井三等官がサイボーグ化しており、接近戦では
断然有利だと理解して
いるためだ。

どうしたら助けられるかと、はらはらしながら二人を見ていた晃
の脇を、猛烈な射撃を
交い潜り、笠井元二等官が笠井三等官のところへ駆け寄った。弟の
荷電粒子銃を受け取る
と、迎撃を始める。

二課の保安官が発射する荷電粒子の閃光を、笠井元二等官は素早
く撃ち返し、悉く相殺
した。

笠井元二等官が奮戦している間に、晃は扉の前から廊下に駆け戻
り、柳原博士を助け起
こした。頭半分ほど自分よりも背の高い柳原博士を引き摺り、晃は
防災用扉へと向かう。

晃と共に廊下へ戻ったコリンが、笠井三等官の体を支える。
防災用扉の隙間は、その間も徐々に閉まっていく。

正に神業と思える射撃の腕で、保安官の攻撃を遮りながら、笠井
元二等官は弟をコリン

に任せ、防災用扉まで下がる。片手で少しでも扉の稼働を阻止しようと押さえた。

『早くっ！』という、切羽詰まった笠井元二等官の声に急かされて、晃は氣力を振り絞っ

て、柳原博士と晃自身の体を、どうにか防災扉の向こう側へ押し込んだ。

床に倒れ込んだ晃の隣に、コリンが、投げ入れられるようにして転がり込んでくる。

驚いて顔を上げた晃は、もはや人が通れぬ隙間しか開いていない扉の向こうに、ぎこちない笑みを浮かべた笠井三等官の顔を見た。

名を呼ぼうとした時。ごんっ、という、鈍い金属のぶつかる音が響き、防災用扉が完全に閉まった。

弟の名を叫ぶ笠井元二等官の声が、扉を必死に叩く音が、非常階段に訝する。

防災用扉は、火災や爆発による爆風も防ぐと同時に、向こう側の物音も完全に遮断する。

武器を持たない笠井三等官が、サイボーグ化しているとはいえ、武器を持った十数名の保安官に、たった一人で立ち向かい、無事でいられる保証は一切なかった。

それでも笠井三等官は、命尽きるまで、姉である笠井元二等官と晃たちを守るうと奮戦するだろう。

晃は、守ってくれた有り難さと、何も返す術を持たない自分の腑甲斐無さとで、胸が押し潰されそうになった。

拳を握り、悔しくて己の膝を叩いた晃の腕に、コリンの細い手がそつと乗った。

「私が……、もつと頑張つてこつちまで支えて来ていれば……」

晃が覗くと、俯いたコリンは、今にも泣き出しそうに唇を噛んでいる。

兄妹喧嘩をした時に、負けて悔しくて、だが、泣きたくなくて涙を堪えていた、きかん

気的美鈴と、全く同じ表情である。

愛しい妹が、ここにいる。晃は「美鈴」と妹の名を呼び、コリンの白髪の頭を胸に抱き寄せた。

「おまえのせいじゃない。おまえは、よく頑張った。……仕方なかったんだ」

「お兄ちゃん」と、涙声で、コリンが晃の胸に両腕を回す。

笠井元二等官が、晃と、晃の胸に顔を押し付けて泣いているコリンの傍へ近寄り、膝を付いた。

「お兄さんの言う通り、あなたは最後まで享を??私の弟の、笠井三等官の救助に当たつてくれました。ありがとうございます」

笠井元二等官の声は泣いていた。が、スクリーン・グラスの隙間からは、なぜか涙は流れていない。

疑問が顔に出してしまったようだ。笠井元二等官は、ゆっくりとした口調で、晃に語った。

「眼球と視神経を頭部の移植手術の時に損傷してしまった私には、弟のために泣きたくと

も、もはや涙は出ません。でも、こうして美鈴さんが、私の代わりに泣いてくれました』

笠井元二等官は、優しい手付きでコリンの髪を撫でた。涙で濡れた顔を上げ、コリンは

笠井元二等官に、黙って頷く。

『急ぎましょう』と、笠井元二等官は気持ちを切り替えるように、すっと立ち上がった。

『現在は、玄関アトリウムの防災用扉も閉鎖されているため、地下階の非常階段は一応は

安全ですが、敵がどんな手段でここへ侵入してくるか、判断ができません』

凜とした口調に、柳原博士も頷いた。

「そうだね。……兄さんの気力が続くうちに」

飯山医師を生かしているブレイン・メガ・コンピュータ・システムは、先程の晃たちと

二課の保安官との戦いで、多大な損傷を受けてしまった。

コンピュータ稼働率が落ちれば、その分、飯山医師の生存確率も下がる。

晃は、青白い顔で立ち上がった柳原博士を見上げた。

「兄さんとブレイン・メガ・コンピュータ・システムとの融合率は、恐らく、六十パーセント以上だろう。もう、連れ出せる状態じゃない。ならば僕たちは、

兄さんが存命なうち

に、センターを抜け出さなきゃいけない」

硬い声からは、笠井元二等官と同じ、兄弟を失う強い悲しみが感じ取れる。

晃も過去に味わった、理不尽に若い家族を亡くす悲しみを、できればもう二度と、他の

誰かに味わわせたくはない。そのために自分に何ができるのか、晃にはまだ分からない。

自分が生きて動いていれば、光は必ず差すと、信じたい。

希望の光を呼び込むためにも、晃には逃げ出す前に、あと一つ、絶対に果たさなければならぬ義務があった。

「状況が悪化してるのは分かってるけど、逃げるなら、浅野を助け出さない」と

大学を退学した晃を、浅野は何かと心配してくれた。コリンの身柄も、自身に危険が及ぶのも構わず、家族ぐるみで引き受けてくれた。

何より、命懸けで晃と共に、ここまで来てくれた。大事な親友を、置いて逃げるなんて

真似は、晃には断固できない。

晃は、強く笠井元二等官を見詰めた。

「浅野さんなら、五十二階のラボよ」

笠井元二等官が口を開くより先に、コリンが晃に伝えた。

12 (後書き)

……気が付いたら、100話を超えていました。

1部が短いので、そうなってしまったのですが。

「空を飛ぶ」は、まだもう少し続きます。

よろしければ、ご感想なり、お寄せ下さると嬉しいです。

「ラボは、五十二階と五十三階にあるの。サンプル・ラボは五十二階だから、間違いなくそこに、浅野さんはいる」

コリンの赤い瞳が、LEDの薄明かりに強く煌めく。言外に、強い「助けに行け!」と

という言葉を感じ取って、晃は「分かった」と頷いた。

『しかし』と、笠井元二等官が難色を示す。

『五十二階まで上がってしまうと、もはや逃げ道は、階下へ戻る以外に手がありません。』

浅野くんを助け出せても、退路を塞がれてしまう可能性もあります。それに、そもそも五

十二階まで徒歩で上がるのは、メンバーの体力を考慮して、無理かと

「五十二階まで??、上手くすれば、楽に行かれ??るかもしれないません」

唐突に、飯山医師が話に入ってきた。

ブレイン・メガ・コンピュータ・システムの損傷が、相当に厳しく影響しているようだ。

飯山医師の音声は、がさつき、やや聞き取りにくくなり始めている。

「たった今??、公安特殊警邏隊のA隊とC隊が、『奇跡の羽根』のメンバー二十人と合

同で??、玄関アトリウムに突入しました。この機に乗じれ??ば、エレベーターに乗れ

るかもしれませんよ。エレベーターの制御??は、ブレイン・メガ・コンピュータ・シス

テムの、残りの??機能を駆使して、何とか僕が、??頑張りますので」

飯山医師の提案に、晃は即座に「行きましよう」と賛成した。

地下三階の攻防のどさくさで逃げ出した《YT?2》が、どこへ行っていて、何をするか、皆目わからない。

勇んで階段を上り出した晃を、笠井元二等官が『待って!』と呼び止めた。

『監視カメラの映像が……、アトリウム防災用扉が、開く?!』
笠井元二等官の切迫した声と、上階からの戦闘による激しい物音が交錯した。

階段を下りてくる靴音がする。晃たちは急いで、上からは死角になる、左の壁に背を付けた。先頭の笠井元二等官が、弟の形見となった小型荷電粒子銃を構える。

が、笠井元二等官は、すぐに銃を下ろした。

「日野っ! 笠井っ! そこにいるかっ?」
八木の声だった。「俺はここっす!」と、晃はすぐさま答えた。

程なく、上からウェット・スーツ型の青い防護服に、あちこち荷電粒子銃の焦げ痕をつ

けた八木と、数人の特殊警邏隊員が降りてきた。

晃は、数時間振りに八木の顔を見てほっとした。八木は表情を凍り付けさせ、晃を無視して、真つすぐに笠井元二等官の前へと立つ。

「由利香……か?」半信半疑、といった八木の問いに、笠井元二等官は『はい』と、頷いた。

『長い間、連絡をせずに申し訳ありませんでした。《奇跡の羽根》のメンバーを通して、

幾度か課長にご連絡をと思ったのですが……!』

「いいっ!」八木は、叩き付けるように叫んだ。

「そんなことは、いい。生きてくれていたのなら……」

涙で掠れた八木の声など、晃はこれまで一度も聞いたことはなかった。零れぬようにか、

八木は口を真一文字に結び、天を仰ぐ。

やはり感極まった様子の笠井元二等官は、流せぬ嬉し涙の代わりにそつと、八木の手に己の手を触れた。

「感動の再会に水を差して申し訳ないが」と、柳原博士が、場を現実へと引き戻した。

「どうして、僕たちがここにいるとわかったんだ？」

八木はぐいつ、と拳で目を乱暴に擦り、柳原博士へ向き直った。「四課の連中がアトリウムに詰め出したんで、恐らく日野たちがメイン・コンピュータ・

ルームのある地下のどこかに閉じ込められてるだろうと踏んだんです。C隊と、麻生たち

とも合流できたんで、突入しました」

不意に上の階から、切迫した声が八木を呼んだ。

「上から尋香が降りてきましたっ！」

八木が、即座に階段を駆け上がる。晃たちも、八木に続いた。

足が不自由な柳原博士は、特殊警邏隊員の一人の肩を借り、最後尾で上った。

「麻生たちと協力して、漸くアトリウムの五人は片付けたのにつ！」

あいつら、叩いても

湧いて出るとは、害虫並だなっ」

八木の小声の悪態を聞きつつ、到着した玄関アトリウムに展開していた光景は、晃の想像を絶していた。

広い空間には、鮮血が床を染め、保安官たちの死体が、そこかしこに横たわっている。

何が焦げたのか分からない黒い物体が、紺色、灰色の、敵味双方の防護服を纏った死体の間に転がっている。

上の階から尋香が降りてきた、と、ほんの二三分前に八木を呼んだ特殊警邏隊員の姿も、見当たらない。

生きている者は？？正面玄関の前にずらりと並んだ、およそ三十人の尋香だけだった。

晃は恐怖と怒りで、その場に立ち竦んだ。

八木は、エレベーター前に倒れていた、まだ息のあった特殊警邏隊員を見付け、抱き起こした。

「おいっ！ 何があつたっ!？」

八木の呼び掛けに目を開けた隊員は、血だらけの口を開いた。

「じ、んこうが……、いきなり……っ、うえ、か、らっ。あそ……う、さんたち、は、そと、へ……」

事切れた隊員の目を、八木はヘルメットに手を入れ、閉じてやる。八木が隊員を見送っている間、コリンと同じ、白いウェット・スーツ型の防護服を着た

尋香たちは、身動きもせず、じっとこちらを見ていた。なぜ、動かないのか。晃は、コリ

ンとは似て非なる、無表情で不気味としか思えない、白髪の少女型の人造人間の集団を見詰める。

晃の隣に立ったコリンが、硬い表情で呟いた。

「指令を、待ってるんだ……」

「その通り」と、アトリウム天井付近に取り付けられていたスピーカーから、《TY？

2》の声が響いた。

晃は、思わず頭上を振り仰ぐ。げらげらと、例の品の悪い馬鹿笑いが、スピーカーから聞こえた。

「折角、尋香の中でもとびきりの腕利きを揃えたんだ。君ら全員が揃わなきゃ、やっぱり

ファイナレは飾れないでしょ？　??ああ、そうだ、柳原博士？」

「なんだ？」と問い返した柳原博士に、《TY？2》は、笑いながら告げた。

「飯山さんは、たった今、お亡くなりになりました。僕が、ブレイン・メガ・コンピュ

ータ・システムとの接続を、切って差し上げたんだ」

柳原博士の顔が、見る間に鬼の形相に変わる。

「おまえという人間はっ！　飯山知彦は、おまえの兄でもあるんだぞっ！　それを……！」

「僕は、ただの影だ。僕に兄弟なんか、いない」

《TY？2》の声音が、アトリウム内を冷ややかに流れた。《TY？2》は感情のない平

坦な口調のまま、尋香たちに命令する。

「さあ、もういいよ。みんな殺して」

尋香が、一斉に動き出す。八木と、残った特殊警邏隊員が、迎え撃つために走り出す。

続こうとした晃の袖を、細い腕が捕まえた。

「なんでっ？」と怒鳴り、晃はコリンを振り返った。コリンは、涙を溜めた大きな赤い目で晃を見詰めた。

「お兄ちゃんは、ここにいるみんなの希望なの。だから、こんなところで死んじゃ絶対いけないの！」

「でも、みんなが……」と言い掛けた晃の体を、コリンはどんと突き飛ばした。人造人

間の強い力で押された晃は、よろけて後方の壁に背をぶつけた。

その間に、コリンは尋香の輪の中へと走っていく。

晃は、連れ戻そうと体を起こした。その腕を、今度は笠井元二等官と柳原博士が掴む。

足掻く晃を、コリンが一度だけ振り返った。声はなく、ただその唇が「さよなら」と形作った。

晃の眼前まで迫った尋香たちのナイフが、コリンの体を切り裂く。

血飛沫に塗れる愛しい姿に、晃の悲しみと怒りが膨れ上がった。

激情は『声』となり、

天を揺るがす。

晃には、何がどうなったのか、もはや全く分からなかった。周囲も見えない。自分の

『声』すらも、聞こえない。

五感が封じられたような中で、一つだけ感じられたのは、『声』を出した瞬間、自分の

喉に走った、焼けるような痛みだった。鮮血が吹き出した。が、『声』は血液を吹き上げて迸る。

悲しみと怒りと悔恨が、噴水のように晃の内部に湧き続け、『声』を晃の喉から押し出した。

どれくらいの間、吼えていたのか？ 肺の酸素を全て出し切った晃は、疲れ切り、がくりと膝を床に着く。

空になった肺が空気を求めて、晃に深い呼吸をさせる。晃は、肩を揺らして息を吸い込む。喉からまた始めた血が呼気に混ざり、大きく咳き込む。

苦しさから、床面に額を擦り付け、両手で掻く。晃の額と指に、ガラスのような物質の、細かい破片が刺さった。

喉以外の痛みを感じて、晃はやっと、自分がどこにいたのか、思い出した。手と額にめり込んだ破片を落とし、慌てて周りを見回す。

美しい籠目状の特殊炭素合金の骨組みを照らしていた、可動式のLEDアップライトも、

戦闘でなのか、全部が破壊されている。

正面玄関の前庭の照明で辛うじて確認できるアトリウム内には、

五階までの壁面を成してた特殊加工アクリル板が、全て割れ落ちていた。晃の額と手先を刺したのも、特殊加工アクリル板の微細に砕けた破片だった。

破片に埋もれるようにして、幾人もの人間が倒れていた。倒れた中に、白いウェット・

スーツ型の防護服を着た、尋香らしき人が混ざっている。

ならば、この細かな半透明の破片の中に、コリンが埋もれているはず??と咄嗟に晃は

思った。晃は夢中でコリンを探した。手の傷が増えるのも構わず、床の破片を掻き回す。

三人の尋香が折り重なるように倒れている脇に、大きな血溜まりがあった。白い防護服を着た細い少女が、血の中に倒れていた。

一見すれば尋香と変わらない、眼下の少女がコリンだと、晃はすぐに分かった。

晃は、血塗れの細い体を、そっと抱き上げる。コリンの右腕は不自然な方向に捩れ、左大腿部は深く切り裂かれていた。胸や腹も裂かれ、腸が飛び出している。

コリンは精神操作のための薬が切れている、と《TY?2》が言っていた。ならば、さぞ痛かっただろう。痛みを堪え、尋香と戦った小さな体から飛び出した臓器を、晃は見詰めた。

この臓器は、美鈴のものだ。また、自分の手から、妹は擦り抜けていってしまった。今度はもう、二度と戻らない。

胸が、破裂しそうなほどに、痛い。晃は、もはや生き返ることはない小さな体を抱きし

め、声を上げずに泣いた。血に汚れたコリンの白い頬を、晃の涙が洗う。

いきなり肩を叩かれ、晃は驚く。反射的に止まった涙を手の甲で拭き、のろのろと顔を

上げると、脇に麻生が屈んでいた。

「思い切り壊したな」と、顔を歪ませる麻生の背を見て、晃は衝撃を受ける。

麻生の背中には、外套を突き破って、長い羽根が天を向いて伸びていた。

「麻生さん……、その、背中は何？」

尋ねた声は、完全に囁れていた。晃は、再び感じた痛みにも、眉根を寄せ、目を瞑る。

「大丈夫か？」と、反対に麻生が心配そうな声で、聞き返してきた。

黙って頷く晃の肩を、また、ぽんつ、と、麻生は叩いた。

「どういう現象が起こってなったのか、よく分からんが、君が吼え出した途端、体中が沸

騰するように熱くなって??気が付いたら、羽根が飛べる形になっていた」

どうして自分の『声』が、麻生たちに劇的な変化をもたらしたのか？ 動揺と疑問が隠

せない晃に、麻生は、難しい顔をした。

「君の『声』が、俺たちの進化を促した、と言ってもいいのかもしれない。今までは、羽根

はあるが、軟弱すぎて飛翔には向かなかった。自力で動かすのもままならなかったしな」

「晃くんの『声』が、覚醒したんだよ」

柳原博士が、晃たちの背後から声を掛けてきた。振り向いた晃は、柳原博士の背にも、

麻生と同様、黒褐色の、蜻蛉類のものに似た巨大な羽根が、天へ向かって伸びているのを見付けた。

「博士、俺は、いったい???」

痛みを堪え、晃は精いっぱいの声で尋ねる。途端、灼熱の玉が奥から迫り上がってくる

ような感覚が喉に走り、晃は血の塊を吐いた。再び咳き込む晃の背を、柳原博士が屈んで

擦る。晃が落ち着いたのを見計らって、柳原博士は晃の喉を診た。

「まだ……、完全には固まっていないようだね。しばらく喋らないほうがいい」

晃は素直に頷く。痛みが酷く、言われなくとも、もう声を出す気にはなれない。

晃の代わりに、麻生が柳原博士に訊いた。

「覚醒って、どういうことなんですか？」

「生物は、種によって、それぞれ異なるバイオ・レゾナンスを有し

ている。僕たち《羽化しても生き残った者》は、レリア・D？iウイルス感染、発症で細胞が変化したために、もはや普通の人間とは種が違うとっていい」
硬い表情で答え、柳原博士は、晃と麻生の傍から、近くに倒れている尋香の傍らへと移動した。

「来なさい」と、柳原博士は晃を手招いた。

コリンの体をそつと床へ横たえようと、晃は戸惑いながら柳原博士の横に立つ。

「死んでいるよ」と、柳原博士は尋香を見下ろした。赤い目を見開き、まるで蠟人形のように動かない尋香を、晃は見詰める。

「僕たち同様、人造人間である尋香たちも、能力を植え付ける目的で、レリア・D？iウイルスのRNAを一部の細胞の遺伝子に組み込み、人工的に異常を引き起こしている。そのため、やはり普通人とは種が異なる。従って、僕たちも尋香たちも、通常の人間とはバイオ・レゾナンスが、恐らく違う。当然ながら、君たちオリジナルの尋香も、僕たちや普通人とは、もはや別種だ。奥平先生から話を聞いて、ある程度の仮説は立てていたが、君の『声』は？？実験データは全くないので、正確ではないが？？多分、尋香たちには心肺停止を、僕たち《羽化しても生き残った者》には、更なる進化をもたらした。しかも」

柳原博士は唐突に言葉を切ると、晩春の、温くなり始めた夜気が流れ込む、壁の落ちた

天井を見上げた。晃と麻生も釣られて、柳原博士の目線を追う。

と、特殊炭素合金の籠目の間から、夜空の一点に、鳥のように飛ぶ大きな物体があるのが見えた。

飛翔物体は、正面玄関の前庭の照明に照らされ、旋回しきらきらと煌めきながら、こちらへと向かってくる。

やがて、光る『大鳥』の正体が浅野であると、晃は気付いた。

閉じ込められていた強化アクリルのサンプル用カプセルから、どうやって抜け出したの

か？ また、どうして薄い膜のような羽根で、自在に空を飛ぶことができるのか？

半日にも満たない時間で、様々な出来事が目紛しく起こり、晃の脳の処理能力は完全に低下している。浅野の飛翔をどう捉えていいのか分からず、呆然としてしまった晃の目の

前へ、特殊炭素合金の籠目を巧みにすり抜けた浅野が、ゆっくりと降り立った。

浅野は、いつもの柔らかい笑みを、晃に向ける。

「悪い。心配かけちゃって」

ディスプレイの中の映像ではなく、生身の浅野が、笑っている。

ほっとして、気が抜け

てしまった晃は、不覚にも、またも涙が零れそうになった。

だが、泣くのはみっともないので、ぐっ、と涙は堪えた。

「どうやって、LPF（生体保護液）の中から、脱出したんだい？」

柳原博士が、興味深げな様子で浅野に尋ねる。浅野は、晃の隣に立った柳原博士を、驚

いた顔でしげしげと見詰めた。

「ええと、初めてお会いしますか？」

「ああ、失礼。僕と浅野くんとは初対面になる。ただし、君は、もう一人の僕には会っていると思うが」

真顔で答えた柳原博士に、浅野は小首を傾げる。

「もう一人のつて……、あっ！」

気が付いた浅野が、分かった、という顔で晃を振り返った。声が出せない晃は、浅野に

「二人」という意味で、指を二本、立てて見せた。

晃の言わんとするところを、浅野は、「博士は双子？」と、ややずれて解釈してくれた。

「違う。浅野くんをサンプルとして捕まえたのは、柳原博士のクローンの《YT?2》だ」

麻生が、正解を浅野に教える。晃は、やはり麻生も《YT?2》の存在を知っていたのだと、納得する。

先程、アトリウムで麻生と柳原博士が出会った時に、二人が挨拶

をしなかったので、晃

は薄々、麻生と柳原博士は顔見知りだろうと考えていた。

「そうなんだ。……ああ、ええと。どうして僕が、脱出できたか、でしたよね？」

浅野は苦笑すると、自分のせいで横道に逸れた話を、元に戻した。

「サンプル用カプセルが、いきなり割れたんです。直後に日野の『声』が聞こえて。半覚

醒状態だった俺は、日野の『声』で完全に目が覚めました。で、強化アクリルの割れ目

を夢中で叩いて広げて、脱出しました。??羽根が勝手に広がって、五十二階の割れた窓

から飛んだ時は、さすがに自分でもびっくりしたけど」

浅野も《羽化しても生き残った人》の一人である。先程の柳原博士の説明からすれば、

浅野は晃の『声』によって進化したのだ。

楽しみに語る浅野に、晃は、困惑して俯いた。

「恐らく、晃くんの『声』が、強化アクリル製のサンプル用カプセルを割ったんだろう」

柳原博士が、静かに断言した。

「音は光と同じ。いや、光以上の威力を持つ場合も、あるよ」

理屈は分かった。が、自分の『声』に、サンプル用カプセルや、アトリウムの壁面の特

殊加工アクリルを破壊するような力があるとは、どうしても思えない。

あり得ない、という意思表示に首を振った晃のリアクションに、

浅野は「そうだね」と、

真顔になった。

「俺だって、もし自分がそんな凄まじい能力をいきなり発揮したら、俄には絶対に信じな

いと思う。……尤も、今さっき自分が滑空してきたのも、信じられ

「ないでいるんだぜ」

その時、正面玄関の前庭にエアカーが一台、入ってきた。ヘッドライトの強い光がもる

に目を射て、晃は慌てて片腕で両目を覆った。

「敵か？」と、緊張した面持ちで呟いて、麻生が玄関口まで飛ぶ。床一面に散らばった、

特殊加工アクリルの破片の上を、一度の跳躍で躍り越えた。

晃の『声』は、麻生たちの体内に共生したレリア・D？iウイルズに、驚異的な変化を

もたらしたらしい。変異で強くなっていた麻生の筋力は、更に信じられない程の強靭さを

手に入れた。

ややあつて、麻生が「味方だ！」と隻腕を振り、晃たちを招き寄せた。

麻生に心え、浅野と柳原博士もまた、跳躍する。晃は、浅野に抱えられて、玄関まで移動した。

跳躍すると同時に、羽根を広げていた浅野は、一度だけ羽搏いた。形状から想像される

通り、ばさつ、という、鳥の羽音に似た風切り音が、晃の耳を打つ。

玄関先に留まったエアカーから降り立ったのは、木村女史だった。

灰色の、特殊警邏隊

の防護スーツを纏った木村女史は、最初に玄関を出た麻生に微笑むと、浅野に会釈した。

「遅くなつて、申し訳ありません。……特殊警邏隊の者たちは？」

スクリーン・グラスを外した木村女史は、些か焦っている表情で、晃たちを見回し、次

いで、麻生の脇からアトリウム内に視線を走らせた。

「私がこちらに到着する寸前に、八木二課長から、アトリウムへ強行突撃をする、という

内容の連絡が来ました。??まさか、全滅したと?」

ヘッドライトに横顔を照らされた、白く美しい顔を不安に歪める木村女史に、麻生が、

「いや」と、首を振った。

「全滅はしていない。特殊警邏隊員は、晃くんの『声』のせいで、気を失っているだけだ」

「それは、どういう??」木村女史の質疑を、エアカーに同乗してきた特殊警邏隊員の一人が遮った。

「隊長! 内勤のメンバーから、公安サブ・コンピュータの一部が復旧した、との連絡が

入りました!」

車窓を開けて怒鳴った警邏隊員を振り返り、木村女史は頷く。

「予測より、かなり早かったようですね」

緊張した面持ちの浅野に、木村女史は、「確かに」と、冷静な口調で返した。

「色々と調査したい部分はあるのですが、サブ・コンピュータが一部復旧したのならば、

公安は更に我々の組織の殲滅のため、本格的に保安官を増員してくるでしょう。取り敢え

ず、この場は一旦センタービルを離れるのがいいでしょう」

木村女史が乗車してきたエアカーと、近くに待機させていた三台のエアカーに、笠井元

二等官ら怪我人と、八木を含めた補佐の人数を乗れるだけ乗せると、《奇跡の羽根》のメンバーと、まだ元気な晃と警邏隊員は、屋上まで階段で昇った。

残りの警邏隊員たちは、《奇跡の羽根》のメンバーが抱えて飛ぶ。しかし、麻生たちの

羽根では、地上から飛翔するのは難しい。屋上から飛び出し、気流を捕えて滑空するのだ。

真樹区には晩春のこの時季、オオトゲアレチウリが占める市街地から、強い風が吹き込

み、ビルに当たる。真樹区ビル群の中でも、センタービルは頭一つ背が高いため、ビルの屋上付近には強い吹き上げの風が通る。

麻生に抱きかかえられて、晃は空へと飛び立った。

総勢五十三人の《羽化しても生き残った人》は、時折、微妙に浮力を増すため羽根を動かすのみで、巧く気流を捕まえて滑空している。

地上を見下ろすと、夜の間は外出禁止令で影も見せなかった真樹区南外縁の住人が、異変を感じたのか、住処の窓から黎明の空を見上げていた。

明け方の薄明かりでは、住人たちの表情までは窺えない。だが、麻生たちの飛翔する姿

に、十二年前の悲劇を思い出し、皆、驚き慌てているだろうことは容易に想像できる。

晃は、騒がしい声に気付いて後方を振り返った。

《奇跡の羽根》のメンバーと、公安特殊警邏隊隊員がセンターを退

去したのと入れ替わりに、増員の公安保安官らがやってきた。空を飛ぶ《奇跡の羽根》のメンバーを見付け、保安官のエアカーが慌てた様で追跡してくる。

最後尾を飛ぶ特殊警邏隊のエアカーが、追跡車両からの荷電粒子銃の攻撃を、辛うじて躲した。

「まずいな。このままじゃ、追いつかれる」
強靱な隻腕に晃を抱えた麻生は、厳しい表情で呟く。

その間も、追尾してくる保安官のエアカーから、次々と荷電粒子銃の閃光が飛び出してくる。幸い、相手も空中では狙いが定まらないようで、こちら側にまだ被害はない。

しんがりの特殊警邏隊が応戦を始める。が、このままでは早晚、犠牲が出る。麻生の首に両腕を回している晃は、喉が痛まぬよう最小の音量で、麻生に告げた。

「俺、歌います。……木村さんたちに、耳、塞ぐように、伝えて、下さい」

麻生は顔色を変えた。

「無茶をするな。今はまだ、『声』を使える状態じゃないだろう？」
晃は、大丈夫だと口に出す代わりに、頷き、片手を離して親指を立てて見せた。

他に打つ手がないのは、麻生も分かっていた。晃の『声』は、八木たちが昏倒した通り、普通の人間にとっては強力な催眠効果がある。

麻生は渋い顔で、ちらりと後ろを振り返った。近くを飛んでいた、連絡役の《奇跡の羽

根》の仲間に、「由貴たちに、晃くんが『声』を出すから、耳を塞げと伝えてくれ」と告

げる。

仲間は「了解」と片手を挙げると、携帯電話を取り出し木村女史に連絡を取った。程な

く、仲間が、木村女史が了承した旨を告げた。

直後。すぐ後ろに迫った保安官の車から、麻生に向けて荷電粒子銃が発射される。

羽根の角度を巧みに変え、麻生は空中でくるりと一回転して閃光を避けた。素早い旋回

だったが、以前、倒れる寸前のコリンをがっしりと支えた麻生の靱い隻腕は、しっかりと晃を捕まえて安定している。

晃は、麻生が体勢を戻すのを待って、歌い始めた。

喉は、まだ脈打つリズムの痛みを放っている。しかし、今は、自分は絶対に歌わなくてはならない。

いや、歌わなければ、自分がここにいない意味がない 美鈴のために、コリンのために。

レクイエムを。『空を飛ぶ』を。

緑の鳶の海の中に、僕らは生きている

渡ることでできない海は、どこまでも僕らの目の前を塞いでいる

昔あったと言われる碧い水の海も、色とりどりの山も、今は見えない

けれど、僕の心は鳶に埋まらない

僕の想いは翼を広げ、鳶の這う大地の上を自由に飛び回る??

晃は、幾重にも音が重なる自分の『声』を、不思議な気分で聞きながら、『空を飛ぶ』を歌い続けた。

歌ううちに、晃の脳裏に、浅野のバルバットの音が蘇った。精緻で華麗な浅野の演奏を

思い出しながら、晃は、気持ちを込めて『声』を張る。

「やはり、いい『声』だな」と、麻生が呟くのを、晃は微かに聞い

た。

歌っている間も、こちらに間断なく飛んできていた荷電粒子銃の閃光が、いつの間にか止んでいた。

晃は『声』を止めずに、後方を振り返る。思惑通り、追跡車両は降下を始めていた。

二十台ほどの公安のエアカーは、相次いでふらつきながら、地上へと降りていく。強烈な睡魔に、保安官たちはついに降参したようだった。

晃は、最後の一台が地表へ降下したあとも、歌い続けた。

やがて、太陽が昇り始めた。麻生たち《奇跡の羽根》のメンバーは、上空の季節風を捕

え、更に高く上昇すると、朝日を左に針路を取る。

眼下には、登詩磨区の市立大図書館が見えてきた。晃は歌いながら、大昔の宗教施設の形に似せた、尖った屋根の上の象徴的な白い十字のシンボルを見下ろす。

古の人々は、聖堂と呼ばれた施設の中で、信じた神に向かって何を祈ったのだろうか？

家族や、己の安泰か？ それとも、来世での幸福か???

突然、麻生の羽根が下降気流に捕まり、一気に降下する。地上数十メートルで再び上昇気流を捕え、見るみる空へと戻る。

墜落するのか？ と、ひやりとして、一瞬、『声』を止めた晃に、麻生は「すまんな」

と、苦笑いを見せた。

「少々、聞き惚れ過ぎた」

小さい区画の登詩磨区は、あっという間に市境になる。その先は、延々とオオトゲアレ

チウリが広がるだけの世界である。緑の鋼鉄が晩春の陽光に輝き出す光景を見ながら、晃

は気を取り直して『空を飛ぶ』の最後の歌詞を歌った。

「『それでも、僕たちは生きていく。鳶の這う大地の上で』??」

免疫センタービルでの戦いから、三ヶ月。晃はG?1ポイントのラボで、覚醒した『声』

の調整と、柳原博士の研究に参加していた。

幾分か涼しく感じられるようになった初秋の風が、大木の林の中を抜け、森林観察室の

大窓へと流れ込んできた。

G?1ポイントは、塔経市の北、二百年前までは新光市と呼ばれていた場所にある。古代の人々が霊場と呼んで信仰し、社と言われる建造物も多く建てられていた。

現在は、オオトゲアレチウリにより、貴重な文化遺産である社も、全て破壊されてしまっている。

そんな場所に、奥平はラボを造っていた。理由は、今、晃の眼前に広がる大森林である。

「植物とは、時に摩訶不思議な現象を引き起こすものだ」

観察室の大窓の外、様々な樹木が勝手に生殖している『庭』を眺めながら、晃の傍らに立った奥平が笑った。

G?1ポイントは、奥平が国立生物学研究所の所長職を退いた二十年前に、発見した場所だった。

国立生物学研究所所長だった当時、奥平は免疫センターの顧問も兼任していたが、『レリア・ウイルスとの共存を模索すべき』と唱え、『レリア・ウイルスの撲滅』を提唱する

免疫センター副所長だった柳原博士と飯山医師の父、柳原実聡博士

と意見が対立し、顧問を辞任した。奥平が国立生物学研究所を去った後、免疫センターが国立生物学研究所を吸収した。

「この大窓から真正面に見える玉楠は、実はオオトゲアレチウリにとって、ツルガラシ以上の天敵なんだよ。この森の玉楠は、発芽して、丈がニメートルを超えるまでは、茎と葉から強酸性の樹液が大量に分泌される。触れれば、如何なオオトゲアレチウリと言えど、すぐに溶かされてしまふんだよ」

楽しそうに説明する奥平に、晃は感嘆して改めて玉楠の大木を見上げる。

晃は、今日は、午後から柳原博士のラボに出向く予定になっていた。その前に、奥平に呼ばれ、この観察室にいる。

今は昼休みで、観察室のある植物ラボの研究員は皆、てんでに食事へと出ていった。二時間と、たつぷり取られた休憩時間中には、地下の居住区で仮眠をする研究員もいる。

晃も、地下に部屋を貰っていた。家族用のスペースで、後から呼び寄せた家族とともに住んでいる。

兄たちも、ラボの手伝いや、他の拠点からの食料や水の運搬の仕事に就いている。

「ニメートルを超えてからも、近くにオオトゲアレチウリが根付くと、たちまち葉から毒性物質を分泌する。人間も、触れれば危険な種なんだ。しかし、この玉楠??新光玉楠、

と私が名付けたんだが??の若木の強酸が全く大丈夫な植物もいる。

それが、下草に生えるケスゲだ」

奥平が、細かい毛にびっしりと覆われた、細長い葉を放射状に広げた、五十センチ程の丈の植物を指差した。

「新光玉楠の根元に生えるケスゲは、葉と茎の表面の羽毛のような毛に、新光玉楠の若木

の樹液を受ける。ケスゲの毛には、ある程度まで酸を中和する成分があるので、完全に溶

けてしまうことはない。代わりに、新光玉楠の若木の強酸樹液を纏うことで、オオトゲア

レチウリに覆われるのを防げる。??長い間、この星の主演はオオトゲアレチウリだけだ

った。我々人間でさえ、オオトゲアレチウリの前には、無だ。しかし、植物は賢い。いつ

までもオオトゲアレチウリだけに、大地の支配は許さない。昔のように、皆が共存する道を、植物たちは模索しているんだよ」

にっこりと笑う奥平に、晃は真顔で頷いた。

晃たちのいる観察室の扉が、ノックされる。

「先生。浅野です。入ります」という声と同時に、浅野が扉を開けた。

紺色の長袖のジーンズシャツを着た浅野の背に、鳥の翼のように見える巨大な羽根はない。

い。本当に出し入れができると見え、普段は、着衣だと全く普通人と大差がないのだ。

浅野の後ろには、柳原博士がいた。柳原博士は、奥平たちと同じく、羽根を隠すための長い上着を羽織っている。

ただし、以前のような重そうな外套ではない。このラボで開発された、植物繊維でできた軽くて薄い素材の上着だった。

柳原博士や奥平たち《奇跡の羽根》のメンバーの羽根は、三ヶ月前に晃の『声』によって変異して以来、通常は以前と変わらない形状だが、飛ぶ時には上へ開くようになった。

晃は、柳原博士に会釈すると、浅野の肩に手を乗せた。

「久しぶり、でもねえか。ここんどこ、忙しくて、会っても話してなかったな」

晃の声は、喋る時はほぼ以前と変わらない。柳原博士の検査では、多重音になる理由は、声帯膜が、通常より部分的に厚みを増し、笛状の細かい突起ができ、その突起に空気が通

るためだという。古楽器の笙に似た仕組みである。

普段の会話程度では、笛状突起はできない。ところが、歌うと、笛状突起が形成され、多重音となる。

晃の言葉に、浅野は「そうだな」と、笑った。

「俺は、二週間くらい、父とG?2ポイントへ行ってたんだ。??

ああそう、それで」と、浅野は奥平に向き直る。

「兄から、G?3ポイントへ、連絡が入りました。中央は、先生の要望書を全面的に受諾する方向で、一致したようです」

奥平の要望書の内容とは、晃は口頭で聞いたただだが、『真樹区外縁住人への差別の撤廃』と『免疫センターの解散』の二つだ。

もちろん、奥平の要望書を受諾するよう中央に強力に働きかけたのは、浅野の父だ。

奥平は浅野公安局副局長と、今回の一連の攻防の以前からずっと水面下で連絡を取り合っていた。

晃と、妹美鈴の件も、奥平から晃の『声』の重要性が浅野の父に伝えられ、やはり晃が推測した通り、浅野の父が、元保安官で一番信用の置ける八木に、晃を八木の店で雇い、身の安全を計るよう指示していた。

ただ、G?1ポイントに到着して、落ち着いた頃に麻生に訊ねたところ、晃の『声』の重要性を具体的に把握していたのは、奥平と柳原博士だけだった、という。麻生たち《奇跡の羽根》のメンバーには、晃のことは「妹の件で中央に不信感を抱いている、重要な協力者」と、伝えられていた。

晃の『声』の特殊性がメンバーに教えられなかったのは、恐らく、柳原博士にしても、

オリジナルの《尋香》という存在がどういうものなのか、まだまだ解明しきれしていないので、明解な説明が難しく、メンバーに混乱を招き兼ねないと判断さ

れたためだろう。

もつとも、《羽化しても生き残った人》の大半が、晃の『声』の貴重性は察知していたらしい。

「これで、漸く十二年前の悪夢から、皆が解放されるな」

浅野の報告を聞いた奥平は、深く頷いた。

「兄も《YT?2》も、浮かばれますよ」

柳原博士の、安堵とも諦めともつかないような声音に、晃は少し胸が痛んだ。

柳原博士のクローンだった《YT?2》は、尋香と同じく、晃の『声』で死んだ。柳原

博士自身、人工子宮で誕生しているのだが、《羽化しても生き残った人》となったために

死を免れたのでは、と柳原博士は推測した。

が、実のところは、遺伝子と細胞の詳細なデータを見なければ分からない、という。

更に、オリジナルの《尋香》である晃の『声』が、人造人間の尋香に死をもたらしただけのカズムも、これからの研究課題だ。

奥平が、穏やかな顔で、柳原博士に頷いた。

「世界は、我々の知らないところでダイナミックに変貌している。何もかも把握した積もりで、神の代行者を気取っていた免疫センターが解体され、新しく

様々な角度からの研究が進めば、人間も少しは自然の偉大さに、本当に近付けるかもしれないね」

「この羽根も」と、奥平は、皺の多い手で、自分の背中を叩いた。

「自然と融合しようと、人が模索した結果なんだろうね」

「浅野、少し、外歩くか？」晃の誘いに、浅野は柔らかく笑って頷いた。

晃は、観察室の大窓の左脇の扉から、庭へと出た。

鬱蒼とした緑の青臭い臭いが、鼻をつく。人一人がやっと通れる幅に敷石が埋められた

だけの簡素な遊歩道を、晃は浅野と前後して歩いた。

「店長がさ、こっちでもまたミュージック・パブをやるって、言い出してるらしいんだ」

晃は、軽い調子で切り出した。

本音をいうと、迷いがあった。《羽化しても生き残った人》の人だと分かった浅野に
対し、体の話題に触れてもいいものだろうか？

しかし考えて、晃は避けた。

「《B?2》……、じゃない、笠井二等官の情報を集めるためと、浅野のお父さんに頼ま

れた、俺の護衛のために店をやったのかと思ってたんだけど、意外とああいう仕事、好き

みたいでさ。??八木さんの顔からは想像できないけど」

苦笑混じりに話した晃に、浅野は「うん」と、微笑んだ。

「……俺、正式に大学を退学したよ」

浅野の唐突な話に、晃はびっくりして振り返った。

「何で？ 奥平先生と中央が和解したんだ。また戻ればいいだけじゃないか？」

「体のこと……。柳原博士の研究に協力もしたいし。何より、やりたい目標ができたんだ。

で、そのことで昨日、柳原博士に相談してた」

笑みを崩さず、しかし断固とした口調で、浅野は言葉を続けた。

「音楽を、本格的にやりたいなと思って。……それで、なんだけどさ。日野、本当に、一

緒にやらないか？」

晃は一瞬、絶句する。

浅野が音楽を本気で好きなのは、ホワイト・ウインドで競演した時に、分かった。バル

バットの演奏の腕も、耳に残るほどに、群を抜いている。

無論、晃も歌うのは好きだ。だが、オリジナルの《尋香》として覚醒した自分の『声』

は、聞く人に、心地よさよりも害を与えはしないか？

答えに迷う晃に、浅野は更に言った。

「昨日、柳原博士に会う前に、実は八木さんと、笠井元二等官に会ったんだ。笠井さん、

もうすっかり元気になってたよ。……センタービルで、マイクロ・バイオ・コンピュータ

が日野の『声』でフリーズしてしまう直前、笠井さんは、天使を見たって言った。恐ら

く、混乱したコンピュータ・システムが、見えるはずのない映像を送って超越したんだろ

うけど。でも、その天使が、とても綺麗で、自分が日野の『声』によって命を落とすかも

しれない、なんてことは、思い浮かばなかったって」

晃は、内心で戦いた。

晃にとつての天使は、美鈴だった。美鈴の『形見』だったコリンを失う光景を目の当た

りにしての『声』の覚醒だったので、波動の中に美鈴の、『天使』のイメージを晃は無意

識に含ませていたのかもしれない。

とすれば、笠井元二等官が見た『天使』の映像は、コンピュータの誤作動ではなく、晃

のイメージが『声』によって伝えられ、表現されたものだ。

人々に、己の意志を強く焼きつけてしまう自分の『声』に、晃は

再び恐怖を抱く。

「俺……、やっぱり、歌えない」

自分自身への恐怖心に喘ぎながら、晃は呟いた。

更に森の奥へ、足早に向かう晃の背を、浅野の真剣な声が追い掛けてくる。

「『声』なら、気にすることは無いって、柳原博士も言ってた。訓練すれば、きつと普通

に歌えるようになるって」

晃は、逃げ出したい気持ちを抱え、振り向かずに進んだ。

やがて、折り重なるように茂っていた木々が途切れた。観察用に人為的に作られた小さな広場に、晃は足を踏み入れた。

免疫センターを後にする時、木村女史に頼んでエアカーに積んでもらったコリンの遺体は、G?1ポイントへ到着してから、茶毘に付した。焼け残ったチタン合金製の骨を粉々に碎き、この森へと撒いた。

森は、奥平や《奇跡の羽根》のメンバーの考えで、巨大な散骨場としても使われている。今回のセンターとの争いで亡くなった、笠井三等官や益田三等官の骨も、それと、赤嶺三等官の遺骨も、中央との和解が済み、遺体を引き取れば、ここに撒かれる予定になっている。

晃は、コリンを茶毘に付す前に、柳原博士に許可を貰い、コリンの体から美鈴の心臓を取り出して、セラミック製の壺に入れた。壺は、この広場の片隅に、小さな墓を建てて納めてある。

晃は、半径十メートル程の広場を、真っ直ぐに突っ切り、コリンの??美鈴の墓の前へと立った。

追い掛けてきた浅野が、晃の隣に並ぶ。眼前の、白い小さな墓標を見詰めて、晃はぐっ、と拳を握った。確かに、柳原博士の研究室で幾度か『声』の実験をした際、歌い方によって人体への作用が出たり出なかつたりはした。

だが、今のままの晃が『声』を使えば、誰かしらに被害が及ぶ。人の心も体も支配して

しまい兼ねない『声』を、もう暫くは使いたくない。

いや、できれば一生、人前では、使いたくない。

晃の心中を察した浅野が、らしくない強い声を上げた。

「日野の『声』で、誰も不幸になったりしない！ 日野の歌は絶対、人の心を癒す。少な

くとも、俺にはそう聞こえる！」

「だから！」と、浅野は強く晃の肩を掴んだ。

振り返った晃の目の前で、浅野は笑った。

初秋の木漏れ日に、白く輝く、優しく、それでいて力強い安心感を与えてくれる、浅野の笑顔。

コリンは？？美鈴は、最後の別れ間際、晃がみんなの希望だと言った。だが、浅野のこ

の暖かなこの笑顔にこそ、人を助ける力があると、晃は思った。事実晃も、浅野の言葉を信じてみよう、と思い始めている。

妹への悲痛な鎮魂歌ではなく、人々を慰める歌を、歌えるかもしれない、と。

「俺は、歌っても、いいのかな……？」

怖々と訊ねた晃に、浅野は「ああ」と明るく頷く。

「勿論。歌えよ、『空を飛ぶ』を含めた、もっと多くの歌を」

晃は慎重に頷くと、もう一度、白い墓を見下ろした。

彼方の世界へ行った、二人の妹に聞こえるように。この『声』が、破壊や混乱ではなく、

人々に慰撫と安堵をもたらすように、祈りながら。

晃は大きく息を吸い込むと、歌い出した。「バルバットを、持ってくればよかった」と

小さく苦笑した浅野が、低い声で伴奏を歌う。

樹木の枝を揺らす風に乗り、森林の上へと伸びていく晃の『声』は、空へと吸い上げられる。

空を飛び回った歌が、どこへ行くのか、晃には分からない。しかし、決して悲しみや苦しみを含んで戻ってはこないと、晃は信じようと思った。

空を飛ぶ 完

10 (後書き)

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

「空を飛ぶ」は、これで完結です。

いろいろと、書き過ぎたり書き足りなかったりした物語ですが、楽しんで頂けたなら、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3029t/>

空を飛ぶ

2011年7月24日17時56分発行